
とある魔法少女と不幸な転校生

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法少女と不幸な転校生

【NZコード】

N3166Y

【作者名】

Hiro

【あらすじ】

海鳴市にある私立聖祥大附属小学校に一人の転校生が現われた。

少年の名前は上条当麻と言った。

少女達との出会いは少年に何をもたらすのか。
三人の少女と一人の少年の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

今回、子供の上条当麻となのは達のキャラクターをクロスオーバーさせて見たら、どのようになるのか興味を抱き、このような小説を書かせていただきました。

尚、この小説に出てくる上条はなのは達と同い年ですので、原作の上条当麻とは少しばかり性格が異なるかもしれませんので、ご注意ください。

後、更新速度がゆっくりになるかも知れませんが、それでもよろしくればお願ひします。

プロローグ

少年はどうにまでも『不幸』だった。

周囲の子供は彼の姿を見るなり石を投げ、周りの大人もその行為を止めようともしない。

疫病神と呼ばれ、蔑まれ続けた少年。

借錢を抱えた男に追い回され包丁で刺されたこともあった。

マスク^{マスク}化け物^{ハカラツ}扱いされ、カメラ^{カムラ}されたこともあった。

そして…少年は両親を事故で失った。

唯一の味方さえ失った少年は孤独だった。

そんなある日、彼は両親の知り合いと名乗る人物から海鳴市に行くよう促される。

九歳の上条当麻は、海鳴市での新たな生活を始めるのだった。

第1話 担任は幼女!?(前書き)

相変わらず色々残念ですが、頑張っていきたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

第1話 担任は幼女！？

電車に乗って海鳴市に向かう少年。

今まで住んでいた場所とは全く異なる土地で、新たな生活を始めることになる上条当麻。

しかし、少年は新生活に胸を躍らせたり、不安を抱いたりするつたことは一切無かつた。

元々住んでいた場所では、陰湿ないじめを受け続けて、両親を事故で失い、少年は何もかも失った。

海鳴市で新たな生活を送ろうが、自分が疫病神であることに違いはない。

九歳の子供とは思えない考えを抱きながら、少年は電車の中で深い眠りについた。

同時刻、二人の少女は海鳴市に到着していた。

????「ここが海鳴市…」

????「ああ…」

????「ここにジュエルシードがあるんだね…」

????「フ…タイト…あまり無茶しちゃダメだよ…」

????「大丈夫…」

海鳴市に到着した上条当麻。

彼が両親の知り合いと名乗る人物から聞いた話によると、海鳴市の駅に転校先の小学校の担任が来ている筈なのだが、それらしき人物

は見当たらなかつた。

当麻「これからどうしようかな…」

担任の教師が来ていないので、自分がだけが無闇やたらと動くわけにはいかないと考えていた少年は咳く。
そんな少年に近づいてくる中学生くらいの少女が居た。

？？？「君…どうしたの？」

当麻「あなたは？」

真紀「私の名前は結標真紀よ」

当麻「上条当麻です」

真紀「何だが困っているみたいだつたから…」

当麻「実は…」

事情を話した少年に少女は…

真紀「だつたらお姉さんが一緒に探してあげるわ」

当麻「で…でも…迷惑を掛けます…」

真紀「気にしない気にしない 単なるお節介だから」

半ば強引に協力を申し出る結標真紀に上条当麻は断りきれずに、申し出を受ける。

早速、担任の教師を探すために行動を開始する一人。

真紀「そう言えば、当麻君は何処の小学校に転校するのかしら?」

当麻「私立聖祥大附属小学校です」

真紀「私の母校じゃない!?」

当麻「そうなんですか?」

真紀「ええ。聞き忘れていたけど担任の先生の名前は?」

当麻「月詠子萌先生ですけど……」

真紀「子萌先生なの!?.確かに先生には見えないわよね……」

当麻「?????」

真紀が言っていることが理解できずに、首を傾げる少年。

真紀「ちょっと待つてね」

携帯電話を取り出し、誰かに連絡する。

真紀「子萌先生に連絡したから、ちょっとそここの喫茶店で待つてま
しょ?」

当麻「はい」

『喫茶店』

真紀に促されるままに、喫茶店に入る当麻。

真紀「何か食べたいものあるかしり?」

当麻「いえ…」

真紀「子供が遠慮なんてしないの すいませ~ん。お子様ランチ つとイチゴパフェ一つお願いしま~す!」

少年の言葉を無視して、メニューを頼む真紀。

メニューを待つ二人の下に、一人の少女が向かってくる。

? ? ? 「う~。警察の人へ勘違いされちゃいましたよ…」

真紀「ようやく来たのね子萌。まあ… 警察が勘違いするのもおかしくないけどね…」 クス

子萌「酷いですよ~結標ちゃん~」

当麻「子萌?」

その名前に少年は聞き覚えがあった。担任の名前が確か月詠子萌だった。しかし、田の前の少女はどうみても大人に見えない。

子萌「貴方が上条当麻ちゃんですか?」

当麻「は…はい…」

子萌「月詠子萌です。先程は遅れてしまつて申し訳ありませんでし

た

そう言って頭を下げる子萌。

しかし、少年は子萌の謝罪など全く頭に入っておらず…

当麻「先…生…？」

田の前の少女が自分の担任であることが信じられなかつた。

真紀「まあ普通はそんな反応するわよね」

子萌「こらー！私はれつきとした大人なのですよー！」

頬を膨らませて怒る子萌の姿だが、全く迫力が無く、寧ろ愛くるしい印象を与える程である。

呆然としている少年だったが、子萌の一言で正気に戻る。

子萌「ともかく… ようこそ！海鳴へ！」

子萌に歓迎されて、どう反応すればよいか分からずおろおろする少年。

そんな一人の様子を見ながら、微笑む真紀。

子萌が一人の下に現われてから、少しの時間が経ち、三人の前に料理が運ばれる。

お子様ランチを食べる少年とイチゴパフェを食べる少女。食事が終了した三人は喫茶店を出る。

真紀「さて…私はそろそろ用事があるから此処でお別れだね」

子萌「結構ちやん。ありがとうございました」

上条「ありがとうございました…」

真紀「そんじゃあまたね～」

ヒラヒラと手を振りながら一人の前から立ち去る少女。

子萌「それでは行きましょうか？」

当麻「はい」

二人は私立聖祥大附属小学校に向かう。
時刻は昼前だつた。

『私立聖祥大附属小学校』

お昼休みになり、高町なのはとアリサ・バーングス、月村すずかの三人は今日転校してくる予定の転校生について話していた。

なのは「子萌先生が迎えに行つてたけど大丈夫かな…？」

アリサ「まあ子萌はあの見た目だから…」

すずか「トラブルに巻き込まれていないといいんだけど…」

三人は、子萌の見た目が原因で起きる問題を何度も目撃していたのだ。

車を運転すれば未成年が運転していると誤解され、お酒やタバコを買うときも警察に突き出されそうになつた事もあるのだ。

転校生を迎える行つたからといって、何事も無く帰つてくる可能性

は非常に低いのだ。

すずか「転校生って男子なのかな？それとも女子かな？」

アリサ「後少しで分かるんじゃない？」

なのは「友達になれるかな？」

すずか「きっとなるよ」

アリサ「嫌な奴じゃないといいな……」

昼休憩が終了して、教室に戻ってくる子萌。

子萌「はいはーい。皆さん静かにして下さいね～」

子萌の言葉に反応して、席に戻る生徒達。

子萌「それでは転校生を紹介したいと思いま～す！」

子萌の言葉にざわめく教室。

子萌「どうぞ～」

彼女の言葉と同時に、教室に入ってくるシンシン頭の少年。

子萌「自己紹介をお願いしま～す」

当麻「上条当麻です。よろしくお願いします」

なのは「（あれ？あの子？）」「

なのはは当麻の田に見覚えがあった。

アリサ「何か普通だね……」ボソッ

すずか「ア、アリサちゃん……」

当麻「（何だかこのクラス…女子の方が多い…？）」

少年はそんなことを考えながらも、淡々と血口紹介を済ませていった。

第1話 担任は幼女!?(後書き)

淡希「ショタはどー!…?」

主「この時刻でアンタはまだ子供だろー…?」

淡希「ショタのためなら時間を越えるくらい余裕よー…!」

当麻「この人は?」

淡希「ショタゲットオオオー!…!」シュン

当麻「え?」シュン

主「…次回もよろしく…」

第2話 初めての「ラグ建築

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「上条ちゃんの席は、高町ちゃんの隣ですよ～」

子萌の言葉を聞いた少年だつたが、肝心の高町という子が分からない。

そのことを知ったアリサは…

アリサ「此処だよ」

なのはの隣の席を指差す。

少年は少女が指差した席まで移動して、お礼を言った。

当麻「あ、ありがと～」

アリサ「どういたしまして」

少年はアリサにお礼を言った後に、席に着いた。

子萌「上条ちゃんへの質問はHRが終わってからにして下さいね～」

子萌の忠告を生徒達は素直に聞いて、HRを済ませていく。

そして、HRが終わってクラスメートによる上条当麻への質問攻めが行われた。

「何処から来たの?」

「趣味は？」

「何処に住んでるの？」

クラスメートの質問攻めにおひおひする当麻。

アリサ「そんな一斉に質問しても答えられるわけ無いでしょー。」

当麻「君は？」

アリサ「アリサ・バーニングスよ」

アリサの隣に居た二人の少女も自己紹介を行った。

すずか「月村すずかです」

なのは「高町なのはだよ」

三人の少女に続いてクラスメートも自己紹介を始める。

浜面「俺の名前は浜面仕上だ。よろしくな」

ボサボサ頭の少年が自己紹介を行う。

数少ない男子のクラスメートが増えたことで喜んでいるのだらう。

アリサ「早速だけど、色々質問してもいいかしら?」

当麻「うん」

アリサの質問に答える当麻。

クラスメートもそれで満足したのか、それぞれ席に戻る。なのはは無意識に当麻を見つめていた。

少年の田に見覚えがあるのだが、それが何かは分からぬ。

アリサ「なのは? どうしたの?」

なのは「ううん。何でもないよ」

授業が終了して、今日から暮らすことになるマンションに向かう上条当麻。

自宅に向かつて居た少年は、クラスメートの田村すずかに出来つけ。今にも泣き出しそうな表情をしている少女を、お人好しの少年が放つておける筈もなく…

当麻「どうしたの?」

すずか「上条君?」

すずかに事情を話すように求める少年。

他人から拒絶され続けた少年が自ら起こした行動。

少女が『不幸』に巻き込まれているのならば、自分がその『不幸』を背負えばいい。

そう考えた故の行動だった。

すずか「実は…」

自宅で飼っている猫が居なくなってしまったと話す田村すずか。

現在、家人間に猫の搜索を手伝つてもらつてゐるのだが未だに見つけられないということ。

少女からその話を聞いた少年の答えは決まっていた。

当麻「僕も手伝つよ」

すずか「え……でも……」

当麻「気にしないで」

猫の搜索を手伝つことを申し出る上条当麻。あまり、他人に迷惑を掛けることが出来ないと考えていた少女だったが、少年の申し出を素直に受けたことにした。

当麻「じゃあ僕はあつちを見てくるよ」

少女と別れ、猫を見つける為に動く少年。猫を探し始めてから、數十分が過ぎる。

当麻「ビニヒーリンんだらう……？」

周囲を見ながら歩く少年。

そこで彼は、道路にいる猫を見つける。少女が猫の特徴に一致している事から、その猫が少女の飼い猫であることを推測する。

しかし、飼い猫にトラックが迫りつつあることを察知した少年は道路に飛び出す。

当麻「危ない……」

しかし、少年が道路に飛び出したところで、状況が好転するわけではない。

少年は、猫だけは守りつと強く抱きしめる。

トライックが少年を激突すると想われたが…

『Projection』

無機質な声が響き渡る。

少年に激突するはずのトライックは、何かに阻まれてその動きを止められていた。

何が起きたのか全く理解できぬ上条当麻は、自分の近くに金髪の少女を見かけた。

その少女はその場から、上条の姿を確認するとその場から立ち去つて行った。

少年は少女にお礼を述べようとしたが、少女は既にその場におらず、一旦すすかに猫を見つけたといつ報告をするために、その場所を離れた。

猫を連れて少女に再び会つた少年。

少女は田代ひづりと涙を浮かべながら、猫を抱きしめていた。

すずか「上条君… ありがとう…」

生まれて初めて他人から感謝の言葉を述べられて、動搖する上条。これが、少年が生まれて初めて他人にフラグを立てた決定的瞬間であることは誰も知らない。

感謝の言葉を述べる月村すずかと別れて、少年は氣を取り直してマンションに向かう。

唯一の気掛かりと言えば、金髪の少女にお礼の言葉を述べれなかつたことだが、今度会つた際にお礼を言おうと決意する少年。

『マンションへ』

マンションに向けて歩き始めて數十分後、少年はマンションに到着

する。

海鳴市が一望できる様な大きさのマンションに、少年は溜息をつく。貧乏というわけではないが、いかにもな高級マンションに驚きを隠せない少年。

こんな所で、一人暮らしを始めるのだから、少々の不安を覚える。荷物は事前に、自室に運ばれているらしく少年は自身の部屋に向かう。

そこで、扉の前に着いた少年だったが、その隣の部屋の扉の前に一人の少女がいることに気付く。

その少女こそ、少年がお礼を述べようと思っていた人物だった。

？？？「あつ……」

当麻「君は……」

思い掛けない出会いに動きが止まる一人だったが、もう一人の少女がその場に乱入する。

？？？「どうしたんだいフェイト？誰だいアンタ？」

当麻「こ…こんにちは」

もう一人の少女に話しかけられて、挨拶をする上条。

フェイトと呼ばれた少女は、もう一人の少女に話しかける。

？？？「ふ～ん。なるほどね～」

フェイトの話を聞いて納得する少女。

少年は少女達が話している内容よりも、少女に犬耳がついていることに疑問を抱いていた。

フュイト「どうして君が此処に居るの？」

当麻「今日からこの部屋で暮らす」と云つたんだけだ……」

「「え？」」

少年の言葉が予想外だったのか、動きの止まる一人。少年に聞こえないような声量で、話した二人はそれぞれ自己紹介を行つた。

フュイト「やうだつたの…私はフュイト・テスタークサ」

アルフ「アルフだよ。よろしくな」

当麻「上条当麻です」

二人が自己紹介して、少年も自己紹介する。

当麻「あの時は助けてもらつてありがと」

フュイト「え…いいよ。気にしないで」

どうやら少女もお礼を言われることに慣れていないのか、少しづかり動搖していた。

当麻「あの…お礼がしたいんだけど…」

フュイト「お礼なんて…」

当麻「じゃあせめてこれだけでも……」

そう言つて少年は鞄からお菓子を取り出す。
海鳴市に着いた時に、購入したものだ。
少年はそれをフェイドとアルフに渡す。

フェイド「あ……ありがとう……」

アルフ「あたしも貰つていいのかい？」

当麻「はい」

照れているフェイドと喜んでいるアルフ。

そんな一人の姿を見て、少年は心が温かくなつた。

海鳴市でも、元居た場所と同じように他人から傷付けられる事を覚悟していたが、海鳴市に来てまだ、一日も経っていないが、皆が非常に優しいということはよく分かつた。

海鳴市は少年にとってあまりにも眩しく、そして心地良かつた。

フェイド「海鳴市には初めて来たの？」

当麻「うん」

アルフ「親御さんはどうしたんだい？」

アルフの疑問は最もだつた。

右も左も分からぬ状態で、少年を一人で今日から住む場所に向かわせるなど、普通の親ならそんなことをさせる筈はない。
アルフの疑問を聞いた上条当麻の表情は少しばかり暗くなつた。

当麻「お父さんとお母さんは居ないんだ…」

アルフ「それはどういっ…」

当麻「ちょっと前に事故でね…」

フェイント&アルフ「「…?」」

予想外の言葉に、フェイントとアルフは驚愕する。

フェイント「「」めんね…」

アルフ「悪かったね…」

当麻「ううん…」

空気が重くなり全員が黙る。

そんな沈黙を破ったのは、アルフだった。

アルフ「ま、まあとにかくこれからはお隣さんってことじゃりじゃ
！」

アルフが無理やり明るく振舞い、フェイントと当麻の二人も明るく振舞う。

二人と別れて、自室に入った少年は鞄から写真を取り出す。
そこに写っていたのは、笑顔の両親と上条当麻だった。
フェイントとアルフの一人も自室に戻っていた。

アルフ「親がない…か…」

フヒイト「…」

アルフ「どんな気持ちなんだろ?」

彼女達も、少年と同じく海鳴市に初めて訪れたのだが、少年とは異なり明確な目的がある。

本来なら少年の事など、気にしている余裕は無い。

しかし、少年が見せた寂しそうな顔が彼女達の脳裏に焼きつく。それぞれの思いを胸に抱き、少年達は明日を迎える。

第2話 初めての「ワケ建築」(後書き)

御坂「あこいつが子供になつたってー?」

主「そうだけど?」

御坂「あこいつが子供になつたってー?」「ピニギー

主「ちよ…放電してるよー?」

御坂「とつとと教えたよー!」

主「結標さんが連れ去つました…」

御坂「何ですつてええー!ー!」「ドオン

主「わやあああー!ー!」

第3話 暖かな食卓

翌日のお放課後、月村すずかはアリサ・バーニングスと高町なのはに昨日の出来事を話した。

少年の事を語るときの少女の頬が少しばかり赤かったことは、二人とも気付かなかった。

アリサ「意外と親切なのね」

すずか「うん」

なのは「そんなことがあつたんだ」

アリサ「暗そうな雰囲気だつたから薄情だと思つたけど、そういうやなかつたのね」

なのは「ア…アリサちゃん…」

少女達が上条当麻について話している頃、上条当麻は浜面仕上に小学校の屋上に呼び出されていた。

少年は暴力を奮われるのかと考えていたが、海鳴市に来る前の彼にとってでは日常茶飯事だったので、特に気にするほどのことでもなかった。

屋上に到着した彼を待っていたのは、浜面仕上ただ一人だった。

仕上「来たか

当麻「何の用?」

仕上「まあひょひょひに来たよ」

少年の言葉に従う当麻。

浜面に呼ばれた位置まで移動した彼が見たものは、海鳴が一望できるとても綺麗な景色だった。

当麻「これって…」

仕上「綺麗だろ？俺の秘密のスポットなんだよ」

当麻「どうして教えてくれたの？」

仕上「何かお前、元気が無いみたいだたからさ。まあ、疲れたときはこの景色でも見て元気だせって」

当麻「あ… ありがとう浜面君…」

仕上「浜面でいいって、俺も上条つて呼ぶからぞ」

当麻「う…うん」

転校してきたばかりの人間にお気に入りの場所を教えるなど、浜面上もとても親切であると実感する上条当麻。

しばらくの間、少年達は屋上から海鳴の景色を眺めていた。

浜面と別れた少年は、晩御飯の材料を買つ為に最寄のスーパーに寄つた。

そこで、彼は先日お世話になつた結標真紀に出会つ。

真紀「あら、上条君じゃない」

当麻「昨日はあつがとひ」わこました

真紀「どうごたしました」

どうやら彼女も買い物中だつたらしく、買い物袋を持っていた。彼女と一緒に世間話をした後、少年は少女と別れた。晩御飯の材料を買った少年は、マンションに向けて移動し始めた。少年が自宅に向かっている頃、高町なのはは自宅にて上條当麻のことを両親に話していた。

なのは「…だつたんだよ」

桃子「随分親切な子ね」

土地勘の働くかない場所で、猫を探すのは下手をすれば迷子になる危険性を含む。

少年が何も考えなかつた可能性もあるのだが…

士郎「そうだ。なのは、今度彼を家に招待すればいいんじやないか？」

なのは「え？」

士郎「始めて海鳴市に来るのなら、不安もあるだらうし、それにその子に会つてみたいからな」

桃子「彼の歓迎会をすればいいんじやないかしりへ」

なのは「でも、まだ知り合つたばかりだし…それまで親しいってわけじゃないし…」

いくら高町家の人都がとても親切だと言つても、知り合つたばかりの人の家にお邪魔することなど、少年が反対する可能性が高い。そんな少女の様子を見ていた士郎は…

士郎「それならクラスの歓迎会ということにすればいい。それなら、彼も参加しやすいだろうからね」

なのは「そうだね。じゃあ明日聞いてみる」

なのはが両親と話している頃、少年はマンションに到着していた。帰宅した少年は早速、晩御飯を作り始めた。料理を作っていた少年だったが、突如玄関の方向から音が聞こえた。

ぐ〜〜〜！

不審に思つた少年が、玄関に向かい扉を開ける。

アルフ「う…腹減った…」

当麻「だ…大丈夫…？」

玄関を開けた少年が見たのは、涎を垂らしたアルフだった。アルフの態度から、お腹が減つていると判断した少年は…

当麻「もし良かつたら、『飯食べる？』

アルフ「え…いいのかい…？」

当麻「まだ作つてゐる途中だけど…」

アルフ「ありがとう…！」

目を輝かせてお礼を述べるアルフに若干顔が引き攣る当麻。
部屋にアルフを案内した当麻は、料理を再開する。

ちなみに、夕食のメニューは若鶏のから揚げ、味噌汁の一品だった。
両親が亡くなつてから、一人で暮らしていた少年にとって料理は密
かな趣味となつていた。

料理の匂いを嗅いだアルフのお腹の音は益々激しさを増していた。
そんなアルフの様子を見た当麻は、ある疑問がわいた。

当麻「いつも『飯はどうじてるの？』

アルフ「インスタントだけビ？」

当麻「『飯は作らないの？』

アルフ「あたしもフュイトも作れなくてね」

当麻「それって…『ピンポーン』…ん？」

インターホンが鳴つて当麻は玄関に向かつ。
玄関に居たのは、フュイト・テスタロッサだった。

フュイト「あ…あの…アルフが来てないかな？」

当麻「来てるけど…」

アルフ「フュイト～おかえり～」

フロイトの言葉に手をヒラヒラ振りながら、

まるで、自分の部屋の様に振舞つアルフに溜息をつくフロイトと苦笑こをする当麻。

フロイト「何がつてるの……？」

アルフ「トウマが」飯を作ってくれるつべ～

フロイト「え？」

当麻「君も食べる？」

フロイト「で……でも……迷惑じや ゃべ～』……あ／＼／＼

当麻「ちよつと待つててね」

フロイト「……」「ク

少年の言葉に若干赤くなりながら、無言で頷く少女。
アルフはそんなフロイトの様子を見ながら、笑っていた。
ようやく、料理が完成して料理をテーブルの上に並べる当麻。
フロイトとアルフも待っているだけではなく、皿を並べるのを手伝
つたりした。

当麻「いただきます

アルフ「いただきます」

フロイト「い…いただきます」

料理を食べ始める三人。

普段から、インスタント食品ばかり食べてていた一人にとつて、少年の料理はとても美味しかったらしく…

アルフ「美味しい…美味しいよ…！」

フェイト「美味しい…」

凄まじい速度で箸を進める一人の様子を見ていた少年は、内心とても喜んでいた。

自分の料理を誰かに食べてもらう経験なんて、今までの人生で一度も無かつたが、初めて他人に振舞つた料理を絶賛されたのは、非常に嬉しかつた。

その上、誰かと一緒に食事自体が久々で、食事もいつもより美味しく感じていた。

この瞬間、上条当麻は確かに『幸せ』だつたのだ。

アルフ「『馳走様！』あ、美味かつた！」

フェイト「『馳走様。本当に美味しかつた』

当麻「『馳走様』

夕食を食べ終わつた一人に、少年は一つの提案を行つ。

当麻「あのさ…これからも一人の料理を作つてもいいかな？」

フェイト「で…でも流石に何度も『馳走になるのは…』

当麻「駄目かな？」

アルフ「うはー、お世話にならうよフュイト」

フュイト「で……でも……」

当麻「僕が作りたいだけだから、フュイトは気にする必要なんてないよ」

フュイト「当麻……本当にいいの？」

当麻「うん」

アルフ「よしあーーーこれから毎日、美味しいご飯が食べられるーーー！」

フュイト「あ……アルフ……」

当麻「あはは……」

第4話 孤独な少年と少女（前書き）

五和「上条さんが子供になつたですって！…？」

神崎「上条当麻が子供に…？」

御坂妹「あの人…フフ…」

姫神「今之内に手懐けておけば…」

インテックス「『はんぱじゅるの…』？」

レッサー「子供の内から調教しておけば、イギリスの引き込む」とも容易かもしません！！」

主「上条当麻を巡る女性達の戦いが始まる。しかし、彼女達は知らない。彼女達自身が絶大な実力を持つているなど…」

上条「何ナレーションしてんだよ…」

主「ふざけすぎた…今回もよろしくお願ひします」

第4話 孤独な少年と少女

『マンション』

少年がフェイトとアルフの料理を担当することに決まってから一夜明けた。

早速、朝ごはんを作り始める上条当麻。

ピンポーンー！

当麻「はい」

少年が玄関に向かい、扉を開けるとセレーニはフェイトとアルフが居た。

アルフ「おはよ～」

フェイト「おはよ～」

当麻「おはよ～」

一人をリビングに案内して、再び料理を作り始める少年。

そんな少年の様子を見ていたフェイトは、何か手伝えることはないかと尋ねたが、特に手伝つてもいいこともないので、少女の申し入れを断つた。

それから、少し時間が経つて料理が完成した。

アルフ「いっただきま～す！～！」

フェイト「いただきます」

当麻「いただきます」

朝食を食べ始める三人だったが、当麻がアルフにある質問をした。

当麻「ずっと気になつてたけど、その耳は付けてるの？」

フェイト「そ… そつだよ… ねえアルフ…」

アルフ「いやこれは…」

フェイトの言葉を否定しようとするアルフだったが、フェイトの態度を汲み取ったのか少女に呟わせた。

アルフ「そ… そつなんだよ… 中々似合つだろ！？」

当麻「う… うん…」

そんな一人の態度を見た少年は、未だに疑問を抱いたままだが、とりあえずこの問題に対しても保留にしておくことにした。

当麻「ところで一人とも、学校はどうに言つてるの？」

フェイト&アルフ「それは…」

少年に自分達の事情を話すわけにはいけないと考えている一人は、その疑問に正直に答えるわけにはいかなかつた。

フェイト「色々事情があつて… 今は学校に行ってないんだ…」

アルフ「同じく…」

当麻「そうだったんだ…何だかごめんね…」

フェイト「気にする必要なんてないよ…」

アルフ「そ…そだよ…」

慌てて取り繕う一人の様子を見て、少年は少し笑い…

当麻「それなら弁当を作ったほうが良さそうだね」

フェイト「流石にそこまでしてもらひわけには…」

当麻「前にも言つたけど、僕が勝手にやつてることだから気にしないで」

当麻の態度を見たフェイトは、少年はこちらが断つても譲らないだろうと判断して、少年の申し出を受けることにした。

早速、二人分の弁当を作り始める少年。

そんな少年の後ろ姿を眺めていた一人は…

フェイト「どうしてここまでしてくれるんだろう…？」

アルフ「きつとウマもフェイトと同じよう優しいんだよ

それから少年が弁当を作り終えて一人に渡して、少年も学校に向かつた。

昼休憩になり、給食を食べていた少年の下に高町なのはがやつて来た。

当麻「高町さん? どうしたの?」

なのは「上条君。ちょっといいかな?」

彼女の隣にはアリサとすずかも居た。

当麻「うううん」

なのは「あのね……」

少女はクラスで少年の歓迎会をしたいところとを少年に伝える。

当麻「で……でも……世間に迷惑かけるし……」

なのは「そんなことないよ」

アリサ「やうよ

すずか「駄目かな?」

当麻「ぼ……僕でよかつたら……」

アリサ「よしーこれで決まりねー」

少年の了承を経て歓迎会を行うことが決定する。

『公園』

上条当麻が昼休憩を迎えていた頃、フュイトとアルフの一人は海鳴市の公園で弁当を食べていた。

アルフ「見つからないね。ジュエルシード」モグモグ

フュイト「うん…」モグモグ

アルフ「確かにこの世界で間違いないはずなんだけど……」

フュイト「 ireba fukari wa dōdō ni tsutsu shikanai yo

アルフ「それもそつかあ」

フュイト「(もし)、この世界に無かつたら、当麻とお別れする」と
になる…)

一人の少女がこの世界で出会った一人の少年。

たつた一日程度しか経っていないが、彼女達は少年とともに仲良くなっていた。

自分で料理が作れない彼女達にとって、少年が作る料理は新鮮だったし、一緒に食事をしている間は、確かに楽しいと感じていた。海鳴市にずっと留まる訳にはいかない少女達にとって、少年といふ時間は大切にしたかったのだ。

『図書館』

小学校の授業が終了して、少年は真っ先にマンションに帰ろうとは

せず、図書館に向かつた。

海鳴市に来る以前も、図書館にいることが多かつた少年。

他人から傷つけられるばかりの少年にとって、図書館は唯一静かに過ごせる場所だったのだ。

海鳴市の図書館に入つて、何か適当な本はないかと探していた当麻だったが、そこで彼は一人の少女を見かける。

「…やっぱり取れんな~どうしよう…」

何やら車椅子の少女が本を取ろうとしているのだが、少女が取ろうとしている本の位置が、高いところにあり、彼女は困り果てているようだつた。

そんな少女の下に、少年は近寄ると…

当麻「あの…手伝おうか?」

「…え?」

突然の申し出に動搖する少女だったが、少し時間を置いた後：

「…頼んでもええの?」

当麻「うん」

「…あの本なんやけど…」

当麻「分かつた」

少女が指差した場所にある本は、少年の背が届かない場所にあつたらしく、少年は脚立を使用して本を取つたのだが…

ガシャーン！！

脚立から盛大に落ちた少年は、勢い良く地面に激突する。

？？？——だ、大丈夫か！？」

「大丈夫だよ。慣れてるから。」

幼い頃から生傷の絶えなかつた少年にとって、この程度のことば大して気にするほどのことでもなかつた。

？？？
— 慣れてるって…

当麻 - それより... はい...「

もうついで少弔は少女の本を渡す。

? ? ? - ももた

「当麻、どういたしまして」

「図書館に来るのは初めてなん?」
初めて見る顔やけど

「麻子、少し前にこの町に引っ越しきたんだ」

？？？「そつだつたんか。」
八神はやてや
「そういやまだ自己紹介しとらんかつたね。

当麻「上条当麻だよ。八神さんは良く図書館にいるの？」

はやて「せやな。普段から図書館にゐるで」

当麻「学校はぢりしたの?」

はやて「事情があつて行けないんや……」

当麻「ごめんね……」

はやて「ええで。上条君が氣にすることやあらへん」

沈む少年を元気付ける少女。

はやて「やう言えば、上条君は始めてこの図書館に来たつて言つと
つたけど、案内してあげようか?」

当麻「いいの?」

はやて「困つたときはお互ひ様や」

当麻「ありがと!」

少女に図書館を案内してもらつた少年。

二人は話しながら、ある共通点があることが発覚する。

上条当麻と八神はやはては事故で両親を亡くしており、ずっと一人暮
らしだつたということ。

同じような境遇の人間に出会つと思つていなかつた一人は、非常に
驚いていたが、再び話し始めていた。

はやて「上条君の趣味は料理なんやな」

当麻「八神さんも料理が趣味なんだね」

はやて「今度、家の料理を食べてみるか?」

当麻「こっちも何か作ってこようか?」

はやて「せやね」

当麻「そろそろ帰らなきや……」

はやて「そつか…」

当麻「じゃあ八神さん。また明日」

はやて「…上条君。また明日な」一〇

上条当麻は八神はやてと分かれて帰路に着く。

その頃、海鳴市に一人に男が訪れていた。

????「ここが海鳴か…この靈装の威力を試すのに最適な場所だな
…」

男は引き裂いた様な笑みを浮かべて歩を進めていた。
平和な町に迫り来る危機に気付く者は誰もいない。

第5話 謎の『右手』

数日後、上条当麻は浜面仕上とアリサ・バーングス、月村すずかと高町なのはの五人で昼休憩を過ごしていた。

最初は、緊張していた少年も浜面やなのは達の協力もあり、徐々にクラスに打ち解けてきた。

仕上「学園都市に行つてみて～な～」

アリサ「どうしたのよ浜面？」

仕上「だつて科学技術が物凄く発達してんだぜ？何か夢があるじやん」

なのは「そういうものなの？」

当麻「分からぬけど…」

すずか「子萌先生も学園都市から来ているのよね？」

なのは「うん」

当麻「どうして子萌先生は海鳴に来たんだろう？」

仕上「それは本人に聞いてみねーと分かんねーだろ」

アリサ「でも浜面。学園都市つて旅行で行ける様な場所じゃないのよ？」

仕上「マジで？」

すずか「年に一度、大霸星祭っていう行事で外部の人に一般開放されるらしいけど…」

なのは「基本的に、学園都市に学生として入学したら、学園都市の外に行くだけでも大変な手続きが必要になるんだって」

仕上「うへえ…あんまいりもんじゃねえな…」

当麻「浜面は学園都市に行きたかったの？」

仕上「だつてロボットがいるんだぜ！…男のロマンだろ！…？」

なのは「やうなの？」

当麻「僕にはよく分かんないけど…」

仕上「分かつてねえな上条。それに超能力なんて物もあるんだぜ？」

なのは「脳を開発して超常現象を引き起こす力だっけ？」

すずか「でも、脳を開発するなんてちょっと怖い」

アリサ「大体、超能力なんて何に使うのよ？」

仕上「う…それは…」

アリサ「全く…浜面は浜面なんだから」

他愛ない話をする少年少女達。

そこで、浜面が何かを思い出したように語る。

仕上「そういうや、ここ最近海鳴で何か事件が起きてるらしいけど、あれは化け物の仕業っていう噂があるらしいぜ」

当麻「化け物の仕業?」

なのは「そんのがいるの?」

アリサ「いるわけないでしょ…」

すずか「ア…アリサちゃん…」

仕上「何でも石の巨人みたいのが、暴れまわってるらしいんだ」

アリサ「石の巨人ねえ…」

当麻「どれぐらい大きいの?」

仕上「そこまでは分からぬけど、多分巨人っていうくらいだから、相当でかいんだろうぜ」

雑談している少年少女達だったが、そこで思わず横槍に入る。

子萌「みなさん。本田の授業はこれで終わりになりました~」

予想だにしなかつた月詠子萌の言葉に動搖する一同だったが、

仕上「せんせ」それって、海鳴の事件が原因ですか?」「

子萌「秘密です。皆さんには寄り道せずに帰つてくださいね~」

そう言つて教室から出て行く子萌。

その後ろ姿を見ていた少年少女達は…

卷之三

全員、子萌の態度を不審に感じていた。
しかし、子萌の言葉を素直に聞いていた一回はそれぞれ帰宅することに決めた。

上条当麻が小学校から出た頃、フェイト・テスターとアルフは海鳴市のスーパーを訪れていた。

何故彼女達がスーパーに来ているのかというと、フェイトが上条に料理を作らせつ放しでは忍びないので、買い物だけでも任せて欲しいと言つたからである。

フロイト「えつし...」の商品は...」

アルフ「フェイト、これ買つてもいい？」

「…」ホイト「…」…。それで…これは…何処にあるの?」

順調に買い物を済ませていくフロイトだったが、少年に頼まれた商品が見つけられなかつた。

途方に暮れている少女達に近づく一人の女子中学生が居た。

真紀「どうしたの？」

フェイト「あ…えっと…商品を探しているんですけど…見当たらなくて…」

真紀「もし良かつたら手伝いましょうか?」

アルフ「いいのかい?」

真紀「困ったときはお互い様だからね」

フェイト「あ…ありがとうござります」

真紀「それじゃちやつちやと見つけちゃいましょうか」

結標真紀に協力してもらい、再び商品を探し始めるフェイトとアルフ。

探していた商品が見つかり安堵する一人。

アルフ「ありがとね」

フェイト「ありがと(う)ぎいました」

真紀「どういたしまして。それじゃ~ね~」

手をヒラヒラ振りながら一人の前から去っていく少女。

フェイト「親切な人だったねアルフ」

アルフ「そうだね」

買い物を終えた少女達は、マンションに向けて移動を開始した。その頃、上条ははやてに出会っていた。

どうやら彼女は今日も図書館に出来ていたのだが、図書館がいつもより早く閉じてしまい、困っているところだつたらしい。

はやて「それにしても、物騒な世の中やな」

当麻「そうだね。早く事件が解決するといいんだけど……」

はやて「せやな……って何やあの人、けつたいな格好しあつてからに

…」

当麻「ちょ……八神さん……失礼だよ……」

二人は一人の男を見かける。

その男は黒い服装をしているのだが、明らかに過剰にアクセサリーの様な物を身に纏っていた。

海鳴では決して見る事の無い姿の人間に、若干警戒心を抱きながら男の前を通り過ぎようとする一人だったが

？？？「この力……素晴らしい……」

男はそう呟くと、懷からチヨークの様な物を取り出して、地面に何かを描き始めた。

ズゴオ！！

瞬間、地面が隆起して巨大な石の巨人が一人の前に現われた。

ゴーレム「グオオオオオオ！！！」

当麻「な…あれって…」

はやて「な…なんなん…あれ…」

浜面仕上から聞いた単なる噂だった筈の存在が、上条当麻と八神はやての前に居た。

????「殺せ」

男の言葉を聞いた瞬間、少年は少女の車椅子の取つ手を掴みその場から全力で逃げ出していた。

未だに目の前の現実を受け入れる事が出来ない二人だが、あのゴーレムが危険ということは本能で理解したのだろう。

必死で怪物から逃げる二人だが、焦りながらも会話を交わす。

はやて「上条君！なんなんあれ！？」

当麻「分かんないけど、とにかく逃げなきゃ…！」

全力で逃げる一人を追いかけるゴーレムだが、一人が子供ということもあり、姿を見失ってしまう。

????「ちつ…」

男は一人を逃がしてしまったことに苛立つが、例え警察を呼んだとここで何かが出来るわけでもない。
ゴーレムを撒いた二人は…

当麻「何とか逃げ切れたのかな…？」

はやて「上条君…私…怖い…」

無理もないだろ？。

ゲームやアニメの様な非現実な出来事が田の前で起きたのだから…

当麻「一旦僕の家に非難しよう…」

はやて「え？」

少年は少女をマンションに連れて行くことを決意する。動搖するはやてだったが、少年もそこまで気が回っておらず、少女の言葉を無視してマンションに辿り着く。そこへ彼はフロイトとアルフに遭遇する。

フロイト「当麻？どうしたの？」

アルフ「やつちの子は？」

当麻「悪いけどこの子をお願い…」

アルフの質問を無視して、少年は再びドーレムの所に向かおうとする。

はやて「駄目や上条君…危険すぎる…」

当麻「大丈夫だよ」

一言駄々、少年は先程ゴーレムと遭遇した場所まで走って行った。

はやて「上条君…どうして…」

フェイント「一体何があつたの?」

二人に何があつたのか尋ねるフェイント。
はやては先程の出来事をフェイントに語る。
少女の言葉を聞き終えたフェイントは…

フェイント「アルフ!…この子をお願い!…」

アルフ「分かつた!…」

はやて「危険や!…」

フェイント「大丈夫…当麻は任せて!…」

フェイントも上条が向かつて行つた方向へ駆け出す。
はやてはそんな少女を呆然と眺めていることしか出来なかつた。
先程、ゴーレムと遭遇した場所まで戻ってきた少年。
辺りを見回す少年だったが、謎の男もゴーレムも見当たらない。
何処か別の場所に行つたのかと考える少年だったが…

きやあああああ!…

悲鳴が聞こえて、その場所に向かつて全力で駆け出す。

少年が悲鳴がした場所に辿り着くと、黒髪のショートの少女がゴーレムに襲われていた。

すかさず少年は少女とゴーレムの間に割り込む。

当麻「大丈夫？」

？？？「う…うん…」

当麻「良かつた…君は早く逃げるんだ！」

？？？「で…でも…」

当麻「僕なら大丈夫…だから早く…」

少年の言葉を聞いた少女は、無言で領きその場から逃げ切る。

少年は男とゴーレムを睨みつける。

男は少年の姿を見て鼻で笑い、「ゴーレムに少年を殺すように命令する。

その拳は、人間の原型を留めることが不可能と言つてもおかしくないほどの威力を持っている。

少年は、目の前の存在が恐ろしくて震えが止まらない。

今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし、少年は逃げない。

今、ここで自分が逃げたら目の前の化け物は他の人間を襲うことを見ついているから。

ゴーレムの拳が少年に迫る。

少年は両手を交差していた。

フェイト・テスターは上条当麻を追つていたが、途中で見失つてしまつ。

遅くなればなるほど、少年は危険に晒される可能性が高いと知っている少女は焦つていたが、突如そこまで遠くない場所から少女の悲鳴が聞こえる。

少女は悲鳴が聞こえた方向に走り、その現場に辿り着くが、少年が今まさにゴーレムの一撃を受けようとしているところだつた。

少年を追つている為に「」していない少女だつたが、今から「」したところで少年を助けられるわけではない。

フュイト「当[麻]ああああ……」

少女の叫びも虚しく、ゴーレムの拳は上条当麻に直撃した。しかし、少年が死んでしまうという少女の幻想は殺された。

バキン！！

ゴーレムの拳が、上条当麻の『右手』に触れた瞬間、世界が割れる様な音が周囲に響き渡つた。

ゴーレムの動きが停止することに驚愕する男とフュイトと当[麻]だつたが、更に驚くべき出来事が発生した。

ボ'ゴオオ！！

突如、少年に触れたゴーレムの身体が崩れ始めたのだ。

? ? ? 「なつ……！？」

フュイト「何が……！」

当[麻]「え……！」

あまりにも異常な事態に思考が停止する三人だつたが、ゴーレムの身体が再び信じられない速度で再生する。

ゴーレムの胸元には小さな宝石の様な物が光を放つていた。

フェイト・テスタロッサはその宝石に見覚えがあった。

フェイト「あれって…ジュエルシード…？」

？？？「くくく…とんだイレギュラーがあつたが、俺にがあの宝石がある」

男は実力のある「 」ではなかつたが、ジュエルシードを使用することにより、あれほどのゴーレムを作り出せる程の力を得たのだ。男は引き裂いた様な笑みを浮かべて、ゴーレムに再び少年を攻撃するよう命じた。

しかし、この場にいるイレギュラーは上条当麻だけではなかつた。

フェイト「バルディッシュ…！」

『Photon Lancer』

突如、金色の魔力弾がゴーレムに直撃する。

何が起きているのか理解できていなかつた男と少年は、攻撃が放たれた場所を見る。

そこには、フェイト・テスタロッサが居た。

しかし、普段の彼女とは全く異なる服装をしており、何に似ているかと表現するならば、魔法少女という言葉が最適だった。

呆然とする一人だったが、少女は続けて手に持つてゐる鎌の様な物をゴーレムに向けて…

『Sealing mode · Set up』

フェイトの鎌から光の様な物がゴーレムに直撃する。
そして、ゴーレムの身体が徐々に崩壊する。

そして…

フェイト「ジュエルシード、封印…」

『 Sealinego

「ゴーレムの身体が完全に崩壊して、その身体から小さな宝石が出現して、その宝石はフェイトの持つ鎌の様な物に吸収されていた。もとの姿に戻ったフェイトを呆然とした表情で見ている上条当麻。

フェイト「当麻…今まで隠しててごめんね…」

悲しそうな表情で呟くフェイト・テスター・ロッサ。

一方その頃、ゴーレムを倒された男は逃走していた。
そんな彼の前に、中学生くらいの少女が現われる。
男は少女を無視してその場を通り過ぎようとしていたが…

ヒュン…！

ドス…！

? ? ? 「う…」

少女の一撃を受けた男はその場に倒れる。

真紀「全く…傍迷惑な『魔術師』ねえ」

結標真紀は一人で呟く。

真紀「それにしても…あの子が『魔導師』ね…まあ悪い子じゃなさ

そうだから、別に放つておいてもいいかな」

少女は倒れた男を放置してその場から悠々と立ち去つて行つた。

第6話 ハードの決意と初麻の歓迎会（前編）

滝壺「はまづらが子供になつた？」

絹旗「私がお姉ちゃんに超なるわけですねー？」

麦野「今なら簡単に殺せるか…」

主「麦野さんだけ物騒ぐやめよー。」

麦野「あー？」

主「ナンバーワンマセン

フレメア「今の私なりませぬと幼馴染にやあ

第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会

「ゴーレムを倒した二人はハ神はやてとアルフに合流して、はやてを自宅に送った後、上条当麻とフェイト・テスター・ロッサとアルフの三人は少年の自室に集合していた。

当麻「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

先程から一言も話さない一同。

沈黙がその場を支配する。

しかし、そのままで埒が明かないのでアルフが口を開く。

アルフ「当麻には知られたくないんだけどね…」

当麻「二人は…一体…」

フェイト「私達はね…別の世界から来たんだよ」

当麻「別の…世界…？」

少年は少女が何を言っているのか全く分からなかつた。

別の世界なんて存在するか定かでもない世界から来たというのだから。

それから、少女達は自らの正体を語り始めた。

フェイトが瞬間見せた姿は、デバイスと呼ばれる道具を用いて変身

した姿であるということ。

その姿になると魔法と呼ばれる力行使できるということ。
ゴーレムの身体に埋め込まれていた宝石は、ジュエルシードと呼ばれるもので莫大な力を秘めているということ。
少女達がこの世界に来たのは、ジュエルシードと呼ばれる宝石を手に入れるためにであること。

アルフは人間ではなく、フェイトが魔力で作り出した使い魔という存在であること。

唯一一般人である少年にとって信じられないような話のオンパレードだったが、目の前で魔法を使った場面を見たことから少年は少女の言葉を疑う余地は無かつた。

「フェイト」「ごめんなさい…私のせいだ当麻を巻き込んで…」

突然、少年に謝罪の言葉を述べる少女に少年は困惑する。
少女が謝る必要など全く無いのだが、一人で全てを背負い込みがちな少女は少年に謝らずにはいられなかつた。

当麻「フェイトは何も悪くなんてないよ。それにフェイトが助けてくれたおかげで僕はここにいられるんだから」

「フェイト…」

当麻「それより…どうしてフェイトはジュエルシードを集めているの？」

少年は少女が世界を超えてまで、ジュエルシードを集めることがどうしても理解できなかつた。

お使い感覚で世界を超えるよつなることなんであるはずもない。
だからこそ、少年は少女がそこまでする理由が知りたかつたのだ。

フュイト「それは…」

アルフ「フュイト…」

当麻「どうしても知りたいんだ…駄目かな?」

フュイト「私は…お母さんの為に…」

当麻「お母さんの?」

アルフ「フュイトの母親がジュエルシーードを必要としていて…フ
ュイトはその為にジュエルシーードを集めているんだよ」

当麻「そうだったんだ…」

まだ幼い子供で世界を渡らせてまでジュエルシーードを集めさせるな
んて普通はない。

心なしかフュイトの母親のことと語るときのアルフの表情が少しば
かり暗かった。

当麻「フュイトはこれからもジュエルシーードを探し続けるの?」

フュイト「うん」

強い決意を秘めた目で少年の言葉に答える少女。
しかし、どこかその瞳は哀しげだった。

上條当麻という少年はそんな少女の話を聞いて一つの決意をする。

当麻「僕にもジュエルシーードの搜索を手伝わってくれないかな?」

フェイント&アルフ「え？」

予期しない少年の言葉に少女達は動搖する。

家事や宿題を手伝うといった生易しい問題ではないのだ。

先程のゴーレムの戦闘を体験している少年が、ジュエルシードを集めるこの危険性を理解していないわけではないのだ。

それなのに、目の前の少年は二人を手伝うと申し出てきたのだ。

フェイント「だ…駄目だよー当麻は魔法を使えない一般人なんだよー！？」

アルフ「そ…そうだよー！」

二人は少年の申し出を断るが…

当麻「お願い」

頭を下げて二人に頼み込む上条当麻。

短い間ながらフェイントとアルフは、この少年は一度決めたことを絶対に曲げないほど頑固であることを熟知していた。

フェイント「分かった…でも絶対に無茶しちゃ駄目だよ？」

当麻「うん！」

嬉しそうに喜ぶ少年の姿を見て、苦笑にするフェイントとアルフ。正直言つて、ただの一般人である少年にジュエルシードを見つけられるとは思わなかつた。

しかし、危険を承知で自分に味方してくれる少年の気持ち無下にす

る」となど少女達に出来なかつた。

一方その頃、自宅で図書館から借りた本を読んでいた八神はやては

はやて「あの時の上条君かっこよかつたな…」

思い出すのは毎の出来事。

初めて会つた時はどこか頼りない印象を抱いていたが、ゴーレムと対峙した際に見せた強い決意を秘めた表情。身を挺してまで自分を守つてくれた少年の事を思い出すたびに、少女は顔が赤くなるのを感じていた。

翌日、上条当麻は浜面仕上と共に翠屋の前に居た。

本日は、上条当麻の歓迎会が行われる日だったのである。

当麻「ここでいいのかな？」

仕上「ひとつと入る」
「…」

カラーン！

勢い良く扉を開ける浜面仕上。

店内は少年のクラスメート達で埋め尽くされていた。
呆然としている当麻だったが、少年の下に一人の女性が近づいてきた。

桃子「あなたが上条君ね？」

当麻「は…はい…上条当麻です…」

桃子「そんなに緊張しなくてもいいのよ？私は高町桃子。なのはの母です」

当麻「高町さんの…」

「上條さん、お坐り下さり」と、上條は喜んで

いつの間にか席についていた浜田仕上が上条に手を振る。

柱には倒されて廬は暮ぐ少筆

なの止・上条春・レリ・シキ・レ

なのはにケーキを渡される当麻。

当麻「あ、ありがとうございます」

なのは「どういたしまして」

ケーキを渡されたのはにお礼の言葉を述べる。

そして本田の進行役であるアリサが…

アリサ「全員に行き渡つたわね？それじゃあ上条の歓迎会を今から行うわよー！」

アリサの言葉に同意するクラスメート達。そして、一斉にケーキを食べ始める一同。

仕上「やつぱいのケーキは詰めえーー。」

ケーキにがつづく浜面を見たアリサは…

アリサ「あんた… もうちょっと一瓣に食べなさいよ…」

すずか「あはは…」

呆れるアリサと苦笑にするすずか。

ケーキを食べている最中の当麻に一人の男性が近寄ってくる。

士郎「うちのケーキは美味しいかな?」

当麻「とても美味しいです」

士郎「喜んでくれていいようで何よりだよ。私は高町士郎。なのはの父親だよ」

当麻「今日は本当にありがとうございました」

士郎「かしこまらなくていいんだよ。やつは君はどのあたりに引越したんだい?」

上条当麻が海鳴市の何処に住んでいるのか聞いていなかつたクラスメートは、その話に耳を傾ける。

当麻「僕は…」

海鳴市のとあるマンションに住んでいると告げる上条。

士郎「なるほど。やつ言えば君の『両親も海鳴に来たばかりだろ?』両親のケーキも用意しようか?」「…」

当麻「両親は…」

少しばかり暗い表情になつた少年は両親がいないことを淡々と語り始める。

少年の話を聞いた一同は驚愕していた。

クラスメートも上条の両親が居ないことは知らなかつたらしく、呆然としていた。

高町士郎と高町桃子も沈痛な表情をして…

士郎「すまなかつたね… 辛かつたるう…？」

当麻「いえ… それに…」

桃子「それに？」

当麻「皆のおかげでそれほど辛くないんですよ

海鳴市に訪れるまでは少年の味方は両親だけで、常に周囲の人間の悪意に晒されてきたのである。

しかし、海鳴市では少年を傷つけるような人間はおらず、むしろ心優しい人ばかりで少年は確かに『幸せ』を感じていたのだ。

士郎「そうか…」

静まりかえつた店内だが、突如浜面が…

仕上「おい上条！早くケー キ食わないと俺が食つちまうぞー！」

当麻「は、浜面！？ ちょっと待つて！？」

浜面の突然の行動に焦る上条。

周囲の人間はそんな彼等のやりとりを聞いて、笑い出した。
再び明るい雰囲気を取り戻す店内。
ケーキを食べ終えた上条は…

当麻「あの…このケーキを三つ頃いてもいいですか？」

桃子「ええ…どうぞ」

当麻「ありがとうございます」

上条当麻の歓迎会が無事終了して、クラスメートはそれぞれ解散した。

後片付けを手伝う高町なのは、初めて少年に出会ったときの違和感の正体を理解した。

少年が時折見せた寂しそうな表情。

それはかつて、高町なのはが一人だったときと酷似していたのだ。
しかし、少女は少年の様に大切な人を失ったわけではない。
少年と少女には決定的な違いがあった。

当麻は自宅に向かう前に八神はやての自宅に向かった。

ピンポーン！

はやて「はーい」

扉を開くはやはては当麻の姿を確認する。

はやて「上条君？じゃないしたの？」

当麻「ケーキ貰つたんだけビ、良かつたハビウかな?」

はやて「ええの?」

当麻「うん」

はやて「おおきにー」

喜ぶはやてを見て微笑む少年。

当麻「それじゃ あ僕はこれで」

はやて「ありがとな… あー」

当麻「どうしたの?」

はやて「上条君。明日図書館に来れるか?」

当麻「行けるけど…」

はやて「弁当作つてもええか?」

当麻「いいの?」

はやて「ケーキをくれたお礼や」

当麻「ありがとウ」

約束をして自宅に向けて移動する少年。

帰宅した少年は、フェイトとアルフを誘つて本口翠屋で貰つたケー

キを食べた。

アルフ「滅茶苦茶美味いよこれーー！」

フヨイト「うん」

ケーキを頬張る一人を見て、少年はこの幸せがいつまでも続けばいいと願っていた。

第7話 始まりの物語

翌日、はやてから弁当を渡された上条はマンションにて、フェイトとアルフと一緒に渡された弁当を食べていた。

どうやら彼女の弁当の味は少年よりも上だったらしく、二人は絶賛していた。

フェイトとアルフは弁当を作ってくれたハ神はやてに、近いうちにお礼をすることに決めた。

弁当を食べ終えた三人は、ジュエルシードの搜索を始めた。当麻は初めてのジュエルシードの搜索とつともあり若干緊張していた。

フェイト「そんなに緊張する必要はないよ」

アルフ「そ、だよ。別に当麻が戦う必要なんてないんだし〜」

当麻「う…うん」

ジュエルシードを探しながら少年は、フェイトからジュエルシードの特徴について教えられていた。

ジュエルシードは全部で21個存在しており、それぞれが強大な魔力を秘めており、周囲の生物が抱いた願望を叶える力を持っているらしい。

フェイトの母親が何故そのような物を探させているのか全く検討のつかない少年だったが、今はその問題については後回しにしておこうと考へた上条当麻だった。

結局、本日はジュエルシードを発見することが出来なかつた一同。マンションに帰つた三人は早速夕食の準備に取り掛かる。夕食を食べ終わつた三人はそれぞれの部屋に戻つて行つた。

ベッドに入った少年は、ジュエルシードの事について考えていた。

周囲の人々の被害を未然に防ぐためにも、一刻も早くジュエルシードを回収しなければいけないことは分かっている。

しかし、ジュエルシードを回収し終えたらフロイトとアルフは海鳴市を去ってしまう。

自分の考えが我儘である事を承知しながらも、少年は一人に去つて欲しくなかつたのだ。

こうして夜が更けていき、海鳴市に来てから初めての休日は終わりを告げた。

授業が終わって下校中の一同。

アリサ「魔法少女？」

仕上「そつなんだよ。何でも謎の化け物もそいつが倒したらいいぜ

すずか「流石に魔法少女なんていないんじゃないかな？」

なのは「私もそつ思うけど……」

当麻「ま……魔法少女もゴーレムも噂なんじゃないかな……？」

フロイトとゴーレムの戦いの様子を誰かに見られていたのだろうか。噂の中心部に居た少年としては、非常に気まずかった。

仕上「確かにそうだけどよ。でも本当だつたら何か面白やうじやん

アリサ「謎の化け物はともかく、魔法少女は夢があるかもね」

すずか「確かにやつだね

なのは「いやほほ…」

再び歩き始める一回だったが…

? ? ? 「（聞こえますか！？僕の声が聞こえますか…？）

なのは「…？」

当麻「高町さん、どうしたの？」

なのは「聞こえないの？」

アリサ「何が？」

どうやら今の『声』はなのは以外には聞こえていなかった。少女は『声』がした方向へ駆け出していた。

他のメンバーは何が起きているのか全く分からなかつたが、とりあえずなのはを追いかけることに決めた。

そして、なのはを追つた少年少女達が見つけたのは、傷だらけになつて倒れているフロレットだった。

なのは「大丈夫！？」

アリサ「ど、どうしたの？」

すずか「早く手当をしてあげなくちゃ…！」

当麻「この近くに動物病院は…」

仕上「俺は知ってるー早く連れて行くぞー！」

なのは「う、うん…」

なのはがフェレットを抱きかかえて、一同は最寄の動物病院まで向かつた。

フェレットを医師に預けた後、少年少女達はフェレットを誰が預かるかについて話していた。

仕上「俺んちは多分無理だ」

アリサ「私も親が…」

すずか「…」

なのは「私がお父さんに聞いてみようか？」

当麻「僕が飼うよ。一人暮らしだから何の問題もないから」

なのは「分かったよ。それにしても…」

アリサ「何であのフェレットは傷だらけだったんだろ…？」

すずか「もしかして…誰かに虐待されたのかな…？」

仕上「もしやうなう…俺がそいつをボロボロにしてやる…」

当麻「落ち着いて浜面…」

明らかに怒りを見せる浜面だったが、当麻が落ち着かせるとにかく、一旦帰ることを決めた少年少女達。

上条はフェイトとアルフの二人に合流して、本日のジュエルシードの搜索を始めた。

いつもより暗い雰囲気を醸し出している少年を、不審に思ったフェイトとアルフは少年に何があったのかを聞いていた。

フェイト「そんなことが…」

アルフ「…」

当麻「うん…」

フェイト「当麻はその子を飼う事にしたんだよね？」

当麻「うん」

フェイト「じゃあ今度ペットフォードとか餌で買いに行こうか？」

当麻「…そうだね」

ジュエルシードの搜索を再開する三人。

それから数時間が経つて、本日も見つからないのかと考えていた三人。

そろそろ帰宅する時間に近づいてきたが、そこで少年が一つの提案をする。

当麻「ちょっとあつむを見てくれるよ」

フェイト「分かった」

アルフ「早く戻つてきなよ」

フェイドとアルフも別の方へ移動する。
二人と別れた少年はジュエルシードを探し続けていたが、そこで彼
は思わず人物を見つける。

当麻「高町さん？」

なのは「か…上条君…？」

当麻「びびしたのこんな時間に？」

なのは「ちょ…ちょっとね…」

何が起きているのか理解できない少年だが、少女の焦った表情
を見た上条当麻は…

当麻「なんだか分からぬけど、僕もついて行くよ

なのは「え…でも…」

当麻「それに、もうこんな時間だし一人じゃ危ないよ」

なのは「…」めんね…」

当麻「気にしないで」

そして少年は少女にびにに向かつつもりなのかと質問する。
少女は動物病院に向かつつもりだつたらしく、移動中に少年と遭遇

したといふことらしい。

少年は何故動物病院に向かうのかその理由が分からなかつたが、少女にその理由について聞くよなことはしなかつた。

動物病院に到着する高町なのはと上条当麻。

当麻「やっぱり誰もいないのかな？」

なのは「…」

何かを探すような動作をするなのに疑問を覚える当麻だつたが…

「「え？」」

突如、一人の前を二つの生物が通り抜けた。

一匹は昼間のフェレットらしく身体に包帯が巻かれていた。

一匹は身体から触手の様な物が生えている明らかに普通ではない生物だつた。

なのは「な…何…あれ…？」

当麻「…」

呆然とするなのはと当麻だつたが、フェレットは怪物に追いかげられたままだつた。

木に登るフェレットに対し木に体当たりをする怪物。

メキメキ！！

怪物の体当たりを受けた木がいとも簡単にへし折れる。

空中に投げ出されたフェレットだつたが、少女がフェレットをキヤ

ツチする。

フェレットをキャッチした直後の少女に、怪物は近づく。

なのは「やああーー！」

当麻「高町さんーー！」

すかさず襲い掛かってくる怪物に、怯える少女の前に少年が出る。恐怖に震えながらも、少年は右手を突き出す。

バキンー！

少年の右手に怪物の身体が触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡る。

怪物の身体の一部が欠けていた。

しかし、その欠けた部分は徐々に元通りになつていった。

呆然としているなのはの手を握り、当麻はその場から全力で逃げ出していた。

怪物から逃げている最中に、すこしばかり落ち着いたなのは。

なのは「な…何なのあれ？」

当麻「分からないけど…今はとにかく逃げなきゃ…ー！」

少年は怪物の正体について心当たりがあつたが、今は逃げることに専念していた。

フェイントの下に向かう途中で、フェレットが目を覚ました。

そして更に驚くべき出来事が発生したのだ。

何と高町なのはが抱きかかえていたフェレットが喋つたのだ。

あまりにも異常な事態に固まる一人だったが、フェレットはなのは

に話しかける。

フュレットの話の中で魔法といつキーワードに少年は反応する。

間違いない。

目の前のフュレットは、フュイトやアルフと同じ魔法に関係している。

フュレットがなのはに話しかけている最中で、先程の怪物が追いついた。

再び当麻のなのはの前に出る。

そして、怪物に右手を向ける。

しかし、怪物は身体から触手を伸ばして少年の右手を避けて、身体に直撃させる。

当麻「がっ！？」

なのは「上条君！！」

触手に突き飛ばされた少年は、コンクリートの壁に勢い良く激突する。

そして、少年の意識は深い闇に飲み込まれていった。

第8話 少女の決意

なのは「上条君……」

コンクリートに叩き付けられて氣絶した少年の下へ向かう少女。

なのは「上条君…しつかりして…」

少年を揺さぶっても起きる氣配は全く無い。
そうしてこるづちで、徐々に迫り来る怪物。

? ? ? 「くつ…」

痛みを我慢して、怪物との間で割り込むフーレット。それは自分達を庇うフーレットの姿を見て、一つの決意をする。

なのは「どうすれば魔法って力が使えるの?」

? ? ? 「え…？」

なのは「上条君やフーレットさんにはこれ以上傷付いて欲しくない
から。だから…」

? ? ? 「…」れを…」

なのはの言葉を聞いたフーレットは、少女に赤い石を渡す。

なのは「これって…暖かい…」

？？？「それを手に持つて、目を閉じて、心を澄ませて、今から僕が言つ言葉を繰り返して」

なのは「う…うん…」

「我、使命を受けし者なり」

「『我、使命を受けし者なり』」「契約の元、その力を解き放て」

「えつと……『契約の元、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に」

「『風は空に』、星は天に』」

「そして、不屈の心は」

「『そして、不屈の心は』」

「『この胸に』……」

瞬間。

高町なのはが持っている赤い玉から、桃色の光が進る。

当麻「う…」

タイミング良く少年が目を覚ます。

「『この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ』……」

先程よりも、一層強い光が周囲を照らす。

怪物は少女から距離を取っていた。

当麻「眩し…」

『Stand by ready - Set up!』

光が収まつていき少年は目を開ける。

光の中心部には、白を基本とした服に身を包み、大きな杖を持った、高町なのはの姿があつた。

当麻「フェイトと同じ…」

厳密には色々異なるのだが、目の前の少女はフェイト・テスター RSSAと同じ魔法を扱う力を得たということを少年は理解した。事情を知っている少年とは異なり、何も知らされていない高町なのは本人は…

なのは「ふえ？ ……ふええええええええええええええええ…？」
「これって魔法少女なの！？」

非常に動搖していた。

無理もないだろう。

単なる噂でしかなかつた魔法少女に自分がなるなど、誰が想像できるだろうか。

しかし、怪物はそんな少女を見逃すほど慈悲深いといつわけではなく、少女に向かつて突進して來た。

？？？「危ない…！」

なのは「さやああーー！」

無意識に杖を正面に向ける少女。

『Protection』

かつて、上条当麻をトラックから守ってくれたフェイト・テスタロッサが使用していた物と同じ壁が、少女の目の前に発生する。

怪物が魔力で作られた壁に激突する。

しかし、その壁は非常に頑丈らしく怪物の攻撃を全く受け付けない。怪物の身体が削られて、周囲に飛び散り、様々な物を破壊するが、今の少女にそのことを気にしている余裕はなかつた。

再び怪物の身体が再生していく様を見て、恐怖するなのは。

その隙を見逃さなかつた怪物は、不完全に回復した身体で少女に突進してきた。

しかし、怪物の一撃は少女に当たることは無かつた。

バキン！！

当麻「高町さん…大丈夫…？」

なのは「か…上条君…？」

意識を取り戻した少年は、怪物と少女の間に割り込み、右手を突き出して少女を怪物の攻撃から守つていた。

しかし、先程少年が受けた怪物の攻撃は思つた以上に強烈だつたらしく、少年は所々出血していた。

なのは「上条君…血が…」

当麻「僕なら大丈夫…」

？？？「あれは魔力の塊なんだ！ 物理的な攻撃じゃ駄目なんだ… 魔力を減らすとかして力を弱らせてからコアを封印しないと…！」

なのは「私なんかに出来るのかな？」

当麻「大丈夫…きっと…高町さんなら…」

怪物の攻撃を受け止めている少年の声を聞いた少女は、決意した。そして、少女は目を閉じる。

自分の呪文を見つける為に…

程なくして、少女はその呪文をみつけた。

高町なのはは瞳を開ける。彼女に最早迷いは無かつた。

「『リリカル、マジカル…』」

「封印すべきは、忌まわしき器『ジュエルシード』…」

「『ジュエルシードを、封印…』」

『Sealing mode . Set up』

なのはの杖から強烈な光が発生して、その光は怪物に直撃する。その光は怪物を包み込み、少しづつ怪物の身体が崩壊していく。そして、怪物の眉間にローマ数字が出現した。

？？？「今だ！」

フレットの言葉に少年は、最後の力を振り絞りその場から離れた。

なのは「ジユエルシード、封印……」

『Seal』

怪物の身体は更に崩壊していく、やがてその身体は完全に消滅して、その場には宝石が残っていた。

? ? ? 「……早く、杖での宝石に触れて……」

なのは「あ……うん」

フュレットの言葉に従い、なのはが杖の先端の赤い宝石で、それに触れると青い宝石に吸い込まれていった。
しかし、変身を解除した少女の災難は、終わることが無かった。

? ? ? 「巻き込んでしまって……」めん…なさい……」

当麻「なんとか…なつて…よかつた…よ…」

意識を失つたフュレットと上条当麻。

なのは「ふ…一人とも…ーー」

どりじていいかまったく分からず、動搖するなのはの前に…

桃子「なのは?」

なのは「お…おぬせん…?」

家を勝手に抜け出したなのはを探しに来ていた高町桃子がその場に居た。

その頃、結標真紀は端末の様な物で何者かと連絡を取っていた。

真紀「ええ…ロストロギアの反応は未だに見られないわ」

「…」

真紀「分かっているわ。あれがどんなに危険なものなのか」

「…」

真紀「それじゃあね」

そう言って、彼女は携帯端末の電源を切る。

真紀「全く…職務熱心なのは悪くないけど、堅物過ぎるのも悩みものね…」

彼女の前には一人の女性が立っていた。

真紀「この間の魔術師といい…あなたといい…この町に何かあるのは確実なんだけどね」

正面の女性は杖の様なものを構える。

そして、大量の魔力弾を少女に向けて発射する。

ドーン!!

真紀「穏やかじゃないわね……」

先程とは全く異なる場所に移動していた結標真紀は、小型の機械を取り出す。

真紀「フェンリル」

『Set up』

少女の服装が変化する。

しかし、彼女の姿はフェイトやなのはの様な魔法少女を彷彿とさせ
る様な服装ではなく、どことなく機械的な印象を『えていた。

真紀「生憎『これ』には非殺傷設定なんて便利な機能はついてない
から、死んでも気にしないでね～」

? ? ? 「…？」

女性の両手両足が、光の輪の様な物で拘束される。

真紀「ちなみにそれ…ただのバインディングじゃないからね～」

バリバリバリ…！

輪から発生した電撃が女性を容赦なく襲う。

? ? ? 「……！」

そして…

ドサッ――

真紀「全く……海鳴も物騒になつたわね……まあ……学園都市ほどじやないけど……」

結標真紀はそのまま血色に向かって帰つて行った。

その頃……

フロイト「アルフ……やつちは……？」

アルフ「駄目だ……どこにもいない……」

フロイト「当麻……一体何処に行つたの？」

第9話 大切な約束

当麻「…は…？」

先程、自分が居た場所とは異なり、目が覚めた少年の視界に入ったものは見たことも無い光景だった。

桃子「目が覚めた？」

上条当麻に声を掛けたのは、高町なのはの母親である高町桃子だった。

当麻「高町さん…お母さん？」

桃子「少し待つてね」

そのまま高町桃子は、部屋から出て行く。

当麻「あれから、一体何が…」

少年は自分の体を見る。
体には包帯が巻いてあった。

どうやら、高町家の人気が治療してくれたらしい。

当麻「高町さんに迷惑掛けちゃった…」

当麻は迷惑を掛けたことにに対する罪悪感を感じていた。
それから少し時間が経ち、高町なのはが部屋に入ってきた。
少女は、その腕にフェレットを抱きかかえていた。

ちなみに、高町桃子はその場に居なかつた。

なのは「上条君……体は大丈夫?」

当麻「うん。迷惑掛けで」「めんね……」

なのは「うん。私のせいで上条君が怪我したんだから……」

当麻「そんな」とは……」

なのは「本当に……めんなさい……ひっく……」グス

当麻「高町さん」ポン

なのは「え?」

当麻「僕が勝手にやつたことだから、高町さんが気にする必要は無いよ」

なのは「でも……」

当麻「それに、高町さんがいなかつたらこの程度じゃ済まなかつたと思つしね」ナデナデ

なのは「う……」

当麻「だから、高町さんが気にする必要はないんだよ」ナデナデ

なのは「う……うん……」

なのはの頭を撫でながら笑顔で語りかける当麻。

？？？「怪我は大丈夫かい？」

当麻「うん。君はどうなの？」

？？？「余った魔力を回復に使わせてもらつたから、僕は大丈夫だよ」

フェレットの体の傷は殆ど無くなつてあり、少年は軽く驚く。

当麻「良かつた…」

？？？「巻き込んでしまつてごめんなさい…」

当麻「気にしないでよ。僕が勝手にやつたことだから」

？？？「…」

当麻「それにしても…君は一体…喋るフェレットなんて初めて見たけど…」

？？？「それは…」

フェレットは、自身の正体と目的を二人に語る。

フェレットの名前は、ユーノ・スクライアと言つた。

ジユエルシードと呼ばれる宝石は、元々彼が居た世界に存在するもので、発掘作業を行つていた彼が偶然掘り起こして、別の世界に散らばってしまった物らしく、彼が一人で回収作業を行つているという話だった。

一人にその話をするときのユーノの表情は暗かつた。

恐らく、自分自身の問題に魔法とは全く関係ない人間を巻き込んでしまった罪悪感があるのだろう。

なのはは、別世界の話を聞いて驚きを隠せなかつたが、当麻はフェイトと既に出会つてゐるため、そこまで驚くような話でもなかつた。一連の話が終わり、少年は大切なことを思い出した。

当麻「高町さん。電話借りてもいいかな？」

なのは「え…?う、うん。構わないけど…」

少女は少年を電話の場所を教えて、少年は電話を掛ける。彼が連絡した先は、現在彼が住んでいるマンションに向けてのものだつた。

『マンション』

一方その頃、フェイト・テスター・ロッサとアルフはマンションに帰つていた。

上条当麻を探していた二人だつたが、結局少年を見つける事が出来ず、アルフに少年がマンションに帰つてゐるのかも知れないと言われたフェイトは、一旦マンションに戻ることに決めた。

しかし、マンションに少年は帰つておらず、再びマンションを出て少年を探すことを決めた二人だつたが…

Prrrrr…!

フェイト「電話?」

アルフ「こんな時間に誰なんだ?」

不審に思いながらも、受話器を取るフロイト。

フロイト「あなた様ですか？」

当麻「もしもし…フロイト？」

フロイト「当麻！？」

アルフ「当麻のかい！？」

驚く一人だったが、少年から何があつたのか説明される。ジュノルシードの暴走によつて生まれた怪物に襲われて氣絶して、クラスメートの子の家にお世話になつてゐる」とうじい。

当麻「ごめんね…迷惑掛けて…」

フロイト「ううう…当麻が無事でよかつた…」

当麻「それじゃあね…」

フロイト「うん…」

通話が終了してフロイトは受話器を置く。

フロイトとアルフは当麻と別行動を取つていたことを後悔していた。もし、その場に自分がいれば少年が怪我をすることがなかつた。

フロイトはそのことに心を痛めていた。

フロイトとアルフに連絡を終えた少年は、再び部屋に戻つた。

ユーノ「連絡は終わったの？」

当麻「うん。高畠さん。手間掛けちゃうやつはいるんだね」

なのは「ううん。気にしないで」

「当麻、それじゃあ僕は帰るから」

なのほーえ？」

当麻 あまり長居するわけにもいかないだろうし、

なのは一で……でももう夜中だし……

桃子一なのはの言ひ通りよ上条君

高町桃子が部屋に入ってくる

当麻「で
でも

桃子「それに夜中は何かと危険だからね」

当麻「迷惑を...」

少年が言い終える前に、高町桃子が上条当麻を優しく抱きしめる。

桃子「無理しなくていいのよ…」

抱きしめられて驚く少年だったが、懐かしい感覚を思い出し、そのまま眠りについた。

翌日、本日は小学校が休日ではなかつたのだが、なほはの両親が学校に少年が休むとの連絡を入れてくれた。

当麻「本当にありがとうございました」

桃子「本当にいいの？無理しないほうがいいわよ？」

当麻「大丈夫です」

少年は結局、高町家で泊まつた後にマンションに帰る事にした。

桃子「気をつけてね」

当麻「はい」

マンションに帰宅した少年は、フェイトとアルフに再開する。

フェイト「当麻！」

アルフ「大丈夫かい！？」

当麻「うん。迷惑掛けでごめんね」

フェイト「ううん…私がしつかりしてれば…」

当麻「そんなことないよ」

アルフ「当麻の言つとおりだよフェイト。当麻も無事だつたんだし」

フェイト「やうかな…？」

場の雰囲気を切り替える様に、上条当麻はフェイントとアルフに一つの頼みごとをする。

当麻「いきなりだけど、一人にお願いがあるんだ」

フェイント「お願い？」

アルフ「なんだい？」

当麻「僕に戦い方を教えて欲しいんだ」

「え？」

予想外の申し出に動搖するフェイントとアルフ。

当麻「一人の足を引っ張りたくないんだ。それに…」

フェイント「それに？」

当麻「フェイント達に無理して欲しくないから…」

厳密には、フェイントとアルフだけではなく、高町なのはとコーン・スクライアも含まれていた。

ジユエルシーの問題を、同じ年の少女に任せることは少年にとって我慢出来ないことだった。

だからこそ、少年は彼女達の負担を軽くする為に一人の少女に戦い方を教わることを決めたのだ。

強い決意を宿した少年の瞳を見たフェイントとアルフ。

フロイト「分かつたよ。だけぞ今日は休まなきや」

アルフ「やうだよ。この状態じゃ戦い方を教えることなんて出来ないよ」

当麻「うん」

一人の言葉に従い、本田はマンションで休養を取ることにした上条当麻だった。

その頃、浜面仕上は海鳴市をぶらついていた。

仕上「暇だな~」

今日は、上条当麻が休みということもあり、当麻を誘って遊びに行くつもりだった浜面は暇になつたのだ。

仕上「なんか面白いモンでもないかな?」

少年が海鳴の公園を通りがかつた時、公園のベンチに目を開けたまま、微動だにしない少女の姿を見つけた。

仕上「何やってんだあいつ?」

明らかに目立つている少女を見つめている浜面だったが、少女の体が少しずつ傾いていた……

ドサー!

仕上「お、おい!?」

少年は慌てて少女の下に駆け寄る。

仕上「大丈夫か！？」

少女に声を掛けるが、返事は無い。
救急車を呼ぶ為に、急いでその場から離れようとしていた少年だったが…

？？？「グー…スカー…ピー…」

仕上「グースカーピー？」

再び少女に近づく。

仕上「何だよ…寝てるだけじゃねえか…」

拍子抜けした少年は盛大な溜息をつく。

少年の溜息で目が覚めた少女は、寝ぼけ眼で周囲をキョロキョロ見回して…

？？？「南南西から電波が来てる…」

仕上「はあ…？」

少女が話している内容が全く理解できない浜面仕上。

？？？「あなたは？」

少年に気付いた少女は、少年の顔をじ～っと覗き込む。
仕上は内心ドキドキしながら、少女の質問に答えた。

「仕上、お前が意識を失つてると思つて近づいたんだよ。救急車を呼ぼうとしたら、寝てるだけだったとは思わなかつたけどな…」

？」

仕上「やうこや……」ハジヤ見ない顔だけど……」

？？？「私は……海鳴に来るのは初めてだから……」

仕上一そらのが……よし……」「

突然何かを思いついた少年は、少女の方を向いて笑いながら

仕上：なごみの俺が海団を案内してやるよ！」

[२१६]

仕上 がまれねがてしそんじや お行いせ

少佐は少女の手を握り、その場から駆け出しだった。

それから少しばかりの間を空けて、二人

はいれつほつちもなかつた。

少年が案内した場所は、ゲームセンターや翠屋などだった。ゲームセンターで遊んだ際に、少年はH.F.O.キャラツチャード

翠屋に到着した際は、高町家の人々に一ヤ一ヤされながら見られて

少女は基本的に無表情だったが、少年に案内されていたときは、少しばかり笑顔が見えた気がした。

少年も最初は、単なる暇つぶしのつもりだったが少女と一緒にいる時間を楽しいと感じていた。

再び一人が出会った公園に戻った。

浜面仕上は滝壺理后と一緒に居るうちに様々な話を聞いた。

少女は学園都市に向かう途中で、海鳴市に立ち寄つたらしく、公園で昼寝していたときに少年と出会つたらしい。

学園都市に憧れを持っている少年だったが、この前に高町なのはと月森すずから聞いた話を思い出す。

学園都市に行つたら、学園都市の外に出るだけでも大変な手続きが必要になるということ。

超能力という物を手に入れるために脳を開発するということ。
一緒に遊んだ少女が、そんな遠い場所に行つてしまつことを実感する。

理后「そろそろ行かなきや……」

仕上「そうか……」

理后「今田は楽しかったよ。ありがと今はまつり」

仕上「俺も楽しかったよ。ありがとな滝壺」

理后「じゃあ… さよなら…」

少女は少年の下から立ち去つていく。

どんどん離れていく少女の後姿を見ていた少年は、全力で叫んだ。

仕上「またな……また遊ぼうぜーーー滝壺ーーー！」

少女の足が止まり、少年の方を向く。

理后「ありがとね…はまづら…またね…！」

滝壺理后の姿が見えなくなつても、浜面仕上は手を振り続けていた。

第10話 少年の特訓

『私立聖祥大附属小学校』

仕上「はあ…」

当麻「浜面? どうしたの?」

アリサ「朝からこの調子だから放つておいたほうがいいわよ
溜息をついている仕上を心配した当麻が声を掛けるが、アリサに止められる。

当麻の言葉に反応しない少年だったが、仕上が溜息をついている理由は先日、彼が出会った滝壺理后といつ少女が原因であった。

すずか「でも… 浜面君、一体どうしたんだろ? うね?」

アリサ「ああ… 浜面が何考えてるかなんて分かるわけないでしょ」

なのは「体調でも悪いのかな?」

当麻「どうなんだろ? うね?」

なのは「やつじえぱ… 上条君。身体は大丈夫?」

当麻「大丈夫だよ。ありがと! 高町さん」二二一

なのは「う…うん… //」

少女の顔が少しばかり赤かつたが、鈍感な少年がそのこと気に付くことはなかった。

仕上「学園都市か……」

すずか「学園都市がどうしたの?..」

アリサ「学園都市にでも行きたいわけ?」

仕上「まあ…会いたい奴がいるんだけど…」

当麻「学園都市に友達でも居るの?」

仕上「まあな

なのは「やつなんだ

浜面仕上の友人が学園都市に居るといふことを始めて聞いた一同だつたが、それほど興味があるわけではないのか、その事について言及する気は無かつたらしく。

子萌「学園都市がどうしたんですか~?」

学園都市の話をしていた少年少女達の下に、担任の月詠子萌がやって來た。

なのは「浜面君の友達が学園都市に居るところ話をしていたんですね

よ」

子萌「そうだつたんですか。もしかしたら、先生が浜面ちゃんの友達に出会うかもしませんね」

上条「子萌先生は学園都市の先生でしたよね」

子萌「そうなのですよ~」

アリサ「先生以前に大人つていうのが納得できないけどね…」

すずか「ア…アリサ…」

子萌「だから~私はれつきとした大人なのですよ~！」

アハハ！！

何気ないやり取りをして、平凡な一日を過ごす少年達と少女達。

『マンション』

授業が終わって、上条当麻は早速マンションに帰った。

今日は、フェイトとアルフに戦い方を教えてもらうと約束した田だつた。

当麻に戦い方を教えると約束したフェイトとアルフだったが、少年用のデバイスなど所持していなかつたし、少年が自分達のように戦えるわけではないと理解していた。

ゴーレムと対峙した時の服装になつているフェイト。

ちなみに、少女が身に纏っている服はバリアジャケットと言つりしい。

少女は魔力で構成された障壁を作り出した。

フェイト「当麻。右手での壁に触れてもいい？」

当麻「うん」

フェイトが何故いきなり障壁を作り出して少年の右手で触れるように指示したのかと言うと、それは、ゴーレムと戦った際に少年の右手がゴーレムに触れた際に、ゴーレムの身体の崩壊したことからなんらかの魔力を打つ消すことがあるのではないかと推測したからだ。少年の右手が障壁に触れた途端…

バキン！！

ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、障壁は跡形もなく消滅した。

当麻「え？」

アルフ「バリアが消えた？」

少年は、ゴーレムやジュエルシードの暴走によつて生まれた怪物との戦いでも右手を無意識に突き出していたが、自分の右手にこのようないがが宿っているとは知らなかつたのだろう。

フェイト「（やっぱり…）

少年が障壁を打ち消した場面を見て、フェイトは一つの確信をする。

「フエイト、当麻とアルフが握手してもうつてもいいかな？」

アルフ「ああ」

当麻「うん」

フエイト「言い忘れていたけど、当麻は右手で握手してね」

当麻「分かったよ」

ガシッ！

アルフ「あれ？ 何だか力が抜けていく？」

フエイト「もういいよ」

アルフと当麻は握手をやめる。

フエイト「もう一度握手してもらつていいかな？ 当麻は今度は左手でお願い」

再び握手をする二人。

フエイト「アルフ。何か違和感みたいなものはある？」

アルフ「いや……無いけど……」

当麻「どうしたのフエイト？」

アルフと握手させた意図が分からず、質問する当麻。

フェイド「多分なんだけど…当麻の右手には魔法の力を打ち消す力が宿っているんだと思つ」

当麻「魔法を打ち消す力？」

アルフ「それって… アンチマジックグローブ AMGみたいな物かい？」

フェイド「そうだと思つけど…」

当麻「そんな力があるなんて…」

自分の右手に魔法を打ち消す力があることに驚きを隠せない少年。しかし、右手にその力が宿つていなければゴーレムの戦いで確実に命を散らしていた。

それが、少年にとっての幸運か不幸かは誰も知る由がない。

フェイド「じゃあ早速、特訓を始めるけどいいかな？」

当麻「うん。よろしくお願ひしますー。」

特訓の内容は、フェイドが放った魔力弾を打ち消したり、アルフに近接戦闘を習うといったものだった。

少年が特訓をしている頃、高町なのははユーノ・スクライアと一緒に海鳴市を歩き回り、ジュエルシードの搜索を行っていた。ユーノの話を聞いたなのはは、彼に協力してジュエルシードの搜索に当たることを決めた。

なのは「（見つからないね…ジュエルシード…）」

「……（やう簡単に見つかるような物じゃないからね……）」

念話で会話する一人。

喋るフォレットと会話している所を、見られるわけにはいかないの
で口のよつた形で会話することになった。

なのは「見つからなーなあ……」

真紀「ビービーしたの類へ。」

なのは「え？」

困つてている様子の高町なのはに声を掛けた結標真紀。

真紀「何か困つてているよーひだつたから……」

なのは「いやはは。すこません。大した事じやないんですね」

真紀「そつ。ならいいけど……」

なのは「心配してくれてありがとひーぞ」

真紀「いえいえ。困つたときはお互ひ様だからね」

結標真紀と別れる高町なのは。

真紀「（あれは…念話か…あの子は…）」

それから、ある程度の時間が過ぎて高町なのははジュエルシードによつて、怪物化した犬と戦つていた。

始めの頃に比べて、スムーズに変身できた上に順調にジュエルシードを封印することが出来た。

そんな少女の様子を離れたところから見ている真紀の姿があった。

真紀「あの子も魔導師か…全く…厄介な事になりそうね」

ヒュン…!

音も無くその場から消える結標真紀だった。

翌日、上条当麻のマンションに少年宛に差出人不明の手袋が送られてきた。

フェイトとアルフにその手袋を見せる当麻。

当麻「これってどうしたことなんだろう?」「

アルフ「何で右手用だけしかないんだよ…」

当麻「誰が送ったのか全然分からないし…」

フェイト「もしかして…この手袋を送った人は当麻の右手について何か知っている人なのかもしないね」

当麻「そうなのかな?」

アルフ「確かに…そうじゃなきや右手用しかない手袋なんてただの嫌がらせだろ?」「

当麻「そうだね…」

フェイト「でも…誰が何の為に…」

アルフ「それは分からぬけど…とにかく、せつかくだから試してみようよー。」

アルフの提案に乗った当間は早速、手袋を着けてアルフと握手する。

アルフ「やつぱり…力が抜けない…」

手袋を着けている状態だと、少年の力が発動しないことを理解した一同。

しかし、誰が何の為にこの手袋を送ったのかその理由が分かる者はその場に居なかつた。

その頃…

？？？「うう…お腹が超空きました…」

一人の少女が海鳴市をうろついていた。

第1-1話 歪んだ奇跡

????「孤児院を抜け出したのはいいんですが……お腹が超空きまし
た……」

海鳴市をふらふらしながら歩く少女は、どうやら家出をしてこるよ
うだった。

少女が居た孤児院は、別に子供達に対しても非人道的な行いをしてい
る訳ではない。

しかし、孤児院に居る子供達の中でもとりわけ活潑だったこの少女
に、そこで生活は耐えれるものではなかつたらしく、こつして孤
児院を抜け出したのだ。

????「それにしても……ここは海鳴の何処なんでしょうか？」

基本的に外出を禁じられている為、少女は現在自分が歩いてる場所
が海鳴のどこか全く把握出来ていなかった。

しかし、運良く少女は少年と少女を見つける。

????「丁度いいですね。ここが海鳴のどこなのか尋ねてみましょ
う」

恋人同士の様な雰囲気を醸し出している少年と少女だが、生憎
幼い少女にはその機微を感じることなど出来ない。

少年が少女に宝石の様な物をプレゼントしようとする場面で、少女
は一人に近づいていくが、突然少年が少女に渡そうとした宝石が強
い光を放つ。

????「え……」

そして、光が収まつた頃…

少年と少女が居た場所には巨大な木があつた。更に、その周辺には巨木の根っここの様な物が生えていた。

？？？「えええええええ！？超何なんですかあああ！…？」

少女は田の前の異常事態にただただ絶叫していた。

少し前…

高町なのはとアリサ・バーニングスと月村すずか、上条当麻と浜面仕上の五人はサッカーの試合観戦をしていた。

今日は地元の少年達のよる試合があつたらしく、高町なのはの家族に誘われてこうして試合を眺めていたのだ。

アリサ「浜面と上条はサッカーをしないの？」

仕上「ああ…」

上条「僕はサッカーをしたことがないから…」

試合が終了して、一同は翠屋に集まつた。

ちなみに先程試合をしていたチームである翠屋JFCのメンバーも招かれていた。

ケーキをご馳走になる少年少女達。

仕上「それについても…こいつも元気になつたみたいだな～」

ワシャワシャ…！

ユーノ「キュー！」

テーブルの上に乗っているユーノを浜面が触る。

すずか「そうだね。元気になつてよかつたよ」

アリサ「ざるいわよ浜面！私にも触らせなさい！」

ユーノを取り合つアリサと浜面。

そんな一人の様子を見ながら微笑む三人。

仕上「そういう結局こいつは上条じやなくて高町が飼う事になつたんだよな？」

なのは「うん。家の人も気に入つてくれたし……」

少年少女達が話している間に、翠屋JFCのメンバーはケーキを食べ終えたらしく、高町四郎に挨拶をして帰つていく。

なのは達も彼等を見送ろうと、店の外に出た。

彼等が見送つていた一人の少年が、バッグの中から小さくて輝いている宝石みたいなものを取り出して、ポケットの中に入れた。それを偶然見た当麻となのは。

当麻「（あれつて……まさか……ジュエルシードっ）」

なのは「（あの子……氣のせい、だよね……）」

彼等を見送った一同。

当麻「「」めん。ちょっと用事が出来たからまた明日」

一同と別れた少年は、先程の少年を急いで追いかけた。

少年が何処に行つたのか分からぬ当麻だったが、運良く少年を見つけることが出来た。

丁度、少年が少女にジュエルシードを渡そうとしている場面だった。
彼等の近くには一人の少女も居た。

急いで少年と少女の下に走るが時既に遅く…

ジュエルシードから発生した光が少年と少女を包んだ。

当麻がメンバーと別れてから、解散したのは達。

なのはとユーノは、本日もジュエルシードの搜索に勤しんでいた。
少女は先程の少年が持つていた宝石に疑問を感じていたが、少年に言及するようなことはしなかつた。

そして、突如ジュエルシードの暴走を閲した二人は、一旦ビルの屋上に移動した。

高町なのはとユーノ・スクライアはジュエルシードの暴走によって引き起こされた暴走を目の当たりにした。
街中の至る所に張り巡らさせた巨大な木の根。
そして、街の中心部に存在する巨木。

なのは「これって…」

ユーノ「たぶん人間が使つたんだと思う。不完全でもジュエルシードは人間の願いによつて凄まじい力を發揮するから……」

なのは「そんな……私のせいだ……あの時ちゃんと調べてれば……」

しかし、少女が後悔しても状況が好転するわけではない。

その頃、ジュエルシードの暴走の中心部に居た上条当麻と少女は…

？？？「超訳が分かりません！！」

当麻「お…落ち着いて…」

？？？「これが落ち着いていられますか！？」

軽いパニックに陥った少女を落ち着かせる上条当麻。
巨木も近くに居る二人の存在に気付いたのか根っこを伸ばして二人
に攻撃を加える。

？？？「きやあああ！！」

巨大な木の根が襲い掛かってくる。
そんな物が直撃すれば無事で住む筈がない。
少女は無意味と知りながらも、頭を抑えてうずくまる。
しかし、巨木の根が少女に直撃することは無かつた。

バキン！！

少年の右手に触れた木がいとも簡単に消滅する。

？？？「え…？」

何が起きているのか全く理解できない少女。

当麻「とにかくここから離れるよーー！」

ガシー！

少年に手を掴まれて動搖する少女だったが、いち早く落ち着きを取り戻した少女は…

？？？「分かりました！！」

少年と少女はその場から全力で逃げ出した。襲い掛かる根っこは右手で打ち消しながら、ある程度離れた場所に移動することに成功した一人。

当麻「怪我は無い？」

？？？「は…はい。大丈夫です」

当麻「良かつた…」

呼吸を整える一人だが、そんな一人は近くに一人の少女が居ることに気付く。

当麻「高町さん！」

なのは「え…？上条君？」

当麻はなのはに声を掛ける。

ちなみに、少女はバリアジャケット姿であり一般人から見れば、コスプレでもしているのかと勘織られそうだが、今はそんなことを言つている場合ではなかった。

なのは「どうしてここに？」

当麻「高町さんー」の子をお願いー！」

そつと少年は傍らに立つ少女に話す。

なのは「上条君は何処に行くのー？」

当麻「ジユノルシードの暴走の巻き込まれた子が居るんだーー！」

ダツー！

そつと少年は、再び暴走の中心部へ向かって行った。
止める間もなく少年の姿を、呆然と見ていることしか出来なかつた
少女。

？？？「それって『スプレですか？』

なのは「えー？えーと…『れは…』

予想だにしない質問に動搖するなはだつたが、ユーノに念話で話
し掛けられる。

ユーノ「（なのはーー早く彼を追いかけないとーー）

なのは「（ひ…うふーー）

ユーノの言葉を聞いたなのはは…

なのは「ちゅうとーーで待つてもいいのかな？」

？？？「…はー…」

なのは「ごめんねーすぐ戻るからー。」

高町なのはも上条当麻を追つて、暴走の中心部へ向かつた。巨木の根元に辿り着いた少年は、巨木の根に阻まれて先に進めずにいた。

当麻「くつ…」

バキン!!

少年は行く手を阻む根を打ち消しながら進もうとするが、所詮は單なる小学生でしかない当麻は体力を相当消耗していた。

ビシュ!!

少年に向かつて突撃してきた根が頬を掠める。
そこから血が滴り落ちていた。

しかし、少年がその程度で諦めない。

他人の不幸を許さない少年だからこそ、彼は拳を握るのだ。

当麻「はあ…はあ…」

ドツー!!

一気に大量の根が少年に向かつて伸びてきた。

右手一つしか対抗手段の無い少年に、この攻撃が防ぎ切れるわけではない。

恐らく、この一撃が少年に当たれば命を失う可能性は非常に高いだろう。

しかし、少年はその様な状況でも前に進み続けた。

そして、大量の根が少年に当たる直前…

謎の光が巨木に突き刺さった。

その光は、巨木の中の少年と少女が閉じ困られている繭を正確に貫いた。

少年を貫こうとしていた根は動きを止めて、徐々に消滅していった。

当麻「あの子達は…」

少年が周囲を見回す。

そこには、少年と少女が倒れていた。

外傷は無く、無事な姿を確認できた少年は安堵した。

当麻「良かつた…」

? ? ? 「超大丈夫ですか！？」

当麻の下に駆けつけた少女。

続いて、なのはとユーノもその場に現われた。

なのは「上条君…」

なのはは当麻の姿を見て後悔する。

所々傷を負つており、頬からは血が流れていた。

なのは「ごめんなさい…私があの時気付いていたら…」

もし、少年が所持していた宝石について問い合わせていたら、この様な事態には陥らなかつた。

当麻「ううん…僕はあれがジュエルシードだつて氣付いて行動してたのに…結局僕だけじゃ一人を助けられなかつた…」

なのは「でも…上条君は…」

上条当麻は右手以外は普通の小学生であり、高町なのはの様に魔法の力を持つているわけではない。

当麻「高町さん…」

なのは「いめんなさい…」

上条当麻も高町なのはもフェイト・テスター・サも年相応の子供らしくなく、自分で全てを背負い込もうとする性質の人間である。

当麻「高町さん…僕もジュエルシードの搜索を手伝つよ…」

なのは「え？」

少年の突然の申し出に動搖する少女。

当麻「一人だつたら出来ないことでも一人だつたら何とか出来るかもしぬれない」

なのは「でも…」

当麻「それに、僕の右手には魔法を打ち消す力があるらしいんだ」

なのは「魔法を打ち消す力?」

当麻「それなら、僕でも力になれると思つから……」

なのは「…」

当麻「僕はただ…誰かに不幸になつて欲しくないだけだから。それに高町さんには笑つっていて欲しいからね」

なのは「上条君…本当にいいの?」

当麻「うん」

上条当麻は高町なのはに無理をさせない為に、ジュエルシードの搜索に協力することを決めたが、高町なのはとフェイト・テスタロッサがジュエルシードを集める理由は決定的に異なつていて。そのことを理解しても、高町なのはを放つておくことが出来なかつた少年だった。

????「超放つたらかしです…」

そして、先程から一人に放つておかれていた少女は少しばかり不機嫌だった。

一方その頃、ビルの屋上から結標真紀は海鳴を眺めていた。

真紀「やつぱり…ロストロギアは危険ね…そろそろ連絡を入れようかしら…」

端末を起動して『』に連絡を入れようとする少女だったが…

バーン…!

銃弾が端末に直撃して破壊される。

真紀「狙撃か…」

周囲に人影は全く無く、今の銃撃は遠距離から放たれたものであると推測する少女。

真紀「誘つているのかしら…」

破壊されたのは端末だけで、少女に向けて銃弾は撃たれていない。

ヒュン…!

少女は無言でその場から消えた。

真紀「駆動鎧…」

? ? ? 「…」

先程の銃弾を放ったと考えられる場所に移動した少女は、五体の駆動鎧を見つけた。

真紀「学園都市の暗部か…狙いはロストロギアと私の処分つて所で
しうね…」

? ? ? 「…」

少女の問いに答えるつもりがないのか、駆動鎧は少女に銃口を向けてくる。

真紀「まあいいわ… さつやと…」

駆動鎧の一體が小型の機械の様な物体を取り出す。

そして

11

真紅・た・あ・！・？

小型の機械から発生した音を聞いた少女は、突然苦しみ始める。

真紀一頭かくべつ！

謎の激痛でまともに立つていられる状態でない少女に、駆動鎧は一斉に銃口を向ける。

しかし、その銃口が火を噴くことはなかつた。

ズガアア！！

一瞬で全ての駆動鎧が地面ごと切り裂かれる。

紀

痛む頭で少女が見たのは、黒髪で長身の鳥の丈以上の刀を背負った少女だった。

第1-2話 新たな出会い

高町なのはと上条当麻がジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦っていた頃、フェイト・テスター・ロッサとアルフもジュエルシードの暴走によつて生み出された怪物と戦っていた。怪物に苦戦することも無く、ジュエルシードを封印する」とに成功する一人。

少女が居た場所は、海鳴市の中心部から遠く離れており、巨木の根による被害は無かつた。

マンションに向けて移動していた一人だつたが、そこで予期せぬ人物に出会い。

はやて「あれ？」

フェイト「君は……」

アルフ「あの時の……」

フェイトとアルフはハ神はやてに出会い。

どうやら、彼女は図書館から帰つてこる途中らしかった。

アルフ「あの弁当とつても美味かつたよー。」

はやて「気に入ってくれた様でなによりやー。」

フェイト「本当にありがとうね。……ええと……」

お互いに自己紹介していなかつたことに気付く三人。

彼女達が出会つたのは、「コーレムとの戦いのみであり、少女を自宅

に送った際もお互いに紹介をするのを忘れていたのだ。

はやて「血ひ紹介してへんかったな。八神はやてや」

フロイト「フロイト・テスタークロッサだよ」

アルフ「あたしの名前はアルフだ」

はやて「フロイトちゃん」「アルフちゃんか。ええ名前やね」「」

フロイト「あ……ありがとう……」

アルフ「あんたもいい名前だよ」

はやて「おねえさん」

お互いの血ひ紹介を終えた三人。

フロイト「あの弁当のお礼に何か出来ることないかな?」

弁当のお礼に何か出来ることがないかとはやてに尋ねるフロイト。

はやて「お礼なんてそんな……」

アルフ「遠慮なんてしなくていいんだよ~」

フロイト「やうだよ。何でも言つて」

フロイトとアルフの申し出に動搖した少女だったが、何かを考え込んだ後…

はやて「せやな…一人とも私の家に来てもらつてもええか?」

フェイト「いいけど…」

アルフ「何をすればいいんだい?」

はやて「それは家に着いてからや」

何を手伝えばいいのか全く分からぬ一人だったが、そのまま少女について行つた。

そして、一行は一軒家の前に到着する。

はやて「こゝが私の家や」

少女に案内されて、家にお邪魔する一人。

そんな一人に少女が頼んだことは、料理の味見をして欲しいというものだつた。

予想外の申し出に、本当にそれでいいのと聞くフェイトだったが、少女はそれで十分だと告げた。

自宅で色々な事を話す内に、フェイト・テスター・ロッサとアルフはハ神はやてに両親が居ないという事を知る。

上条当麻と同じ境遇の少女。

そのことを知ったフェイトの雰囲気が若干暗くなるが、アルフが無理やりその場を盛り上げた。

慌てるアルフの姿を見て微笑むはやてと苦笑いするフェイト。

フェイトとアルフに料理を振舞うはやて。

自分の作ってくれた料理を絶賛してくれた二人に、少女は内心感謝していた。

一軒家でずっと一人で過ごしてきた少女にとって、この瞬間はとて

も新鮮で幸せだった。

一方その頃…

？？？「こほけーひ…超おいひいでふね…」

当麻「そんなに急いで食べなくて…も…」

なのは「いやはは…」

少女はケーキを頬張っていた。

少し前、上条当麻と高町なのはに放つたらかしにされていた少女は二人に声を掛けようとしたが…

グ〜〜〜〜！〜！

盛大にお腹の音が周囲に鳴り響いた。
顔を真っ赤にする少女に気付いた一人。

氣の毒に思つた当麻は、先程貰つたケーキを少女に差し出した。
目にも止まらぬスピードでケーキを少年から受け取つた少女は、そのままケーキにがつついた。

？？？「こ駄走様でした！〜！」

当麻「よつほどお腹が空いてたんだね」

なのは「大丈夫？」

？？？「大丈夫です！」二カツ

一人に笑顔を見せる少女。

当麻「良かつた…」

？？？「おつと…聞き忘れる所でした。」JJは海鳴の何処ですか？」

なのは「え…？」

予想外の質問に戸惑う二人。

当麻「海鳴には初めて来たの？」

？？？「いえいえ。私は海鳴出身ですよ？」

なのは「ならびひして…？」

？？？「孤児院から外出しちゃいけないって超言われてましてね」

当麻「孤児院？」

なのは「（どこか）とば…」の子は…」「

？？？「退屈なので抜け出して來たんですけど…」

当麻「わらわの驕ぎに巻き込まれたつてこと…」

？？？「その通りですか…」

なのは「災難だったね…」

当麻「孤児院を抜け出して来たつて言つたび、どこか行く当てはあるの？」

「…？」
「いえ…全く…」

当麻「もし良かつたら僕の家に来ない？」

「…え？」

当麻「僕は一人暮らしだから一人増えても問題ないから…」

「…？」
「そんなこと言つて…超変なことをするつもりじゃないですか？」

当麻「し…しないよー！」

「…？」
「冗談ですよ。でも…本当にいいんですか？」

当麻「うん」

「…？」
「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

少女は少年のマンションと一緒に生活することが決定した。
そんな一人を見ていた高町なのは…

なのは「…むへへ…」

当麻「高町さん?…どうしたの？」

なのは「…何でもない…」

少しばかり不機嫌だつた。

「…？」「わ、いえ、まだ名乗つてませんでしたね。絹旗最愛です」

当麻「上条当麻だよ」

なのは「高町なのは。よろしくね」

最愛「上条に高町さんですね。よろしくお願ひします」

当麻「わ、わから『超』って言つてゐるけど、それは一体ど、こ、れ……？」

最愛「口癖ですか……変でしたか……？」

当麻「いや……可愛いく思つたけど……」

最愛「そ……そりですか……／＼／＼」

なのは「……」

当麻「高町さん？」

なのは「……上条君の馬鹿……」ボソ

海鳴の中心部から少し離れたビルの屋上。

黒髪で長身の少女は、あまりにも不釣合にな日本刀を背負つていた。

天草式十字凄教の女教皇である少女は、ビルの屋上に佇んでいた。

神裂「私は…どうしたら…」

少女は、天草式十字凄教の女教皇といつ立場を捨てて、日本中を一人で旅していた。

少女は世界に20人しか存在しない『』の一人で、生まれつき神の加護による強運を持つがそれが周囲の人間に不運を与えていると考へて、女教皇という立場を捨てたのだ。

自分の進む道を見失い、途方に暮れていた彼女に近づく影があった。

「…お～こんな所に居たのかにや～」

神裂「何者ですか？」

少女の近くに居たのは、金髪の少年だった。

どうやら、髪は染めているが年は小学三年生位だった。

「…そんなに威圧して欲しくないぜい。天草式十字凄教の女教皇さんよ」

神裂「つ…? どうしてそれを…?」

「…必要悪の協会。そう言えば分かるかにや～」

神裂「魔術関連の事件捜査や、魔術師・魔術結社の殲滅・処分を任務とする対魔術専門国際治安維持機関…」

パチパチ！

？？？「『』答

わざとらしく拍手する少年。

神裂「そんな組織が私に何の用ですか？」

？？？「単刀直入に言わせてもらつぜ！」神裂火織。必要悪の協会に所属しろ」

少年の纏っていた空気が一変する。

神裂「それはどういふ……」

？？？「必要悪の協会が処分対象とする魔術師がどういう奴かは知つてゐるな？」

神裂「ええ……」

？？？「そういう奴等を放つておくことが、何を引き起こすかも知つてゐるだらう？」

神裂「…分かりました」

？？？「話の分かる奴で助かるぜい。俺の名前は土御門元春だ。よろしくな」

自宅に帰つた結標真紀は、予備の端末を取り出して『』に連絡を入れた。

激しい頭痛を引き起こした謎の機械と、自分を助けてくれた長髪の少女。

解決していない問題は多々あるが、一旦はジュークエルシードの問題について報告するべきと考えて、端末を起動した。

『?・?・?』

?・?・? 「やはり…」

?・?・? 「海鳴市ね…」

?・?・? 「でも…あの世界は…」

?・?・? 「ええ…だからこそ私達は慎重に動かなければならぬわ」

?・?・? 「しかし…！」

?・?・? 「落ち着きなれ。」この世界は表面上は平和だけど、その裏は非常に危険よ

?・?・? 「… ギリ！」

?・?・? 「一回、上層部に報告しますね」

?・?・? 「お願ひね」

マンションに帰宅したフェイイトとアルフ。

八神はやての所で食事を「」馳走になつていたことを上条当麻に伝える為に、少年の部屋に入る一人。

ちなみに、部屋の合鍵は少年が事前に渡していた。しかし、少女達を出迎えたのは上条当麻ではなく…

最愛「超お帰りなさい！！」

フェイト&アルフ「誰！？」

絹旗最愛だった…

第1-3話『幸運』と『不幸』

『マンション』

上条当麻の部屋に見知らぬ少女が居る事に動搖するフュイトとアルフだったが、我に帰ると料理を作つてゐる少年の所まで近づき、問い合わせた。

その時、フュイトが黒いオーラを纏つていたが、少年はそのことには気付かなかつた。

フュイトとアルフに問い合わせられ、少女についての説明をする上条当麻。

アルフ「なるほどね~」

フュイト「…そうだつたんだ…」

説明を聞き終えたフュイトは、少しばかり不機嫌だつた。

フュイト「…全く…当麻は…」

最愛「もしかして…超お邪魔でしたか…」

黒いオーラを放つてゐるフュイトに声を掛ける絹旗最愛。

フュイト「ううん。そんな事無いよ」

最愛「もしかして上条の彼女ですか?」

「…え?」「」

最愛「違つんですか？」

フェイト「そんな…私は…当麻とは…あ…／＼／＼
顔を真っ赤にしながら口籠るフェイト・テスター。サ。
アルフはそんなフェイトの姿を見て苦笑にする。

当麻「フェイトは彼女じゃないよ」

あつむりと綱旗最愛の言葉を否定する上条当麻。
その言葉を聞いて、この世の終わりの様な顔をするフェイトと盛大
な溜息をつくアルフ。

当麻「そもそも彼女なんて僕に出来るわけが無いし…」

フェイト「…」

アルフ「トウマ…あんたって奴は…」

当麻「とにかく、僕は料理を作つておから監督兼ビングド覽いで
てね」

最愛「了解です！」ビシッ！

アルフ「はーい…」

フェイト「当麻。私とアルフははやての所で飯をじ馳走になつた
んだけど…」

当麻「そつなの?…でも少しぐらぐらしても良いんじやない?」

アルフ「そつだよフェイト~」

アルフは正直食べ足り無くて、少年の言葉に賛同する。

フェイト「それもそつか。せっかく作ってくれたのに食べないのは悪いしね」

最愛「そりですよー皆で食べたほうが」飯は美味しいですかー。」

元氣一杯の少女の態度に微笑む三人。

少年は調理を再開して、フェイトとアルフと最愛は三人で話していた。

出合つて間もないといつのに、アルフと最愛はとても仲良くなつていった。

精神年齢が近いからなのかもしれないとフェイトは考えた。

最愛「その耳はコスプレなんですか?」

アルフ「これは「アルフ」コスプレって奴だよ…」

最愛「海鳴ではコスプレが流行つてるんですかねえ…」

絹旗最愛が毎に出会つた高町なのはの姿といい、アルフの犬耳といい事情を知らない人から見ればコスプレをしている様にしか見えないだろつ。

当麻「出来たよ~」

彼女達が話していく内に料理が完成したりじへ、お皿を並べる。

「 「 「 「 いただきまー。」 「 「 「

当麻の手料理を始めて食べた最愛は…

最愛「超美味しいですね」れー。」

当麻「ありがと」

アルフ「ハヤテの料理も美味いけビ、トウマの料理も美味いよ

フュイト「私もそう思ひよ」

彼女達に褒められて少年は、照れながら頭を搔く。

凄まじい速度でご飯を食べる最愛とアルフ。

その豪快な食べっぷりを見て、若干顔が引き攣る当麻とフュイト。

「 「 「 「 」 馳走様でしたー。」 「 「 「

夕食を食べ終わり、食器を片付ける一同。

そんな中、上条当麻は絹旗最愛が寝る場所について考えていた。

当麻「（絹旗さんはベッドでいいのかな？）」

食器の片づけを終えた上条当麻。

フュイト「ねやすみなさい当麻」

アルフ「また明日ね~」

隣の部屋に帰る「」あるフロイトとアルフ。

最愛「何処に行くんですか?」

フロイト「何処つて…部屋に帰るんだけど…」

予想外の言葉に軽く動搖しながらも答えるフロイト。

最愛「この部屋で暮らしてたんじゃないんですか?」

アルフ「違つよ。アタシとフロイトは隣の部屋」

最愛「行つちやうんですか?」ウルウル

「…」「…」「…」「…」「…」

謎の罪悪感が湧き上がる二人。

当麻「で…でも…一緒に寝るわけには…」

アルフ「やうだよ…いくらなんでも…」

フロイト「一緒に…あう…//」

最愛「どうしても駄目なんですか?」

どうしたらいいか分からずうろたえる二人だったが、アルフが溜息をついて絹旗に話す。

アルフ「いや……そもそもあのベッドじゃ四人は寝れないでしょ……」

最愛「だつたら隣の部屋から持つてくれればいいんじやないですか？」

「でもしても譲らないつもりなのかアルフの言葉を否定する最愛。
三人はお互いの顔を見て、覚悟を決めた。

アルフ「はあ……分かったよ……」

一旦隣の部屋に帰つてベッドを持つてくるアルフ。
少女が持てる重量ではなかつたのだが、アルフはベッドを簡単に運んだ。

最愛「見た目によりず超怪力なんですね！」

アルフ「『超』は余計だよ……」

少年のベッドの隣にベッドを置くアルフ。
体を洗つていなることに気付いた一同は、一寸部屋に帰つて体を洗うことにして決めた。
ちなみに、最愛はフェイトとアルフと一緒にだつた。
身体を洗い終えた少女達は、ベッドに向かう。

最愛「それじゃあ寝ますか！」

ベッドにダイブする最愛と彼女に続いてダイブするアルフ。
そんな一人の様子を見ていた上条当麻とフェイト・テスタロッサ。

当麻「ねえ……やっぱり僕は風呂場で寝てもいいかな？」

フロイト&最愛「（超）だめ（です）……」

フロイトと最愛は否定されて頃垂れる少年。
アルフはそんな少年を見て笑っていた。

アルフ「諦めなよトワク」ニヤニヤ

当麻「……はあ……」

ベッドに入る四人。

右からアルフ、フロイト、最愛、当麻となっていた。

最愛「おやすみなさいー。」

アルフ「おやすみ～」

当麻「おやすみなさい…」

フロイト「おやすみ…」

ぐつすり眠るアルフと最愛。
しかし、当麻とフロイトは…

当麻&フロイト「（眠れなー…）」

全く眠ることが出来なかった。

翌日、最愛とアルフが田を覚ます。
ベッドの上には…

アルフ「いやー良く寝たー」

最愛「すつきりです」

リフレッシュしたアルフと最愛と…

当麻＆フェイド「良かったね…」

田の下に隠の出来た当麻とフェイドが居た。

朝食を作り終えて、全員で、飯を食べる一同。

小学校に行く少年を見送る少女達。

授業を終えて、自宅に向かう途中の少年はハ神はやてに出会った。少女と話しながら移動する少年。

当麻「それでね…」

はやて「やつなんか…」

取り留めの無い会話を交わす二人だが、一人はATMの前に頭を抱える少女を見つける。

当麻「どうしたんだら…」

はやて「分からんけど…何か困つとるみたいやな…」

二人は頭を抱える少女の下へ近づいていった。

神裂「どうして…こんなことに…」

必要悪の協会に所属することになつた神裂火織。

彼女は土御門元春から、ATMでお金を引き落として来いと言われてカードを渡された。

しかし、極度の機械音痴である彼女にとっては、これは試練に等しかった。

ATMの使い方が分からず、最終手段を取るべきか考えていた彼女の下に少年と少女が声を掛けた。

当麻「あの...」

はやて「大丈夫ですか？」

神裂「え？」

動搖する彼女に、何があつたのかと尋ねる一人。

二人にATMの使い方を説明されて、何とかお金を引き出すことが出来た。

神裂「なんとお礼を言つたらいいか…」

当麻「気にしないで下せ」

はやて「困った時はお互い様や」

神裂「ありがとうございます」

二人に一礼して、その場から立ち去ろうとする少女だったが……

グハン！

当麻&はやて「あ…」

神裂「／＼／＼ カア～

少女のお腹の音が周囲に響き渡る。
顔を真っ赤にする少女。

神裂「も…申し訳ありませんが…」の近くに定食屋はありませんか
？／＼／＼

当麻「定食屋は無いですけど…」

はやて「ファミレスなら…」

ファミレスといつ言葉に聞き覚えが無い少女だつたが、二人に強引に案内される。

二人は少女をファミレスの前まで連れてきた後、その場から立ち去るうとしたが、少女に引き止められる。

何かと世話になつた一人にご飯を奢ろうとする少女の申し出を断る二人だつたが、そのまま強引にファミレスの中にまで連れて行かれた。

運ばれてきた料理を食べながら、色々なことを話す三人。
ご飯を奢ってくれた少女に、屈託の無い笑顔で感謝する一人。

神裂「私は…人に感謝される様な人間では…ありません…！」

一瞬で雰囲気の変わつた少女に動搖しながら、その理由を聞く三人。神裂火織は自身の幸運体质について語り始めた。

はやて「よく分からんけど…神裂さんがおみくじ引いたら大吉で、

周りの人があみぐじ引くと大凶が出るってことなんか?」

神裂「大体その様なものです」

当麻「そんなことって…」

神裂「私は『幸運』によつて周りの人を『不幸』にしているんですよ…」

自嘲氣味に話す少女の姿を見る上条当麻。

強すぎる『幸運』によつて『不幸』になつてしまつた少女。
生まれつきの『不幸』によつて苦しみ続けた少年。

境遇こそ違えど『不幸』に苛まれる二人。

自身が『不幸』だからこそ、他人の『不幸』を望まない少年。
そんな少年にとって、少女の苦しみは耐えがたいものだと感じた。
しかし、八神はやての反応は…

はやて「それは…間違つとるんやないか?」

当麻&神裂「間違つてる?」

はやて「それつて神裂さんが他人を不幸つて決めつけとるだけじゃないんか?」

神裂「しかし…！」

はやて「『幸運』か『不幸』かを決めるのはあくまで本人や、他人
が決める様なもんやあらへん」

当麻「…」

はやて「もし、神裂さんが周りの人を『不幸』にしつらうと考えと
んなら、それはただの『幻想』や」

神裂「幻想…ですか？」

はやて「せや。『幻想』は『現実』やあらへん」

当麻「幻想…」

はやて「せやから、神裂さんはあんま思い詰めんようにな」――

神裂「ありがと」やむこまゆ…」

食事を終えて、二人は神裂火織と分かれた。
八神はやてと別れた上条当麻は、先程の彼女の言葉を思い出していた。

当麻「（『幸運』か『不幸』かを決めていいのは自分自身…）」

例え、傍から見たら『不幸』な人間が居ても、本人は『幸運』と感じているのかも知れない。

当麻「幻想か…」

なのは「上条君？」

当麻「た…高町さん？」

なのは「そつだけど…」

ユーノ「何か言つていたみたいだけど…」

当麻「気にしないで…それより、高町さんは何をしてるの?」

帰宅途中といえどそれだけなのだが、高町なのははランドセルを背負つていなかつた。

なのは「ジュエルシードを探してるんだけど…」

当麻「僕も手伝うよ」

なのは「いいの?」

当麻「うん」

当麻の申し出を受けるなのは。

嬉しそうな表情を見せる高町なのは。

ユーノ・スクライアも嬉しそうだつた。

一人を巻き込んでしまつたことに罪悪感を感じているが、なのはの負担を和らげることが出来ることに安堵していた。

第14話 一人の魔法少女

『私立聖祥大附属小学校』

いつも通り五人で昼食を食べていた一同。
そこで月村すずかが上条当麻に声を掛ける。

すずか「あの… 上条君…」

当麻「ビーフしたの月村さん？」

すずか「明後日は空いてる?」

当麻「いめん。その日はちょっと…」

すずか「う…ううん…気にしないで」

少しばかり残念がっているすずかだったが、少年にも事情があることを察する。

その日は、月村すずかの自宅にて高町なのはとアリサ・バニーナグス、浜面仕上が集まる予定だった。

内容は月村邸で行われる定期的なお茶会といったものだった。

少年が少女に誘われた日は、フォイトのジュエルシードの搜索に付

き合つと決めてある日だった。

授業が終わつていつもの様に帰る一同。

浜面仕上は、なのは達と別れた後、自宅に向けて歩いていた。

仕上「うーん…」

「」の所惱んでばかりいる少年。

その理由は、少し前に出会った滝壺理后といつ少女。

一日遊んだだけなのに、少年は少女の「」とを一日も忘れられなかつた。

仕上「学園都市かあ……」

最愛「何をボソボソ呟いてるんですか?」

仕上「うおわあ……」

最愛「ちよ…いきなり大声出さなこで下せよ……。」

仕上「いきなり話しあれたらビックリするに決まつてんだろ!」
!

最愛「何ですかその言い草は……せつかく人が超心配してあげたのに!」

仕上「誰も心配してくれなんて言ひてねーだろ!……。」

下を向いて呟いている浜面仕上を心配した絹旗最愛が声を掛けたのだが、余計な心配だつたよ!つだ。

最愛「恩を仇で返すボサボサ頭には『』飯を奢つてもいいます!……。」

仕上「何でそつなるんだよ!……つーかボサボサ頭つて言つな!……。」

最愛「どう見てもボサボサ頭じゃないですか!……。」

仕上「この野郎…」

最愛「そんな」とは超どつでもこいですか…ひとつと行きませよ

近場のファミレスに強制的に連行される浜面仕上。

少女が年下ということもあり、ここは自分が大人になるべきだとい聞かせる少年だったが…

最愛「え～っと…」れとこれとこれ…お願いします」

仕上「ちょっと頼みすぎじゃねえか?」

最愛「そんな」とありますん」

仕上「今月の小遣いが…」

財布の中を見て頃垂れる少年。

凄まじい速度で頼んだ料理を食べる絹旗最愛。

その食べっぷりを見た少年は…

仕上「太るぞ?」

最愛「ツ…」ほ…」

少年の言葉でむせる少女。

仕上「お…おい…大丈夫か?」

最愛「乙女に向て」と言つんですけど…!」

バキ！！

仕上「へふあーーー」

少女の拳が少年の顔面に直撃する。

仕上りえて

病田になつてゐる少年と料理を食べ進める少女。

最愛——」馳走様でした！！

上巻

最愛の人にたんですか? 潜意識なんか一にして…

仕上 話のせいたど思つてんたよ

量愛 小さいことを気にしてはいにあせりよ ホサホサ頭

仕上
ながら俺はホサホサ頭しゃれをつけて湯面仕上だよ

量愛——力：和仁慈於量愛——

仕上 - そつか

最愛「そつけない反応ですね。超美少女である私の名前を知れただけでも幸せでしょう?」

仕上「自分で美少女って言うなよ…」

スマイルレスを出る一人。

最愛「『』飯を奢つてもらつてありがとうございました」

仕上「殆どカツアゲだつたじやねえか…」

最愛「さよなら～」

手を振つて仕上に挨拶する最愛。

少女の姿が見えなくなつて、財布の中を確認する少年。案の定、財布の中は空っぽになつていた。

仕上「…チクショウ…」

『月村邸』

翌日、浜面仕上と高町なのは、アリサ・バーニングスが月村邸を訪れていた。

ちなみに、なのはの兄である高町恭也も付き添いで来ていた。

仕上「相変わらずでけえな…」

なのは「そりだね…」

アリサ「そうかしら？」

浜面仕上も何回か月村邸を訪れたことがあるのだが、それでもこの大きさには慣れていなかつた。

紅茶を飲んで雑談する一同。

少女達が雑談している頃、浜面仕上とユーノ・スクライアは…

バリバリバリ…！

仕上「あやあああーー！」

ユーノ「キューーーー！」

仕上は猫に顔面を引っ搔かれていて、ユーノは猫に追い掛け回されていた。

アリサ「浜面は猫に嫌われるのかしらねえ…」

すずか「は…浜面君…大丈夫？」

仕上「これが大丈夫に見えますかあーー？」

なのは「いやはは…」

仕上「笑つてないで助けてくれえー！」

ユーノ「（…な…なのは…僕も助け…）」

なのは「（ユーノ君ーー？）」

高町なのはに念話で助けを求めるユーノ・スクライア。

すずかの飼い猫に襲われる仕上とユーノを助け出した少女達。

普段から非常に大人しく、人を襲うような事などしないはずの猫が少年を襲う理由は不明だった。

仕上「上条も来ればよかつたんだけどな……」

なのは「仕方ないよ……」

すずか「上条君は一人暮らしだし……」

アリサ「だけじゃあ……」

仕上「やつだー今度俺達で上条の家に遊びに行こうぜー。」

アリサ「上条の家に?」

すずか「で…でも…上条君に聞かなくていいのかな?」

仕上「いいんじゃねーの?あいつも色々大変そりだから、俺達で何か手伝つてやるわ!」

なのは「上条君を手伝つ?」

アリサ「いいわねそれー浜面のへせに良こ事言ひつけやない

仕上「つむぎ!…」

なのは「(上条君…喜んでくれるかな?)」

ピクッ!…

ゴーノ「(なのはーー)」

なのは「(しゃれつて……)」

ユーノ「（ジュエルシードの反応がある！それも近くに！）」

ジュエルシードの反応を察知したなのはとユーノ。
突然その場から逃げ出したユーノ。

なのは「あ、ユーノ君！」

アリサ「なのは！私達も！」

なのは「大丈夫！すぐ連れ戻して来るから！」

そんな少女を、浜面仕上とアリサ・バニングス、月村すずかは心配
そうに見守るのだった。

一方その頃、上条当麻とフェイト・テスター・ロッサとアルフはジュエ
ルシードの反応を察知して、月村邸の庭の中と思われる森に來てい
た。

この屋敷が上条当麻のクラスメートである月村すずかの自宅である
ことは、少年が知る良しもない。

当麻「広いね…」

アルフ「確かに…」

フェイト「ここにジュエルシードが…」

森の中に侵入する三人。

森の中を歩き始めて、少し経つてからフェイトは何かに気付く。

フェイト「結界が張られてる…」

当麻「結界?」

アルフ「結界っていうのは…」

結界についての簡単な説明を少年にするアルフ。

ズシン!!

当麻「な…何!?!?」

フェイト「何か来る!」

アルフ「くつ…」

すぐさま臨戦態勢を取る三人。
警戒する三人の前に現われたのは…

一やー!

「「「はあ?」」

巨大化した猫だった。

当麻「これって…」

フェイト「やつぱり…」

アルフ「猫…だよな…」

明らかに普通ではない大きさの猫。

当麻「これも……ジュエルシードの影響なの？」

フロイト「多分……」

アルフ「何か力が抜けちゃったよ……」

呆然としていた三人の下に、巨大化した猫が近づく。巨大化した事に気付いていないのか、呑気な声を上げながら少年の下に近づいて……

ベロン！

少年の顔を舐めた。巨大化している為、舌の大きさも普通の猫とは比べ物にならないのだが……

フロイト「この子……当麻に懐いてる？」

当麻「あれ？この子って……」

少年は巨大化している猫の姿を注意深く見る。

当麻「あの時の……」

アルフ「知っているのかいとつまつ？」

当麻「うん」

少年の顔を舐めた猫は以前、月村すずかが探していた猫であり、少年が海鳴市に来て初めて出会った猫だった。

当麻「僕の右手でどうにか出来ないかな?」

フェイト「それは分からぬけど……」

アルフ「やつてみる価値はあるんじゃない?」

少年は猫の身体に右手を近づけていたが、その動きは途中で中断されることになる。

フェイト「ツ……」

即座に後方に向けて『バルディッシュ』を構えるフェイト。フェイトに続き、臨戦態勢を取るアルフ。

少年も二人に続いて後ろを見る。

そこには……

なのは「……上……条君……?」

当麻「高……町……さん?」

高町なのはが居た。

予想外の人物に出会つたことに動搖する一人。

フェイト「同型の魔導師……ロストロギアの探索者……」

少女の言葉を聞いたユーノ・スクライアは……

ユーノ「（彼女は…）」

目の前の金髪の少女は自分と同じ世界からやって来た人物で、ジュエルシードの正体に気付いているところだと気がつく。

フェイト「ロストロギア…ジュエルシード」

『Scythe Form -Set up』

そう呟いたフェイトは専用のデバイスである『バルティッシュ』を戦斧から鎌の形状に変化させる。

フェイト「悪いけど…頂いていきます…」

一気に高町なのはに近づき、斬りかかるフェイト・テスタークサ。この場に上条当麻が居るという事に動搖しているのはだつたが…

『Evasion Flier Fin』

少女の足にピンク色の羽根みたいなものが生えて、フェイトに斬りつけられる前に空中へ移動した。

一人の戦いを眺める事しか出来ない上条当麻とアルフ、ユーノ・スクライアの三人。

ユーノ「どうして…？」

当麻に向かつて叫ぶユーノ。

上条当麻にはジュエルシードの危険性について全て話した。

その上で、彼は自分に協力してくれると言つた。

少年はジユエルシードの暴走によつて巻き込まれた少年と少女を助ける為に全力で戦つた。

そんな上条当麻がどうして他の魔導師と一緒に居るのかユーノにはどうしても分からなかつた。

その頃、高町なのはとフェイト・テスタロッサは未だに戦い続けていた。

徐々に追い込まれていく高町なのは。

なのは「どうして…こんな…」

フェイト「答えて多分…意味はない」

お互ひに距離を取る二人。

『Device Mode』

鎌から斧の形状に変化した『バルティッシュ』

『Shooting Mode』

射撃に特化した形に変化した『レイジングハート』

『Divine Buster Stand BY』

『Photon Lancer -Get Set』

お互ひを攻撃するための準備が終了する二人

そんな中でも、なのはの心を支配していたのは先程の出来事だった。

なのは「（ヒトヒト上条君が…それに）の子は一体…」

突然の事態に混乱する精神を無理やり落ち着かせる。
お互いの必殺の一撃が放たれよつとした瞬間…

ニヤー…

巨大化した猫の声がその場に響き渡った。

それこそが、高町なのはにとつて命取りとなつた。

フロイト「…」めんね…

『Fire』

『バルティックシユ』から放たれる金色の光線。

『Protection』

金色の光線が直撃する前に『Protection』を発動するな
のはだつたが、全てを防ぎ切れず、少女の身体は宙を舞つた。

ユーノ「な、なのは…！」

意識を失い墜落するのは。

このまま地面に激突するかと思われたが…

当麻「おおおおおおお…！」

高町なのはの落下地点まで駆け出した上条当麻。
なのはを受け止める事に成功する当麻。

所々傷を負つている少女の姿を見て、心を痛める少年。少年の下に降りてきたフュイト。

フュイト「当麻……」

当麻「ごめんフュイト……ちょっと待って……」

そう言つて少年は絆創膏を取り出し、怪我をしている箇所に貼つた。

当麻「ごめんね……」

高町なのはを木の根元まで運んだ上条当麻は、巨大化した猫の下まで近づき右手で触る。

バキン！！

猫の身体からジュエルシードが出現する。

『Captured』

ジュエルシードを封印するフュイト。

その場から立ち去る三人。

去り際にもう一度なのはとユーノの方を向いた少年は……

当麻「……ごめんなさい……」

その少年の姿を見たユーノは……

ユーノ「一体何が起きているんだ……」

ただ呆然としていた。

第15話 それぞれの戦う理由

『月村邸』

フェイド・テスター・ロッサと高町なのはの戦いから少し経つて、少女は心配して探しに来た一同に発見された。

アリサ「なのは…！」

仕上「高町…！」

すずか「大丈夫…？」

なのは「…う…」

忍「ノエル…！ フアリン…！」

「「はい…！」

月村すずかの姉である月村忍が、月村家の専属メイドであるノエルとファリンに声を掛ける。

高町なのはを月村邸に運ぶ一人。

恭也「くそ…！」

高町なのはの兄である高町恭也は、自分の妹が怪我をしていることに気付けなかつた自分を責めていた。

なのは「う…ん…」

アリサ「なのはー。」

すずか「なのはちゃんー。」

仕上「気がついたか?」

なのは「あれ…私…」

アリサ「庭の森の中で倒れていたのよ」

なのは「やつ…（やつぱり…あれは…夢じゃない…）」

自分と同じ魔法の力を使う金髪の少女とクラスメートである上条当麻と出会ったことを思い出す少女。

仕上「一体何があつたんだ?」

なのは「えへっと…」

先程の出来事を正直に話すわけにはいかない少女。

恭也「なのははまだ起きたばかりだから休ませてやつてくれ

仕上「それもそつか…」

目覚めたばかりの少女に、質問攻めにするのは良くないと判断した恭也が一同に告げる。

忍「うめんなやー。」

なのはに謝罪の言葉を述べる円村忍。

恭也「忍は悪くない」

彼の言う通り、敷地内で事件に巻き込まれるなど予想が出来る筈もない。

なのは「そうですよ。勝手に抜け出した私の責任ですから…」

申し訳なさそうな顔でなのはは、一同に勝手に抜け出したことを謝った。

仕上「とにかく大したことなさそうでよかったです…」

それから少し後、早めに帰宅した一同。

なのはは恭也におぶられて、自宅に帰った。

『高町家』

恭也から何があつたのか説明を受けた家族はなのはを心配したが、少女は心配ないと話してその場を乗り切つた。

自分の部屋に移動した高町なのはとユーノ・スクライア。

ユーノ「なのは…大丈夫かい？」

なのは「うん…思つたより怪我はしてなかつたから…」

ユーノ「良かった…」

なのは「でも…高いところから落ちたの…」

金髪の少女の一撃を受けて、気絶した少女は地面に墜落した筈だ。それなのに、それほど身体は痛くない。

ユーノ「当麻君がなのはを受け止めたから…」

なのは「上条君が?」

ユーノ「うん…なのはが怪我した頬に絆創膏を貼つていたし…」

そう言われた少女は、自分の頬を触る。

なのは「そうだったんだ…」

ユーノ「ジュエルシードを回収した後に、ごめんなさいって言つてたんだ…」

なのは「…」

上条当麻の一連の行動をユーノから聞いた少女は…

なのは「上条君…一体何が…」

ユーノ「それは分からないけど…」

少年の真意が分からぬ以上、これ以上考へても無駄であると結論を出す二人。

なのは「あの女の子は…」

ユーノ「恐らく…あの子は僕が居た世界の人間だ…」

なのは「ユーノ君と同じ世界?」

ユーノ「うん…だからジュエルシードの危険性は知っている筈なんだけど…」

金髪の少女がジュエルシードを集める目的など、全く見当の付かない一人。

なのは「（あの子…最後に…謝つていた…）」

なのはが思い起こすのは、金髪の少女が一撃を放つ前に告げた一言。あの少女が情け容赦の無い人間だったなら、高町なのははこの程度の怪我では済んでいない。

なのは「（それに…）」

上条当麻が金髪の少女と一緒に行動していた理由も分からぬ。短い間ながら、上条当麻の性質を理解していた少女。誰よりも他人の不幸を望まず、不幸に巻き込まれている人間がいるならば、全力で助けようとする少年。そんな彼が、ジュエルシードの悪用を考えている人間と一緒に行動する筈がない。

幸い明日は小学校がある為、少女の目的について少年に尋ねる事が出来る。

上条当麻が学校に来るかどうかは別として…色々な問題が起きているが、ベッドに入つて眠りにつく高町なのはだった。

『マンション』

フェイト「……そう……だったんだ……」

アルフ「トウマのクラスメート……ねえ……」

当麻「うん……」

上条当麻の部屋で今日の出来事について話していた三人。
絹旗最愛は深い眠りについていた。

今日戦った魔導師は当麻のクラスメートであることを聞いたフェイト。

そのことを聞いた少女は少しばかり動搖していたが……

フェイト「それでも……私は……ジュエルシードを集めなくちゃいけない……」

アルフ「分かつてるとフェイト」

当麻「……うん……」

フェイト・テスター・ロッサがジュエルシードを集める目的を知つている少年は、彼女の決意を否定出来なかった。

しかし、高町なのはとフェイト・テスター・ロッサが傷付け合つことを望まない少年にとって、現在の状況は非常に好ましくなかった。

部屋に戻るフェイトとアルフ。

少年も明日に向けてベッドに入る。

具体的な解決策も見つからないまま、上条当麻は眠りについた。

『？？？』

大量の死体が転がっている中央に小学校低学年位の少女が立つていた。

彼女の身体には夥しい量の血液が付着しており、彼女の周囲に転がっている死体には、鉄の棒の様な物体が突き刺さっている物や綺麗に切断された物が散乱としていた。

幼い頃から『実験』と称して、人間を殺すことを強要されてきた少女。

その少女にとって、人を殺すという行為は何も珍しいというわけではない。

ある日、少女はとある少年の『実験』を見学させられていた。

白髪の少年に向かって、容赦なく発射される銃弾。

しかし、銃弾は少年の身体ではなく、銃弾を放つた男達の身体を貫いていた。

白髪の少年と目が合った少女。

お互に興味など全く無かつたらしく直ぐに目を逸らした。

次の日、白髪の少年の『実験』が再び行われるということで見学することになった少女。

『実験』の内容は昨日のように男達が少年に向けて、銃弾を放つといふものではなく：

『実験』の会場にあつた物は、大量の戦車や戦闘機など、一人の人間に對してあまりにも過剰すぎる戦力だった。少年に向けて行われる一斉射撃。

肉片すらも残りそうに無い破壊の暴風が吹き荒れる。

しかし、攻撃が止んだ場所には無傷の少年が何事も無かつたかの様に立っていた。

圧倒的な力を奮う少年。

その姿は正しく『化け物』と呼ぶに相応しかった。

少年の『実験』が終了して数日後、少女が居る研究所に一人の少女

が入つて來た。

どうやらその少女は『置き去り』らしく、自分の様に『闇』に浸かつてゐるわけではなかつた。

積極的に話しかけてくる少女に、今まで出会つたタイプの人間ではないと実感する少女。

その少女は、命は何よりも大切だと常々少女に語つた。

あまりにも多くの生命を奪つてきた少女に、その言葉は酷く滑稽に思えた。

最初は鬱陶しいだけだと考えていた少女だが、いつの間にかその少女と一緒に居る時間に温もりを感じていた。

今まで生きてきた中で感じたことも無い様な感情。

その感情の正体が分からぬ少女だったが、その時間が何時までも続いて欲しいと思っていた。

しかし…

ある日、温もりを教えてくれた少女が『実験』に参加するといふ話を聞いた。

急いで『実験』の会場に向かう少女。

そこで彼女が見たものは…

血塗れになつて倒れている少女だつた…

⁇⁇⁇「…ちやん…私…死にたく…もつと…ちやんと…一緒…」

口から流れ続ける血で、必死に話す少女。

そして…

少女は動かなくなつた…

？？？「ツーーー」

海鳴のマンションで少女は田を覚ます。

？？？「また…あの夢…か…」

少女は自分でも氣付かない内に、目から大粒の涙を流していた。

『私立聖祥大附属小学校』

授業が終了していつも通り帰ろうとする一同。
しかし、今日はいつもと異なつている点があった。

アリサ「なのは一帰るわよーーー！」

なのは「じめんアリサちゃん。今日さちよつと…」

アリサ「分かつたわよ」

そつ言つて浜面仕上と円村すずか、アリサ・バーニングスは教室を出て行つた。

上条当麻も彼等に続くように帰ろうとしたが…

なのは「上条君…ちょっとといいかな…？」

当麻「…うん」

少年も少女が言いたい事を理解していたのかその言葉を聞いて軽く

頷く。

屋上に向かう高町なのはと上条当麻。
屋上に到着した二人。

当麻「怪我は大丈夫?」

なのは「うん…上条君が助けてくれたんだよね?」

当麻「…」

なのはの問いに当麻は答えない。

ユーノ「どうして君はあの子と一緒にいたんだい?」

当麻「それは…」

言葉に詰まる少年。

なのは「上条君はあの子がジュエルカードを集める目的を知っているの?」

当麻「…うん…」

ユーノ「それは…?」

当麻「…めん…言えない…」

なのは「…上条君…」

少年の言葉を聞いた少女はそれ以上何も言えなくなる。

上条当麻は屋上の入り口まで戻つて…

当麻「ごめん… 高町さん… ユーノ君…」

少年はそのまま一人の前から立ち去つて行つた。

第16話 海鳴温泉

『私立聖祥大附属小学校』

高町なのはとフェイド・テスター・ロッサとの出会いから数日後、昼休憩の小学校にて…

当麻「温泉?」

仕上「ああ、毎年この時期に高町の親が連れてつてくれるんだよ」

当麻「そうなの?」

アリサ「そうよ

すずか「海鳴市の名物の一つとして温泉があるから」

当麻「なるほど」

仕上「だからさ~お前も来ないか?」

当麻「ごめん。その日も用事が…」

仕上「またそれかよ~」

すずか「上条君だつて用事があるから…」

なのは「…」

上条当麻の用事とはジユホールシードの捜索なのだらつと推測する高町なのは。

当麻「本当に」「めぐね…」

アリサ「何か困ったことがあるなら相談しなさいよ。友達なんだか」「うう」

当麻「ありがと」「…」

自分の事を気に掛けてくれるメンバーに感謝すると同時に、ジユホールシードの被害から守つてみせると堅く誓つて上条当麻。

仕上「この前も用事があつたらしいけど、お前の用事つて何なんだよ?」

当麻「それはちょっと…」

すずか「言えない事もあるんじゃないかな?」

仕上「やうこいつもんか?」

アリサ「やうこいつものよ」

高町なのは達が温泉に向かうと話した日に、上条当麻も海鳴市の温泉に用事があった。

しかし、彼は温泉に行つてリフレッシュする「」ことが目的ではない。授業が終了して帰路につく一同。

本日は、高町なのはとアリサ・バーニングスと用村すずかの三人は塾があるらしく、そのまま別れた。

浜面仕上も今日は家庭の用事があるらしく、そのまま別れて上条当麻は一人マンションに向けて帰ろうとしたが…

当麻「（久しぶりに図書館にでも行いつかなか…）」

海鳴市に来てから殆ど時間の取れなかつた少年は、久々に図書館に向かつた。

ハ神はやての言葉通り、図書館には彼女が居た。

当麻に気付いたはやはては無言で手を振る。

少女が座つてゐる場所まで移動する少年。

はやはて「図書館で会つのは久しぶりやね」

当麻「いはのとひの色々忙しかつたからね」

はやはて「まあ…上条君は海鳴に来たばっかりやからな」

少年が多忙な原因は、ジュークヒルシード絡みであるのだが…少年も借りてきた本を読み進める。

そこで、ハ神はやてが…

はやはて「上条君…こきなつやナビ…明後日せよことのへ」

当麻「ビーナスの？」

はやはて「いや…その…上条君はまだうちの料理…食つてないやう…」

フロイトとアルフには手料理を「」馳走したはやはてだが、少年は少女の料理を食べたことが無い。

当麻「その日は…」めん…用事があるんだ…」

はやて「やつか…なら仕方ないね…」

少しばかり寂しそうな表情を見せるハ神はやて。

そんな彼女の表情を見逃さなかつた上条当麻は…

当麻「ハ神さんは…明後日は空いてる?」

はやて「え…?」

当麻「明後日は用事があるって言つてたけど、友達と温泉に行くんだ。その…ハ神さんも来ない?」

はやて「…温泉?」

突然の申し出に動搖する少女。

はやて「で…でも…」

当麻「大丈夫だよ。一緒に行くのはフュイイトとアルフと…一緒に暮らしている友達が一人だから…」

ピクー!

一緒に暮らしてこる友達といつも葉に反応するハ神はやて。

はやて「一緒に暮らしてゐる友達つて…女の子か?」

少しばかり黒いオーラを放つ少女。

当麻「そつだけど…優しい子だから直ぐに仲良くなれるよ」

はやて「…全く…」

当麻「どうしたの?」

はやて「何でもないで…」

当麻「八神さんも一緒に来ない?」

はやて「…うん」

少女の了承を得た少年は一旦図書館から出て携帯電話を使い、フュード・テスター・ロッサに連絡を取る。

通話を終えて、再び八神はやてが居る場所に戻る上条当麻。

当麻「それじゃあ明後日に迎えに行くから」

はやて「うん」

八神はやてと別れた上条当麻はマンションに帰つて行つた。

翌日、海鳴市の温泉に向かうメンバーは、高町家一同と月村家+メイド一同、浜面仕上、アリサ・バニングスとなつていた。
テンションの上がつている仕上と彼を落ち着かせるアリサとすずか。高町なのははユーノ・スクライアと念話をしていた。

なのは「(あの子は何でジュエルシードを集めているんだろ?)」

コーノ「（それは分からぬけど…当麻君の態度を見る限り…僕達の目的とは確実に違うだろ？）」

なのは「（…うん…）」

もし、あの金髪の女の子がコーノと同じ目的を持つて行動しているのならば、敵対する理由がない。相手がこちらがジュークエルシーーを悪用すると考へても、上条当麻が誤解を解く筈だからだ。

なのは「（上条君があの子のジュークエルシーーの搜索に協力する理由…）」

コーノ「（）ればかりは本人が話してくれるのを待つしかないだろ？（…）」

高町なのはとコーノ・スクライアがそのことについて深く考え込んでいる内に、温泉に到着した面々。

早速、温泉を堪能するために行動する一同。

大浴場に向かつた浜面仕上と高町士郎と高町恭也。

温泉を堪能する男性陣。

仕上は高町士郎の身体を見て…

仕上「相変わらずおっちゃんの身体はすごいな～」

士郎「…おっちゃんって…」

軽くショックを受ける高町士郎。

浜面仕上が声を上げたのは、筋肉隆々とした肉体ではなく、その身

体に刻まれた多くの傷を見たからだつた。

翠屋のマスターをする以前の高町四郎は、ボディガードとして世界中を飛び回つており、多くの傷を負つていたからだ。大浴場で動き回る少年を見て呆れた高町恭也。

恭也「そんなに動き回るといふんだ」

警告する恭也の言葉を聞いた仕上は、彼の方を向いて……

仕上。そ、い、せ戸、村のね、りせ、やんとほど、な、たんだ?」

恭也。」

予想外の質問にむせる高町恭也。

恭也「何をいきなり…」

二二二

突如、大浴場に響き渡つた大声に呆然とする男性陣だつた。男性陣が温泉を出てから、女性陣が後に続いた。

アリサ「ヨーノも一緒に入るうね」

クーノ「キクーーー！」

全力でその場から逃げ出そうとするユーノだったが、この場に居る全員から逃げ切ることなど不可能。

ユーノ「（助けてなのは〜）」

なのは「（大丈夫だよユーノ君）」

ユーノ「（大丈夫じゃないよ〜！）」

そのまま女性陣に連れられて行かれそうになっていたユーノ・スクライアだつたが…

『根性だあああ〜！』

突如聞こえてきた絶叫に気を取られた女性陣の隙をついてその場から逃げ出すユーノ。

すずか「あ！ユーノ君が！」

なのは「ユーノ君！」

アリサ「何なのよ一体…」

突然の出来事に呆然としていた女性陣だった。

それから一時間が経ち、フェイト・テスター・ロッサ御一行も温泉に到着した。

高町なのは達がリラックスで訪れた温泉と、ジュエルシードを封印するために訪れた温泉が同じ場所であるなど少年が気付く筈もなかった。

初めての温泉に胸を躍らせる一同。

参加メンバーは、上条当麻にフェイト・テスター・ハ神はやてと絹旗最愛、アルフとなっていた。

この中で温泉に入ったことがあるのは、ハ神はやてだけだった。温泉に到着した一同は、まず割り当てられている部屋に向かつた。彼女達が泊まる部屋は一室だけで、四人の女の子に囲まれて寝ることが決定している上条当麻だった。

部屋に到着した一同。

先に風呂に入つてくれればいいとフェイト達に促される上条当麻。その言葉に甘えて温泉に入る少年。

当麻「…ふう…」

生まれて初めての温泉を堪能する少年。

ボコボコ！

当麻「ん？」

少し離れた場所で、泡が発生している場所を見つける少年。その正体が気になつた当麻は徐々に近付いていく。

ドパアーン！！

当麻「うわあああー！」

泡があつた場所から黒髪の少年が勢い良く出でてくる。

? ? ? 「よし…これで三十分だ…」

当麻「あ…あ…」

腰の抜けた上条当麻を見た少年は…

？？？「何だお前？立てないのか？根性の無い奴だな…」

と呟いていた。

少し時間が経つて落ち着きを取り戻した上条当麻。

当麻「君は？」

軍霸「俺の名前は削板軍霸だ！」

力強く名乗る少年。

当麻「僕は上条当麻」

軍霸「上条か…中々根性ある髪型してるじゃねえか！」

シンシン頭を褒められてどう対応すればいいのか全く分からぬ少年。

軍霸「それじゃあな…」

凄まじい速度でその場から去つて行った削板軍霸。残された上条当麻は空いた口が塞がらなかつた。

上条当麻が部屋に戻り、温泉に向かうフェイト達。

部屋に戻った時の少年の様子が少しばかりおかしかつたが、特に気になることにした。

早速、温泉に入るフェイト達。

ハ神はやは足が不自由というハンデがあるのだが、その問題は二
人がカバーすることによりクリアすることが出来た。
初めての温泉を堪能する少女達。

最愛「超極楽です…」

アルフ「サイコーだね～…」

フェイト「気持ちいい…」

はやて「懐かしいな…」

何かと忙しいフェイトもアルフにとつて、この時間は至福の時とな
っていた。

第17話 セカンド・ハングアウト

浴衣に着替えて旅館内を歩き回っていた高町なのはとアリサ・バングス、丹村すずかと浜面仕上。

旅館の中を見回っていた途中で、すずかがなのはに声を掛ける。

すずか「なのはちゃん。大丈夫?」

なのは「え?」

すずか「(ニ)最近、何だか疲れてるよ(う)だつたから…」

なのは「大丈夫だよ」

アリサ「上条にも言つたけど、何か困ったことがあるなら相談しなさいよ。友達なんだから…」

仕上「あんまり無理すんなよ?」

なのは「(嘘)…ありがと(う)…」

少女の悩みの原因を話すわけにはいかないが、自分を心配してくれる人々の言葉を聞いて、少しばかり気が楽になる高町なのはだった。

ユーノ「(なのは…せつかくの休みなんだから…ちゃんと休みなよ)

」

なのは「(ありがとうございますユーノ君)」

なのはの肩に乗っているゴーノが、念話でなのはに話しかける。

今回は、ジュエルシードの搜索を忘れてリフレッシュすることを促すゴーノに感謝するなのは。

再び、旅館内の探索をする一同。

そこで彼女達は、額に赤い宝石の様な物を付けた女性に出会う。

アルフ「はあーい おちびちゃん達」

「 「 「 「 …? 」 」 」

突然話しかけられて動搖する一同。

高町なのはとゴーノ・スクライアは田の前の女性に見覚えがあった。

なのは「（ゴーノ君…あの人…）」

ゴーノ「（金髪の女の子や当麻君と一緒にいた人だ…）」

月村邸でフェイト・テスター・サと対峙した際に、上条当麻と一緒にいた女性。

やたらとテンションの高い女性を見た少女達は、酔っ払いなのではないかと判断した。

浴衣姿の女性は、そのまま高町なのはに近付いて…

アルフ「君かね？ うちの子達をアレしてくれちゃつてるのは？」

うちの子達とは、金髪の少女と上条当麻であると推測する一人。

高町なのはの姿をジロジロ見た女性は…

アルフ「あんま賢そうでも強そうでもないし…ただのガキンチョに

見えるんだけどなあ……

なのは「あ…あの…」

うろたえるなのはの前にアリサが立ち塞がる。

アリサ「…なのは、お知り合い?」

なのは「え…ええつと…」

厳密に言えば、初対面ではないのだが、いつもして面と向かって話すのは初めてな少女。

口籠る高町なのはの様子を見たアリサ・バーニングスは…

アリサ「この子、貴女を知らないそうですが? どちらさまですか?」

毅然とした態度でアルフに話しかけるアリサ。

友達想いの少女だからこそ、ここまで初対面の人間に對して言つ事が出来たのだろう。

静まり返る廊下。

高町なのはの顔を見つめるアルフ。

アルフ「あははは! -! -!

突然笑い始めた女性にどう反応すればいいのか分からず呆然とする一同。

アルフ「いや~ごめんごめん。人違いだつたかな」

アリサ「人違い?」

アルフ「あたしが知つてゐる子に凄く似てたもんだからさー」
なのは「なんだ… そだつたんですか…」

アリサ「む~」

アルフ「可愛いくホレットだね~」

高町なのはに近付いてユーノの頭を撫でるアルフ。
相変わらずアルフを警戒するアリサと安堵する高町なのは。

アルフ「(……今のところは、挨拶だけだね…)」

「「…?」」

突如、頭の中に響いてきた声に動搖するのはユーノ。

なのは「(うれって…)」

アルフ「(忠告しておぐよ。子供はいに子にして、おうちで遊んで
いなさいよね…)」

ユーノ「(想は…)」

アルフ「(おいたが過ぎるとガブッとこくわよ?)」

なのは「(貴女は…)」

アルフ「(トウマのクラスメートだからって手加減しないからね)」

ピク！！

トウマとこの言葉に反応する高町なのはヒーロー・スクライア。

なのは「ああ～て、もうひとつ風呂行ってこよ～と」

意気揚々とその場から立ち去るアルフ。

すすか——な……なのはちやん……」

なのは あ...い...ん...

アリサ・なみにあれ！（？）

たのは、かく変れて大人たるたれ

眞脣局から酉 手で手に手に

二三九

アリサーだからって節度ってモンがあるでしょ！？」

なのは「まあまあ……」には寛ぎ空間だし色んな人が居るよ」

先程から怒りを露にしているアリサ・バーニングスを落ち着かせていく話「どうせ二階一、二」。

一人がアリサを落ち着かせている頃、浜面仕上は…

仕上「：胸でけえ」

アルフの胸の大きさを思い出していた。

それから少し時間が経つて、上条当麻とフェイト・テスタークサと

アルフは旅館から少し離れた森の中に居た。

結界を張るフェイト。

彼等が何故この様な場所に居るのかといつと、上条当麻の特訓を行う為である。

フェイト「始めるよーー！」

当麻「うんーー！」

『バルディッシュ』を構えるフェイト・テスタークサ。

彼女はバリアジャケットに着替えており、戦闘準備は万端だった。

『Device Form』

フェイト「バルディッシュ…フォトンランサー…連撃」

『Photon Lancer Full Auto Fire』

『ddd!!』

大量の魔力弾が少年に襲い掛かる。

当麻「くっ…!!」

バキン!!

少年はそれを右手で殴り打ち消していく。
消し切れない攻撃は、ギリギリで避ける。

『Scythe Form』

戦斧から鎌の形状に変化する『バルディッシュ』

フェイト「ハアツ！－！」

当麻「ここか！？」

ビュン！－！

近接戦闘を仕掛けるフェイト。

上条当麻はフェイトの攻撃をギリギリで避ける。

特訓を始めた当初は、フェイトの攻撃に全く対応することが出来なかつたが、非常に厳しい特訓を何度も繰り返したことにより、少年はフェイトの攻撃にある程度対応することが出来るようになっていた。

アルフ「頑張れ！」

そんな二人の戦いを眺めるアルフ。

アルフは上条当麻の近接戦闘の特訓を受け持っている。

フェイトのデバイスとは異なり、拳で戦うのが主な彼女は当麻にとって師匠と呼べる存在だった。

防戦一方だった上条当麻もフェイトに向かって攻撃する。

上条当麻は空を飛ぶことが出来ないこともあり、ハンデとして地上で戦っているフェイト・テスターをサ。

上条当麻の右拳による攻撃を避けるフェイト。

少年の右手には魔法を打ち消す力が宿つてあり、魔導師によつて天敵とも言える能力と言える。

それ故に、フェイトも訓練だから言つて油断は出来ないので。一旦上条当麻から距離を取るフェイト・テスタロッサ。

『Device Form』

戦斧形態に戻る『バルディッシュ』

フェイト「行くよーー当麻ーーー！」

『Thunder Smasher』

バルディッシュから放たれる金色の雷。

その雷は上条当麻に向かつて真っ直ぐ伸びて…

当麻「おおおおおおおおーーー！」

右手で真正面から受け止める上条当麻。

莫大なエネルギーの為、直ぐに消えない攻撃だつたが…

バキンーーー！

何とか打ち消すことに成功する。

当麻「はあ…はあ…」

フェイト「…ふう…お疲れ様…当麻…」

当麻「ありがとう…フェイト…」

アルフ「そんじゃあ、旅館に戻ろうか！」

特訓が終了して旅館に戻る三人。

上条当麻の特訓から数時間が過ぎた。

アリサ・バニングスと月村すずかが寝静まつた一室で、高町なのはとユーノ・スクライアは念話を用いて、会話をしていた。

なのは「（ユーノ君…昼間の人はやっぱり…上条君とあの子の関係者なのかな？）」

ユーノ「（多分ね…）」

なのは「（このままジュエルシードを集めていたら…また…あの子と戦う）」とになるのかな？」

ユーノ「（多分…）」

なのは「（…）」

ユーノ「（なのは。僕はあれから色々考えたんだけど…やっぱり僕が一人『ストップ』…）」

なのは「（そこから先言つたら怒るよ～）」

ユーノ「（…）」

なのは「（ジュエルシード集め。最初はユーノ君の手伝いだつたけど…今はもう違う）」

ユーノ「（…）」

なのは「（私が…自分でやりたいと想つてやつてることだから）」

ユーノ「（…）」

なのは「（一人で無茶したり怒るよ?）」

ユーノ「（…うん）」

それから更に時間が経過した夜中…

なのは「（ユーノ君…）」

ユーノ「（近くにジュエルシードがある…）」

ジュエルシードの反応を察知した一人が、反応を察知した場所まで急ぐ。

その頃、上条当麻とフェイト・テスター・ロッサとアルフが、橋の上から湖の様子を覗いていた。

ジュエルシードを封印する為の準備が完了してくる二人。

アルフ「凄いねこつや。これがロストロギアのパワーって奴?」

アルフが楽しそうに語る。

フェイト「随分と不完全で不安定な状態だけね」

当麻「暴走はしないみたいだね……」

今までジユノルシードの暴走によりて、発生した怪物と戦っていた少年が初めて見る光景だった。

アルフ「フュイトの母親は、どうしてあんなものを欲しがつてんだるうね……？」

それはアルフだけではなく、上条当麻も疑問に感じていた。

フュイト「分からないけど……理由は関係ないよ。母さんが欲しがつてるんだから、手に入れない」と……！」

当麻「……」

フュイト「バルディッシュ、起きて!..」

『Yes , si !』

『Sealing Form . Set up』

フュイト「封印するよ。一人ともサポートお願い!..」

アルフ「ああ!..」

当麻「うん!..」

ジユノルシードを封印することに成功するフュイト。

ジユノルシードを封印し終えた彼女達が出合ったのは……

なのは「上条君…」

当麻「高町さん…」

アルフ「……あ～り、あらあらあら……」

高町なのはとユーノ・スクライアだった。

月村邸の時と同じく、予想外の場面で出来事に軽く動搖する上条当麻。高町なのはは昼間にアルフに出来事のことから、少年に出来事の可能性を考慮していた。

アルフ「子供はいい子でつて言わなかつたつけ？」

ユーノ「それを…ジュエルシードをひとつもりだ！？ それは危険な物なんだ！」

アルフ「あ～ね…答える理由が見当たらぬよ？それにさあ…アタシ親切に言つてあげたよね？いい子でなきゃガブッと行くよつて…」

狼を連想させる姿に変身するアルフ。

その姿を始めてみた少年は…

当麻「…犬？」

アルフ「アタシは狼だ…！」

当麻「…」

ユーノ「やつぱつ… アイツ、あの子の使い魔だ！」

アルフの姿を見て何かを確信したユーノが話す。

なのは「使い魔……？」

アルフ「そうよ。アタシはこの子に作られた魔法生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力のすべてを賭けて護つてあげるんだ」

当麻「……」

アルフはフェイトの方を向いて…

アルフ「先に帰つて。すぐに追いつくから…」

フェイト「…………うん…」

高町なのはに襲い掛かるアルフ。

しかし、彼女の攻撃が少女に届くことは無かった。

ガギイー！

ギギギー！

アルフ「ちつ…」

ユーノ「なのはー、あの子をお願いー！」

アルフ「わかるでも……思つてんのー？」

「……」「やせてみせるやーー！」

アルフとゴーノが戦っている場所に魔法陣が出現する。
そして……

アルフ「これは……！」

一瞬でその場から、アルフとゴーノが消える。

当麻「一体何が……？」

何が起きているのか把握出来ていない少年が、無意識に呟く。
その場に残っているのは、高町なのはとフェイト・テスター・ロッサと
上条当麻だけだった。

フェイト「結界に、強制転移魔法……いい使い魔を持つている」

なのは「ゴーノ君は『使い魔』ってやつじゃないよ。私の大切な友
達！」

フェイト「どうぞお入りの？」

なのは「話しえて、何とか出来るってこと……ないかな？」

当麻「話しえて……」

フェイト「私は……ロストロギアの欠片を……ジュエルシードを集め
ないといけない。そして、貴女も同じ目的なら、私達はジュエルシ
ードを賭けて戦う敵同士っこになる」

なのは「だから、やつこつ」と簡単に決めつけない為に、話しあいについて必要なんだと思つー。」

高町なのはの言葉に聞き入る上条当麻。

フェイト・テスター・サガジュエルシードを集める目的は母親の為だが、もし、フェイトの母親がコーノと同じ目的でジュエルシードの搜索を命じてくるのならば、協力できるのかも知れない。

フェイト「話しあいだけじゃ……言葉だけじゃ、やつと何も変わらない」

高町なのはの言葉を切り捨てたフェイト・テスター・サガは田を開じて…

フェイト「……伝わらない…」

再び田を開き、なのはに襲い掛かるフェイト。

『Flier Fion』

高町なのはの足よりピンク色の羽根が生えて、空中に移動する。彼女に続き、フェイト・テスター・サガも空へ移動する。

『バルディッシュ』を構えたフェイトは…

「フェイト、嘘けて。それぞれのジュエルシードを一つずつー。」

『Photon Lancer -geet set』

高町なのはの遙か頭上に飛んでいたフェイト・テスター・サガ。

『Thunder Smasher』

『バルディッシュ』から発せられる声。

そして『バルディッシュ』の先端部分から、金色の光が放たれた。

『Divine Buster』

高町なのはも『レイジングハート』を構える。

『レイジングハート』から発せられる声と共に、先端から桃色の光線が発射される。

ドゴオオ！！

一つの光線が激突する。

なのは『レイジングハート、お願い！』

『All right!』

高町なのはの呼び声に応えた『レイジングハート』
ディバインバスターの威力が増大して、サンダースマッシャーを打ち破る。

当麻「フ…フェイト！？」

しかし…

『Scythe Slash』

ディバインバスターを避けたフェイトは、デバイスを変形させて、

高町なのはの懐まで飛び込み…

少女の首筋に魔力刃を突きつけた。

なのは「くつ…」

『P u l l o u t』

レイジングハートが突然、封印していた筈のジュエルシードを一つ出した。

なのは「レイジングハート……何を！？」

予想外の行動に動搖するなのは。

フェイト「きっと主人想いのいい子なんだね」

ジュエルソードを手に入れるフェイト・テスター口ッサ。地上に降りた彼女は、上条当麻とアルフに声を掛ける。

フェイト「帰ろう…アルフ…当麻」

アルフだけではなく、コーノもこの場に戻っていた。
その場から立ち去ろうとするフェイト。

しかし…

アルフ「悪いけど…」ヒヒ倒せてもううつよー…』

高町なのはに襲い掛かるアルフ。

突然の行動に、なのはもコーノも動きが取れなかつた。

フェイト「アルフ！…やめて…！」

フェイトの制止も振り切つて、アルフは少女をその爪で引き裂こうとした。

大切な主人の『敵』を排除する為に：

なのは「ツー！」

目を瞑つてしまふ高町なのは。

しかし、いつまで経つても衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けてみると、彼女の目の前には上条当麻が立っていた。

当麻「駄目だよ…アルフ…」

高町なのはとアルフの間に割り込んだ少年は、両手を広げて少女をアルフの攻撃から守つていた。

そんな上条当麻の姿を見たアルフは…

アルフ「…分かつたよ」

狼の姿から人間の姿に変化する。

当麻がアルフを止めてくれたことに安堵するフェイト。

フェイト「帰るわ…」

当麻「うん…」

アルフ「ああ……」

その場から立ち去るうとする三人。

なのは「待つて！」

なのはの一言で、三人の足が止まる。

フェイト・テスタークサは振り返つて…

フェイト「出来れば……私達の前にもう現れないで。もし次会つたら、
今度は止められないかもしれない……」

なのは「名前……貴女の名前は？」

フェイト「フェイト……フェイト・テスタークサ」

なのは「わ、私は……！」

高町なのはの言葉を聞かずに、その場から立ち去る二人だった。

第1-8話 すれ違つ気持ち

海鳴温泉での戦いから1日が経過した。
それぞの朝を迎える一回。

『高町家』

先日の温泉でのフロイト・テスター・サとの戦いを思ひ出す高町な
のは。

なのは「（あいつと…私と同じ年くらいで…深くて綺麗な瞳をした…
あの子…）」

自分と同じ年くらこの少女。

なのは「（また…会えば…戦うことになるのかな…？）」

フロイト・テスター・サから投げ掛けられた明確な拒絶の言葉。
恐らく、再び会えば戦いは免れないだろう。

なのは「（それに…）」

フロイト・テスター・サと同じく高町なのはの悩みの原因になつて
いる少年。

なのは「（上条君…一体…何を考えてるの？）」「

ジユノルシードの捜索に協力してくれると書ってくれた少年が、フ
ロイト・テスター・サと行動を共にしてこるという事実。

しかし、上条当麻はフェイトやアルフとは異なり、敵対の意思を見せていない。

温泉の一件でも、アルフから高町なのはを身を挺して守った。

なのは「（上条君はあの子がジュエルシードを集める目的を知っている…）」

以前、小学校の屋上で少年に少女がジュエルシードを集める目的を聞いた時に、少年は話せないと言つた。

なのは「（どうしたらいいんだろ…）」

『マンション』

先日のアルフの行動を思い出す上条当麻。
身勝手な行動をしたアルフをフェイトは叱っていた。
しかし、フェイトの為に行動したアルフを責める事など少年には出来なかつた。

温泉での高町なのはとの戦いの後、少しばかり険悪な雰囲気を感じ取っていた八神はやてと絹旗最愛だつたが、その事について言及するような真似はしなかつた。

当麻「（高町さん…大丈夫かな…？）」

高町なのはのジュエルシード搜索に協力すると言つておきながら、フェイト・テスター・ロッサのジュエルシード搜索を手伝つているという現状。

自分が場を混乱させている事を自覚していた少年。
それ故に、彼は強い罪悪感を抱いていた。

フェイト「当麻…大丈夫?」

先程から色々考え込んでいる上条当麻を心配したフェイトが声を掛ける。

当麻「大丈夫だよ。心配掛けでごめんね」

フェイト「ううん。そんなことないよ」

フェイトは少年が悩んでいる理由の原因は自分であると感じていた。少年と先日戦った少女が親しいかどうかは不明だが、クラスメートを傷付けられて心中穏やかではないだろう。

これ以上自分の前に現われないでと警告したが、彼女がもう自分の前に再び現われないという保障は無い。

少年のクラスメートを傷付けるのは忍びないが、例え少年とは無関係であっても、心優しい少女にとつて人を傷付けるのは望まない行為だった。

しかし、母親の為にもジュエルシードを集めている少女は、止まるわけにはいかなかつた。

暗い雰囲気で迎えた朝食。

明らかに普段とは異なる雰囲気を感じ取った絹旗最愛は、何が起きているのか理解出来ていなかつたが、その事について口を出す様なことはしなかつた。

バン!!

『私立聖祥大附属小学校』

アリサ&仕上「いい加減にしなさこよ(しきよ)…」

机を叩きつけて怒りを露にする浜面仕上とアリサ・バーニングス。

仕上「らむかんじやねえよー。」

アリサ「こないだから何話しても上の姫で……！」

仕上「そんなに俺達と一緒にいるのは嫌なのかよ！？」

少年と少女の怒りの矛先は、上条当麻と高町なのはに向けられていた。

当麻「そんなわけじゃ……」

「……」なんね…アリサちゃん…」

仕上がりで何でそんな顔してんだよ！」「

アリサ「ごめんじゃない！！私達と話すのが退屈なら一人です」と
居ればいいじゃーない！！」

ダッ!!

教室を出て行つたアリサ・バニングスと浜面仕上。

すずか「...アリサちゃん...浜面君...」

なのには「…」

すずか「なのはちゃん…上条君…」

なのは「いいよ…すずかちゃん…今のは私が悪いから…」

当麻「『めんなさ』…」

すずか「そんなことないよ…一人とも言って過ぎだよ…少し話していくね…」

なのは「『めんな…』」

一人を追いかけてそのまま教室から出て行く月村すずか。
教室に残された上条当麻と高町なのは。

アリサ・バニングスと浜面仕上を追いかけていた月村すずか。
アリサと仕上を発見したすずか。

すずか「アリサちゃん…浜面君…！」

仕上「何だよ…」

アリサ「何よ…」

すずか「何で怒ってるのかなんとなく分かるけど…駄目だよ…」

アリサ「悩んでるのも困ってるのも丸分かりじゃない…！大丈夫って言つてるけど嘘じやない…！」

仕上「友達じやねえのかよ…！」

すずか「どんなに仲良しの友達でも言えない事もあるよ…」

アリサ「だからそれがむかつくのよ…！」

仕上「辛い時があるなら支え合つのが友達だろうが……」

すずか「一人とも…上条君やなのはちゃんが好きなんだね…」

仕上「当たり前だろ！」

アリサ「そうよ！」

大切な友達だからこそ、抱え込んでいる悩みを打ち明けてくれない上条当麻と高町なのはに對して、怒っていた浜面仕上とアリサ・バニングス。

アリサ「なのはが居たから私は一人ぼっちじゃなくなつたのに…」

すずか「私もだよ…」

仕上「一人で全部抱えてんじゃねえよ…馬鹿野郎…」

放課後を迎えてバラバラに帰る一同。

なのは「一人で帰るのって…久しぶりかな…」

気が沈んでいる高町なのはは寄り道して帰ることに決めた。

車に乗つて稽古に向かつていたアリサ・バニングスと月村すずか。

すずか「初めて会つた時は…私…今よりずっと気が弱くて…誰に何を言われても反論出来なくて…」

アリサ「私は我ながら最低な人間だったつけね…自信家で強がりで

我僕で…心が弱かつたからね…」

すずか「私も…弱かつたから…何も言えなかつた…」

アリサ「やめなよつて言われても聞かなかつた。他人の言つ事を聞いていたら何かに負けちゃうつて思つてたから…」

昔を思い出す少女達。

我僕放題だつたアリサの頬を引っ叩いたのは、

すずか「あの時、なのはちゃん…何て言つてたつけ?」

アリサ「『痛い?でも、大事な物を取られちゃつた人の心はもつともつと痛いんだよ?』…つて」

すずか「アリサちゃんとなのはちゃんがあの後、大喧嘩しちやつたつけ?」

アリサ「それを止めてくれたのがあんただつたなんてね…」

すずか「あ…あの時は…だつて…必死だつたんだよ…」

アリサ「それから少しづつ話をするようになつたんだつけ…」

高町なのはと親しくなつた切つ掛けを思い出すアリサ・バーニングス。

アリサ「浜面には二ヶ月後に出会つたんだつけ?」

すずか「うん…」

アリサ「意地の悪い男子がよくからかってきた時に『やめやめ…』って言つてたわよね」

すずか「やつだつたね」

アリサ「男子の中にも良くて奴がいるんだって思つてさ…」

すずか「うん」

アリサ「それで今年は上条に会つた」

すずか「転校したばかりなのに一緒に猫を探してくれて…」

アリサ「上条となのはが私達を心配させたくないのは分かってる。それに…私達じゃ上条となのはの助けにはならない…待つてあげることしか出来ないなら…」

すずか「…」

アリサ「じゃあー私はずっと怒つてるー気持ちを分け合えない寂しさとー親友の力になれない自分にー」

すずか「意地つ張り…」

アリサ「フンだー」

少し前、高町なのはは公園のベンチに座つていた。

なのは「(アリサちやんと喧嘩しちゃつた…)」

彼女達をジユエルシードの問題に巻き込みたくない故の行動が、逆に彼女達を心配させてしまっていたことに心を痛める少女。

なのは「（怒り狂つたな…）めんね…アリサちゃん…浜面君…」

「

ベンチに座り込んでいた高町なのはだったが、そこで…

当麻「…僕のせいだ…」

なのは「…？」

上条当麻の声が聞こえて動搖する高町なのは。
急いで周囲を見る少女。

どうやら、ある程度離れたベンチに少年が座っていた。
どうやら、少年は少女に気付いていないようだった。

当麻「やつぱり僕は…疫病神なのかな…」

なのは「（疫病神？）」

疫病神という言葉に違和感を覚える高町なのは。

そのまま少年はベンチから立ち上がりその場から立ち去る。

上条当麻も高町なのはと同じ様に、自分一人で全てを抱え込む性質だからこそ、少年も同じ様に浜面仕上と喧嘩してしまったのだろう。
似た様な状況に置かれた高町なのはと上条当麻。

なのは「…上条君…」

『マンション』

アルフ「ん~ トウマの料理も美味しいナビ」れもやつぱり美味しいね~」「

ドッグフードを笑顔で食べるアルフ。

基本的な食事は上条当麻が作るのだが、おやつとしてドッグフードを食べるアルフだった。

アルフ「さて… うひのお姫様はつと…」

フェイトが居る場所まで移動するアルフ。
少女はベッドにうつ伏せになっていた。
フェイトの背中には傷が刻まれていた。
その姿を見て表情が暗くなるアルフ。

アルフ「フェイト…」

フェイト「そろそろ行こつか。当麻はまだ帰ってきてないけど… 次のジュエルシードの大まかな位置特定は出来ているし… あまりお母さんを待たせたくないし…」

アルフ「そりゃあまあ… フェイトはあたしの『主人様』で、あたしはフェイトの使い魔だから、行こつって言われりや行くけどさ…」

ジュエルシードの捜索にあまり乗り気でないアルフ。

フェイト「それ… 食べ終わってからでもいいから

ドッグフード片手にフェイトに話しかけていたアルフは、慌ててドッグフードを手放す。

アルフ「そうじゃないよーあたしはフュイトが心配なのー広域探索の魔法はかなりの体力を使うのに…フュイトって休まないし…その傷だつて軽くは無いんだよー?トウマだつて心配するよー?」

フュイト「平氣だよ…私は強いから…」

アルフ「…」

フュイト「やあ行ー?お母さんが待ってる」

ジユノルシードの捜索に向かおつとじているフュイト。

当麻「遅くなつた」めん!」

そこでフュイトの部屋に上条当麻が入つてくる。

フュイト「ヒ…当麻!…?」

アルフ「トウマーー?」

先程帰宅したばかりの少年に驚きを隠せない一人。

当麻「こめん!すぐ準備…を…」

少年の動きが止まる。

当麻の言葉が詰まつた事に疑問を感じるフュイトとアルフ。

当麻「フュイト…その傷…」

「フュイト&アルフ」「…？」

背中に刻まれた傷を少年に見られた事に気付く一人。

「フュイト」「…」「これは…」

当麻「ちよつと待つてて…」

急いで部屋から出て行く上条当麻。

恐らく薬を買つ為に出て行ったのだろう。

「フュイト」「当麻には悪いけど…」「そのまま行こう…」

アルフ「うん…」

少年を待たずにジューエルシードの搜索に繰り出すフュイト・テスター
ロッサとアルフだった。

『高町家』

ユーノ「やうか…喧嘩しちゃつたんだ…」「

なのは「違うよ。私がぼーっとしてたからアリサちゃんに怒られた
だけ」

ユーノ「親友…なんだよね?」

なのは「うん。入学してからずっとね」

ユーノにたい焼きを渡すなのは。

なのは「今日は塾もないし、晩御飯の時までゆっくりジユーハルシー
ド探し出来るよ。頑張ろ!」。

ゴーノ「うそ…頑張る!」

ジユーハルシーを探す為に行動を開始する高町なのはとゴーノ・ス
クライアだった。

第19話 少女の想い

アリサ「…はあ」

稽古の休憩時間にコンビニを訪れていたアリサ・バーニングス。

アリサ「すずかにはああ言つたけど…どうしたらいいんだろ…」

月村すずかの前では強がっていたが、アリサ自身はなのはと仲直りしたいという気持ちが強かつた。

しかし、人前で素直になれない少女にとってこの問題は簡単に解決できるようなものではない。

アリサ「う~ん…」

深く考え込んでいる少女だつたが…

ウイーン!!

コンビニに入ってきた人物により思考が中断される。

当麻「バ…バニングスさん?」

アリサ「上条?」

アリサも当麻も予想外の出会いに動搖していた。

アリサは休憩も兼ねてコンビニに買い物に来ており、当麻は傷薬を買つ為にコンビニに訪れていた。

アリサ「何やつてんのよアンタ…」

当麻「ちよつと友達が怪我しちゃつてね…バーニングスさんは？」

アリサ「何だつていいでしょ…」

当麻「『』めんね…」

アリサ「何で謝るのよ?」

当麻「皆に迷惑掛けたから…」

上条当麻は親友の月村すずかより気が弱いのではないかと思つアリサ。

アリサ「はあ…」

当麻「バーニングスさん?」

アリサ「別に謝らなくともいいわよ。こっちも大人げなかつたし」

当麻「で…でも…」

アリサ「本当に悪いつて思うなら、悩み事はちゃんと相談しなさい」

当麻「え?」

アリサ「私達じゃ手助け出来ないかも知れないけど…」

当麻「そんなことないよ」

アリサ「え？」

アリサの言葉を否定する当麻。

当麻「僕はバニングスさん達に十分助けてもらつたんだ」

今まで同年代の人間から陰湿な苛めを受け続けた少年に、手を差し伸べてくれた大切な友達。

人生に希望を抱けなかつた少年に、希望を与えてくれた掛け替えの無い存在。

当麻「バニングスさん達が居たから僕は友達が出来たんだ」

アリサ「…」

当麻「だから、何も手助け出来てない事なんてないんだよ」

アリサ「…あんたって馬鹿ね…」

当麻「…え？」

アリサ「何かアンタと話してると恥んるのが馬鹿らしくなつちやつた…」

当麻「そうかな？」

アリサ「そうよ。浜面とすずかも心配してたんだから謝つておきなさいよ」

当麻「うん」

アリサ「よひしご…つてもう休憩時間が過ぎ去るじゃない…？」

コンビニの時計を見て慌てるアリサ・バーニングス。

急いで品物をカゴに入れるアリサ。

当麻も傷薬を買わなければいけないことを思って出しで、急いで商品をカゴに入れる。

店員「ありがとうございます～！」

急いで店を出るアリサと当麻。

アリサ「それじゃあね～！」

当麻「また明日～！」

アリサは稽古場に、当麻はマンションに向かおうとしていたが…

当麻&アリサ「え？」

アリサ・バーニングスの田の前には刃物を持った男が居た。

アリサ「さやああ～！」

刃物をアリサに向ける不審者。

当麻「くつ…」

グイ～！

アリサの手を引く当麻。

少女に向けられた刃物が少女に突き立てられる」とはなかつた。

アリサ「きや…」

当麻「大丈夫！？」

アリサ「う…うん」

当麻「走れる！？」

アリサ「だ…駄目…腰が抜けて…」

いきなり不審者に刃物を向けられて怯まない人間の方が珍しいだろう。

アリサ・バニングスの前に立ち、不審者を睨みつけて拳を構える上条当麻。

アリサ「む…無理よ！」

当麻「大丈夫」

アリサ・バニングスにそう告げた上条当麻。

容赦なく少年を刃物で切りつける不審者。

少年はその攻撃をギリギリで避ける。

アリサは恐怖で目を開ける事が出来なかつた。

当麻「くつ…」

上条当麻の頬が切り裂かれる。

しかし、それでも少年は怯む事無く不審者に立ち向かう。不審者の懷に入った少年は、渾身の一撃を腹部に叩き込む。その攻撃に堪らず膝をつく男。恐る恐る田を開けるアリサ。

当麻「バーニングスさん！逃げるよ！…」

アリサ「う…うん…！」

少女の手を引いてその場から逃げる少年。逃げる場所を探している一人だったが、アリサの提案により稽古場に行くことに決めた。

稽古場に辿り着いた上条当麻とアリサ・バーニングスは月村すずかに出会った。

すずか「アリサちゃんに上条君…? どうしたの?」

アリサ「すずか…大変なの…！」

すずかに先程の出来事を語るアリサ。

二人が話している隙を突いて、稽古場から出て行く当麻。

すずか「上条君は？」

アリサ「え？」

少年がその場から忽然と居なくなつていた事に気付く一人。

アリサ「一体何処に…？」

すずか「これって…」

アリサ「どうしたのー?」

月村すずかは地面に落ちている赤い液体を発見した。
それが一体何を意味するのか理解するのに、ある程度の時間を必要とする一人だった。

当麻「早く…帰らなきゃ…」

マンションに向けて歩みを進める上条当麻。
彼の背中からは赤い液体が滴り落ちていた。
恐らく、先程の不審者との戦いで受けた傷だろう。

当麻「フェイトと…アルフが…待ってる…」

覚束ない足取りでマンションに向かう少年。
何とかフェイトの居る部屋まで来れた少年はドアを開ける。
しかし…

当麻「い…ない…?」

彼女の部屋には誰も居なかつた。

一方その頃、高町なのはとユーノ・スクライアはジュエルシードの捜索を行っていた。

なのは「見つからないね…そろそろ帰らないと…」

本日はいつもよりジュエルシードを搜索する時間が取れたのだが、結局ジュエルシードを見つけることは出来なかつた。

ユーノ「大丈夫だよ。僕がもう少し探しておくから」

なのは「ユーノ君、大丈夫?」

ユーノ「大丈夫だよ。だから晩御飯取つておいてね」

なのは「うん」

ユーノと分かれて自宅に向かうなのは

なのは「（アリサちゃんとすずかちゃん。そもそも稽古が終わる頃かな?）」

その頃、フェイトとアルフはビルの屋上に居た。

アルフ「トウマには何も言わないで来ちゃつたけど……悪いことしちゃつたね……」

フェイト「…うん」

上条当麻に何も告げずにジュエルシードの搜索を行つてゐるフェイト・テスター・ジュエルシードの位置は?

アルフ「まあでも…今更マンションに帰るわけにはいかないけどね…」

フェイト「大体この辺りだと思うんだけど…大まかな位置しか分か

らないんだ」

アルフ「まあ…これだけ混雑してると探すのも一苦労だよね」

フェイト「ちょっと乱暴だけど…周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

アルフ「ちょい待ち!それアタシがやる!」

フェイト「大丈夫?結構疲れるよ?」

アルフ「ここのアタシを一体誰の使い魔だと?」

アルフの言葉を聞いたフェイトは軽く微笑んだ。

フェイト「じゃあお願い」

アルフ「そんじゃあ…!」

周辺に魔力流を打ち込むアルフ。
膨大な魔力が周囲に迸る。
異変に気付いたなのはとユーノ。

ユーノ「こんな街中で強制発動!/?広域結界…間に合え!」

慌てて結界を開くユーノ。

なのは「レイジングハート…お願い…!」

バリアジャケットに着替える高町なのは。

アルフの魔力を受けたジュエルシードが姿を現した。

フュイト「見つけた！」

アルフ「けど…あつちも近くに居るみたいだね…」

フュイト「早く片付けよう…バルティッシュユー…」

『Sealing Form・Set up』

ジュエルシードを封印する態勢を取るフュイト。

ユーノ「なのは…発動したジュエルシードが見える…？」

なのは「うん…直ぐ近くだよ」

ユーノ「あの子達が近くにいるんだ！あの子達より早く封印して…」

なのは「分かった…！」

『Sealing Mode・Set up』

『レイジングハート』と『バルディッシュ』から放たれた光がジュエルシードに直撃する。

予想外の出来事に同様する高町なのはとフュイト・テスタークサだつたが、ジュエルシードの封印を続ける一人。

なのは「リリカル…マジカル…！」

フュイト「ジュエルシード、シリアル19封印…！」

「一つのデバイスから放たれる光が輝きを増して、ジユエルシードは封印された。

『Device Mode』

封印されたジユエルシードに近付きながら、アリサ・バーニングスと喧嘩した当時の出来事を思い出す高町なのは。

なのは「（アリサちゃんやすずかちゃんとも、始めて会った時は友達じゃなかつた。話を出来なかつたから。分かり合えなかつたから。アリサちゃんを怒らせちゃつたのも…私が本当の気持ちを伝えられなかつたから）」

ユーノ「やつた！なのは…早く確保を…」

アルフ「やつはさせんかい！」

なのはに襲い掛かるアルフの攻撃を結界を用いて防ぐユーノ。

なのは「（田代がある同士だからぶつかりあうのは仕方ない…だけど…知りたいんだ…上条君が協力する理由を…貴女が何の為にジユエルシードを求めてこられるのか…）」

なのは「この間は自己紹介できなかつたけど…私なのは…高町なのは…私立聖祥大附属小学校三年生！」

『Scythe Form』

フュイトの瞳を見たなのは。

なのは「（どうして…上条君と同じ様な…寂しい目をしているの…）

「

なのはに襲い掛かるフェイト。

『Frier Fion』

辛うじてフェイトの攻撃を避けるなのは。

その頃、アリサ・バニングスと月村すずかは…

アリサ「どうしたらしいのよ…？」

すずか「お…落ち着いて…」

現状が飲み込めないアリサと彼女を落ち着かせるすずか。

地面に落ちていた赤い液体は上条当麻の血であることを理解した一人は、酷く動搖していた。

彼を探しに外出しようとしたが、先程襲われた不審者の件もあり、外出することは固く禁じられていた。

身動きの全く取れない二人。

アリサ「（なのは…上条…浜面…）」

すずか「なのはちゃん…上条君…浜面君…」

一人に出来る」とは友達の無事を祈ることだけだった。

結界内で激闘を繰り広げる一人。

後方から凄まじい速度で迫り来るフェイト。

『Flash Move』

高町なのはの足元に生えていたるピンク色の羽が動いて、フュイトの背後を取ることに成功する。

『Divine Shooter』

『Defender』

魔力で出来た障壁を作り出して攻撃を防ぐフュイト。

なのは「フュイトちゃんー！」

フュイト「ー？」

戦闘中に高町なのはに話しかけられて困惑のフュイト・テスター^{サ。}

なのは「話しかけじゃ……言葉だけじゃ……何も変わらないって言ったけど……だけど……話すことと言葉にしないこと伝わらなこともあるよ」

フュイト「……」

なのは「ぶつかり合つたり競い合つことは仕方ないけど……何も分からぬままぶつかりあうのは嫌だよー。」

なのはの言葉を聞くフュイト。

なのは「私がジュエルシードを集める理由はユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君だから…ユーノ君はそれを元通りにしなくちゃいけないから…」

自身がジュエルシードを集める目的を語る高町なのは。

なのは「私は偶然ユーノ君に会って、その手伝いとしてジュエルシードを集めてたけど…今は自分の意思でジュエルシードを集めるんだ。自分の暮らしている町や周りの人々に危険が降りかかるのは嫌だから…これが…私がジュエルシードを集める理由…」

フェイント「私は…」

なのはがジュエルシードを集める目的を聞いたフェイントは、自分がジュエルシードを集める目的を語るうつとしたが…

アルフ「フェイント…！…答えなくていい…！」

アルフがフェイントに呼び掛ける。

なのは&フェイント「！？」

アルフ「優しくしてくれる人達の下で、暮らしている様なガキンチヨには何も教えて…」

アルフの言葉が止まり疑問を感じる高町なのはとフェイント・テスター・ロッサとユーノ・スクライア。

何かを凝視しているアルフを見た一同は、アルフが見てている先を見た。

そこには…一人の少年が倒れていた。

この場に居る全員はその人物に見覚えがあった。

フェイント 当 麻 ?

なのは「上条…君？」

何故少年が倒れているのか理解できていない少女達だが、少年の背中を見て一気に現実に呼び戻される。

少年の服は赤く染まっていた。

上条当麻が着ている服を染めている物が、血であることを認識することに然程時間は掛からなかつた。

なのは「上…」

フェイント 当 麻 ! !

戦闘を放棄して少年の下に向かうフェイント・テスター口ッサ。

フェイント「当 麻 ! ! しつかりして ! !」

アルフ「フェイント…あまり動かしちゃ駄目だ ! !」

フェイント「でも…」

アルフ「アタシがトウマを病院に連れて行く ! ! だからフェイントはジユエルシードを ! !」

アルフは少年を連れてその場から去つて行つた。
フェイントはジユエルシードを見つめる。
彼女の目には涙が溜まっていた。

『バルティックシユ』を構えてジュエルシーードを回収するために動き始めるフェイト。

ユーノ「なのは……今はジュエルシーードを……」

なのは「……？」

異常な事態に混乱している高町なのはだが、ユーノの言葉で我に帰る。

ジュエルシーードに向けて特攻するフェイト・テスタークロッサと高町なのは。

しかし……

ガギーン！！

ビシビシ……

『レイジングハート』と『バルティックシユ』が激突して亀裂が入り、ジュエルシーードが凄まじい魔力を放出した。

第20話 少年の決意

ジユエルシードが凄まじい魔力を放出している頃、浜面仕上は海鳴市の公園のベンチに座っていた。

仕上「流石に言い過ぎたかな…」

仕上は昼休憩に高町なのはと上条当麻に投げ掛けた言葉について軽く後悔していた。

仕上「いやでも…あいつらだって困ったことがあるなら相談すればいいのに…ん？」

二人と喧嘩したことについて考え込んでいる浜面仕上は、近くに刃物を所持した不審者を見つける。

仕上「あれって…まさか…」

嫌な予感がした少年だったが、時既に遅く…不審者と田が合つてしまつ。

ザツ！

刃物を持った男が仕上の下まで近付いてくる。
嫌な汗が止まらない浜面仕上は…

仕上「ちくしょう…不幸だああああ…」

ダツ！！

不審者から全力で逃走した。

不審者も少年を追い駆ける。

浜面仕上は私立聖祥大附属小学校の中でも頭は非常に悪い方だが、運動神経は非常に高い。

しかし、大人相手では分が悪く、長い間不審者から逃げ続ける少年だった。

一方その頃…

ユーノ「デバイスが！？」

デバイスに亀裂が入り動搖するユーノ。

凄まじい魔力の奔流が三人を包む。

ユーノ「なのは！！」

フェイントは亀裂の入ったバルディッシュを見た。

フェイント「大丈夫？ 戻つて…バルディッシュ…」

『Yes sir』

宝石の形態に戻るバルディッシュ。

魔力を放出し続けるジュエルシードの下まで近付いて、そのまま両手で握る少女。

彼女の行いを止めるアルフと上条当麻はその場に居ない。

フェイントはジュエルシードの暴走を無理やり抑えようとするが、莫大な魔力がジュエルシードから放出される。

フェイト「止まれ……止まって……止まれ……！」

ブシュー！！

フェイトの両手から噴出す血液。

フェイトの想いを嘲笑うかのようにエネルギーの放出を続けるジュエルシード。

しかし…

『A b s o r b』

なのは「えー？」

ユーノ「この声は…まさか…」

突然、その場に無機質な声が響き渡る。
ジュエルシードから放出される魔力が徐々に減少していく。
その隙を見逃さなかつたフェイトは、そのままジュエルシードの魔力の放出を抑えることに成功する。

フェイト「はあ…はあ…」

満身創痍のフェイト・テスタロッサ。

彼女は再び立ち上がり、高町なのはとユーノ・スクライアの前から立ち去つて行つた。

そんな彼女を呆然と見ることしか出来なかつた一人だつた。

彼女達から少し離れた場所で、デバイスを展開していた結標真紀。

真紀「凄まじい魔力ね……確かに厄介だわ……」

彼女が所持しているデバイスが不気味な光を放っていた。

シュー……

溜まり過ぎた魔力を放出する『フェンリル』

真紀「そろそろ動き始めますか……」

ヒュン！！

その頃、浜面仕上は不審者に追い駆けられたままだった。

仕上「ちくしょう……まだ追つてきやがる……」

私立聖祥大附属小学校の中で最も高い体力を誇る仕上も所詮は只の少年であり、そろそろ限界を迎えていた。

仕上「はあ……はあ……流石にもう無理だ……」

限界を迎えた少年はその場にへたり込む。

仕上「俺……死ぬのかな……」

小学三年生で生命の危機に晒されると思つていなかつた少年。こんなことなら喧嘩しなきやよかつたと後悔する。

浜面仕上に迫り来る不審者。

しかし、少年に近付くのは不審者だけではなかつたらしく……

士郎「仕上君じゃないか？びついたんだ」んな所で？」

不審者とは反対方向から、高町なのはの父親である高町士郎が現わ
れた。

仕上「おっけやん！…変な奴が！…」

少年の話している言葉が理解できない士郎だったが、少年の背後か
ら刃物を持った男が現われる。

一瞬で状況を理解した高町士郎。

刃物を持って浜面仕上に襲い掛かる不審者。

しかし、田にも止まらぬ速度で不審者の懷に飛び込んだ高町士郎が
一撃をお見舞いする。

ズドン！

ドサー！

一撃で倒れる不審者。

一瞬の出来事に何が起きているのか全く分からなかつた浜面仕上。
高町士郎は少年の下に近付いて頭を撫でた。

士郎「良く頑張ったね」

その後、血がまでも送つてもひつこになつた少年。

仕上「（かつけえ…）」

両親に怒られている最中、少年は高町士郎の姿を思いでいた。

アルフ「フェ…フェイト！？その怪我は！？」

海鳴市にある大学病院で合流したフェイト・テスタークサとアルフ。フェイトの手の怪我を見たアルフは酷くうろたえていた。

フェイト「大丈夫だよ…それより当麻は…」

アルフ「緊急手術が終わって今は容態が安定しているらしくけど…出血多量で死んでたかもしれないって…」

フェイト「そり…」

アルフ「フェイトは手を診てもらひなよー。ここの病院だし…」

フェイト「うん…」

そんなやり取りをしている一人の下に一人の女性が近付いてくる。

石田「どうしたの？」

アルフ「先生…」

アルフが医者と思わしき人物に声を掛けた。フェイトも女性の方を向いて軽く挨拶する。

石田「貴女…」

両手から血が流れている所を見られて、慌てて両手を隠すフェイト。

アルフ「フェイトを診てやつておくれよ！」

石田「言われなくてそのままのつもりよ」「みよ。

石田とアルフに連れられて処置室に連れて行かれるフュイト。簡単な処置を終えて安堵するアルフ。

石田「これで終わりね。少し染めるかもしないけど……」

フュイト「ありがとウ……『ヤマサキ』

石田「緊急事態だったから聞き忘れていたけど……貴女達は上条君とはどういう関係なの？」

アルフ「隣の部屋に住んでるんだけど……」

石田「そ、う……」

少しばかり神妙な顔をする石田に違和感を覚えるフュイト。

フュイト「あの……何かあったんですか？」

石田「こんなことを聞くのはあれだけ……上条君は虐待されているのかしい？」

フュイト「……え？」

予想外の答えに動搖を隠せないフュイト。

アルフ「虐待？」

石田「彼の身体には無数の痣があつてね……それに刃物で突き刺された傷跡もあつたのよ……それも何箇所も……死んでもおかしくないほど」
の怪我を負つていて……今回の怪我は比較的マシな方だつたのよ」

フェイト「う……そ……」

アルフ「……何だよ……それ……」

石田「……彼のいじ両親は？」

アルフ「……居ないつて言つてたけど……トウマは一人暮らしだし……」

石田「そう……」

フェイト「……」

石田「とにかく……もう二三な時間だし……ベッドを用意するから」

フェイトとアルフのベッドを確保するためにその場から立ち去る石田。

衝撃的な事実に愕然とするフェイト・テスター・オッサ。

アルフ「サイアイに連絡しこなこと……」

携帯電話を取り出してマンションに居る絹旗最愛に連絡するアルフ。
連絡が終わるアルフ。

アルフ「フェイト……」

フェイト「……」

上条当麻の両親がどんな人物か全く知らない二人。

だからこそ、少年の過去に何があったのかも知る手段がない。

それから少し時間が経つて、一人の下に石田が戻ってくる。

石田「ベッドは上条君が寝ている病室に置いたけど、大丈夫かしら？」

フェイド「はい…」

上条当麻が眠っている病室に入るフェイド・テスター・ロッサとアルフ。少年は静かに寝息を立てていた。

少年が寝ているベッドの隣に置いてある椅子に座るフェイド。

フェイド「当麻…」

少年の手を握るフェイド。

アルフ「…」

黙つてその様子を見ているアルフ。

少年の手を離す少女。

フェイド「アルフ…寝よう?」

アルフ「…うん」

病室に運び込まれたベッドに入り眠りにつくフェイドとアルフだった。

その頃、高町なのはとユーノ・スクライアは自宅に帰っていた。破損した『レイジングハート』を見るユーノ。

ユーノ「（レイジングハートはかなりの大出力にも耐え得るデバイスなのに…それを一撃で…ここまで破損させるなんて…あの子とはの魔力の衝突…いや…やっぱり説明がつかない…あれはやっぱりジュエルシードの…）」

『レイジングハート』が破損した理由について考えるユーノだったが…

コンコン…ガチャ！

ドアを叩く音が聞こえて一旦、思考を中断する。

なのは「ユーノ君…レイジングハート…大丈夫？」

ユーノ「かなり破損は大きいけど…きっと大丈夫。今は自動修復機能をフル稼働させてるから明日には回復すると思つよ」

なのは「うん…」

ユーノ「なのは…大丈夫？」

なのは「うん…レイジングハートが守ってくれたから」

ユーノ「そう…」

なのは「ユーノ君…上条君のことなんだけど…」

少女が思い出すのは血塗れで倒れている少年の姿。その事を思い出すたびに身体が震える高町なのは。

ユーノ「あの子が運んで行つたみたいだけど…何処にいるのかは分からない…」

なのは「上条君…大丈夫かな…」

ユーノ「…」

当麻の容態が気になるのはだが、少年が何処にいるのか全く見当も付かない。

ユーノ「当麻君の事も気になるけど…あの子がジュエルシードを掴んでいたときに聞こえた声は…」

なのは「やっぱ…デバイスなの?」

ユーノ「多分…」

あの場に響き渡つた声がデバイスならば、彼女達の近くには三人目の魔導師が居たことを意味する。
三人目の魔導師の目的は十中八九ジュエルシードだろうと推測するユーノ。

翌朝

当麻「ひ…ひ…ひは…?」

一夜明けて目覚める上条当麻。

当麻「確か…フェイトとアルフを探してて…途中で眠くなつて…」

外で気を失つたことを思い出す少年。
しかし、彼が居る場所は屋内で、一体あれから何があつたのか分か
らない。

顔を上げて周囲を見渡す上条当麻。

その部屋にはベッドが一つ置いてあり、そこドフェイト・テスター
ツサヒアルフが静かな寝息を立てていた。

当麻「フェイト…アルフ…」

フェイト「うん…ん…」

少年の声に反応して目を覚ますフェイト。
寝惚け眼で周囲を見る少女。

フェイト「当…麻…？」

当麻「おはよー」

少年の言葉を聞いた少女は…

フェイト「当麻…！」

当麻「ちょ…フェイト…ー？」

突然抱きつかれて混乱する上条当麻。

フェイト「心配…したんだから…ー…」

涙を流して少年に語りかける少女。

フェイント・テスター・ロッサが涙を流す姿を始めて見た上条当麻。

当麻「……『めんなさい』」

フェイント「でも…良かった…当麻が田を覚ましてくれて…」

また迷惑を掛けてしまつたと罪悪感に苛まれる少年。

フェイント「何があつたの?」

上条当麻が背中から血を流していた原因を尋ねるフェイント・テスター
ロッサ。

当麻「実は…」

昨日の出来事を包み隠さず話した少年。

フェイント「そうだつたんだ…『めんな』勝手にジュエルシードの捜索に出掛けた…」

当麻「気にしないで…」

沈黙が病室を包む。

アルフは依然、熟睡したままだった。

少し時間が経つて、フェイント・テスター・ロッサが口を開く。

フェイント「昨日…あの子と戦つたんだ…」

当麻「高町さんと？」

フロイト「うん……」

昨日の出来事を少年に全て語る少女。

フロイト「当麻は…あの子がジュエルシードを集めめた目的を知っていたの？」

当麻「…うん」

フロイト「…話しあひたほうがいいのかな？それとも…」そのまま戦つたほうが…」

当麻「僕は…話しあひた方がいいと思つ」

フロイト「…」

当麻「確かにフロイトの言つ事も一理あると思つ。話しあひたとしても戦う事が避けられないかもしれない」

フロイトは少年の言葉を黙つて聞く。

当麻「だけど…何も分かり合えないまま戦うのは辛い」とだから…」

そう語つたときの少年の瞳は悲しげだった。

フロイト「分かった。今度出合つた時は私も話しあひてみようと思

う」

当麻「ありがとつ…」フュイト「

感謝の言葉を聞いて頬が赤くなるフュイト。

アルフ「ううん…」

よつやく田の覚めたアルフが周囲を見渡す。

アルフ「トウマ…田が覚めたんだね…」

当麻「うん。心配かけて」めんね…」

アルフ「何言つてゐんだい！」

アルフの喜ぶ姿を見て自然と表情が緩む当麻とフュイト。

フュイト「今から売店に行って何か買ってくるけど、何か欲しいものある？」

アルフ「鮭弁でお願い！」

当麻「僕は何でもいいよ」

フュイト「分かつたよ」

そう言つて病室から出て行くフュイト。

現在病室に居るのは、上条当麻とアルフの二人だけだった。

アルフ「それにしてもトウマの田が覚めてよかつたよ～」

当麻「あの……アルフ。ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

アルフ「ん? なんだい?」

当麻「フェイトの背中の傷の事なんだけど……」

ピクー!

アルフの動きが硬直する。

当麻「あの傷はジュエルシード集めでついたものなの?」

アルフ「違うよ……」

当麻「え?」

アルフ「あの傷は……フェイトの母親に……つけられたんだよ……」「ギリ

静かに拳に力を入れるアルフ。

ボタ……

力を入れ過ぎたせいで彼女の拳からは血が滴り落ちていた。
衝撃的な事実に少年は驚愕する。

当麻「どうして……」

アルフ「アタシにも分かんないよ……でも……あの人はフェイトを愛していない……それだけは確かなんだ……」

当麻「そんな……」

アルフ「トウマ…話の腰を折つて悪いけど…アンタの傷は誰につけられたものなんだい？」

当麻「え?」これは…不審者?」

アルフ「昨日の話じゃない。他の傷の話を」

ビク! - !

当麻「これは…」

アルフ「もしかして…アンタも…親に『ただいま』…?」

突然フェイトの声が聞こえて会話を中断する一人。

フェイト「どうしたの?」一人とも…」

当麻「な…何でもないよ…ねえアルフ…」

アルフ「そ…そつだよ」

フェイト「?」

あからさまに態度のおかしい当麻とアルフに疑問を感じたフェイト
だったが、その事について言及するような真似はしなかつた。

フェイト「当麻には悪いんだけど、今日は私達一人で行動させて欲
しいんだ」

当麻「どうしたの？」

フェイト「今日は母さんにジュエルシードの搜索状況について報告をしなくちゃいけなんだ」

当麻「フェイトのお母さん……」

アルフからフェイトの母親の行いを聞いた少年は心中穢やかではなかつた。

フェイト「だから…悪いけど」「フェイト」え?」

当麻「僕もついて行つていいかな?」

フェイト「いいけど……」

当麻「ありがと」

アルフ「全く…報告だけなら、アタシが行つて来れたらいいんだけどね……」

フェイト「母さんはあまりアルフの言つ事をあんまり聞いてくれないもんね……」

当麻「……」

フェイトの身を心配する少年。

アルフ「ま…まあ今日は大丈夫だよ!短期間でジュエルシードを五

つも集めたし、壊められるかはともかく、叱られるよつなことは絶対ないよ……」

フロイト「うん……そうだね」

フロイトとアルフが話している最中、上条当麻は右手を強く握り締めていた。

フロイトを理不尽な暴力から守る為に。

その頃、高町なのはは実家にある道場で、姉である高町美由紀の鍛錬を眺めていた。

ユーノ「（なのは？）」

なのは「（ユーノ君？）」

ユーノ「（どうしたの？）」んな朝早くから……」

なのは「（ちよつと目が覚めちゃってね……）」

なのは「それでね……ユーノ君。私……考えたんだけど……上条君ヒトハヤンのことが気になるの……」

ユーノ「気になる？」

なのは「うん。上条君は魔法みたいな力も無いのに……困っている人を助けるのに全力で戦つてた……だけど……何だか凄く無理をしてるようだった……」

ユーノ「……」

なのは「フェイトちゃんは…凄く強くて…冷たい感じもするの」「…だけど…綺麗で優しい瞳をしていた…なのに何だか凄く悲しそう…」

黙つて少女の話を聞くコーノ・スクライア。

なのは「きっと理由があると思うんだ…ジユエルシードを集めている理由…だから私…あの二人と話をしたい。だからその為に…」

高町なのは一つの決心をする。

その頃、上条当麻とフェイト・テスタロッサとアルフは病院の屋上に移動していた。

フェイトはケーキを片手に持っていた。
当麻は右手用の手袋をはめていた。

フェイト「お土産はこれでよし…と」

アルフ「甘いお菓子…ねえ…こんな…あの人は喜ぶのかね?」

フェイト「分からぬけど…こういうのは気持ちだから」

当麻「…」

アルフ「ふうん」

フェイト「次元転移…次元座標『876C 4419 3312
D699 3583 A1460 779 F3125』」

フェイト「開け…誘いの扉。時の庭園…テスタロッサの主の元へ…」

???

??? 「上の許可も取れたしそろそろ行動に移るわよ

??? 「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが...一組の探索者が再び衝突する可能性は高いですね」

??? 「そうね...小規模とはいえ次元震の発生はちょっと厄介だものね...彼女が居るとはいえ...早めに何とかしないといけないわよね」

??? 「大丈夫...分かってますよ...僕はその為にここにいるんですから

第21話 三人目の魔導師

『私立聖祥大附属小学校』

教室に集まつた四人の少年少女達。

仕上「高町……昨日は言い過ぎた……」「めんな……」

アリサ「なのは……」「めん……」

なのは「ううん……私がちゃんとお話を聞いてなかつたから……」

一田足らずで仲直りした一同。

すずか「良かつた……」

色々な出来事が同時に発生した為、喧嘩している場合ではなくつたのだろう。

アリサ「なのは……あの……」

なのは「どうしたのアリサちゃん?」

アリサ「上条を見てない?」

なのは「上条君を?」

アリサ「昨日、刃物を持った不審者に襲われて上条に助けてもらつたんだけど……」

すずか「上条君がアリサちゃんと一緒に稽古場に来たんだけど、何時間にか居なくなつて……学校にも来ていないし……」

そつと云つて田村すずかは上条当麻の席を見る。

なのは「そつ……だつたんだ……」「めん……私も見てないや……」

昨日の出来事を包み隠さず話すわけにはいかない少女は、少女達に嘘をついた。

アリサ「そつ……」

仕上「お前等も不審者に襲われたのかよ！？」

「」「え？」「」

予想外の言葉に軽く動搖する少女達。

アリサ「アンタも襲われたの！？」

仕上「昨日公園に居た時に襲われてな……」

なのは「大丈夫だったの？」

仕上「大丈夫じゃねえと此処にいねえだろ……高町のおつちちゃんが助けてくれたんだよ」

なのは「お父さんが？」

仕上「うう…一撃で不審者を倒して…すっげえかっこよかつたぜ！」

すずか「なのはちゃんのお父さんは凄いね」

なのは「いやね…」

アリサ「でも…上條は一体何処に行つたんだうつね…」

なのは「（上條君…）」

上條当麻の安否を心配する高町なのは。

『時の庭園』

一方その頃、上條当麻はフロイト・テスマラッサとアルフの二人とフロイトの母親である人物が居ると思われる場所を訪れていた。

当麻「…」フロイトのお母さんが…

フロイト「当麻へ遊びに来たの？」

当麻「何でも無いよ」

アルフ「…」

フロイト「じゃあ…私はお母さんと報酬をして行くから…」

当麻「ちょっと待つて」

フロイト「どうしたの？」

当麻「その前にフロイトのお母さんこありてもいいかな？」

フロイト「いこと思ひナビ...」

当麻「直ぐ済むから...」

ギギイ...!

そのままフロイトとアルフを残して、先に進む少年。

フロイト「一体どうしたんだろ?」

アルフ「...」

時の庭園内をある程度進んだ少年は、一人の女性を見つかる。

フレシア「貴方は一体何者かしら?」

女性が当麻に声を掛ける。

当麻「貴女が...フロイトの...母親ですか?」

フレシア「質問に質問で返すのは感心しないわね...」

当麻「答えて下せこ」

少年の態度に溜息をついた女性は...

プレシア「ええそうよ。私は大魔導師プレシア・テスタロッサ。フェイ特・テスタロッサの母親よ」

当麻「…」

静かに拳を握り締める少年。

フレシア「貴方はフェイ特の知り合いかしら？」

当麻「お願いがあります」

フレシア「生憎私は忙しいの。子供の戯言に付き合つてている暇は…」

当麻「もつ…これ以上…フェイ特を傷付けないで下さ…」

普段の彼からは想像も出来ないほど、鋭い目つきでフレシア・テストロッサを睨みつける上条当麻。

フレシア「何かと思えばそんなことか…アルフにでも頼まれたのかしら?」

当麻「フェイ特を傷付けないでください」

彼女の言葉を無視して、フェイ特を傷付けるなど語りかける少年。

フレシア「自分の娘をどう扱おうが、赤の他人に口を出す権利があると思つてるの?」

当麻「貴方は…自分の娘を何だと思つてるんだ!」

プレシア「うるさいわねえ…人形に配慮なんて要ると思つてゐるのか
しら？」

当麻「フェイトは…フェイトは…人形なんかじゃない！」

我慢の限界を迎えた上条当麻はプレシア・テスタロッサに向かつて
全力疾走する。

プレシア「全く…」

プレシアから放たれる紫色の閃光。

牽制のつもりで放った攻撃だが、少年は全く臆する事無く突っ込んでいく。

牽制が意味ないと理解した彼女は、少年に向かつて容赦なく攻撃をする。

大魔導師という言葉は決して飾りではなく、見た目だけで相当高い威力を持つていることが分かる。

少年は閃光に向かつて右手をかざす。

何をしているのか全く理解できないプレシア・テスタロッサだった
が…

バキン…！

少年の右手が閃光に触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、閃光は跡形も無く消滅した。

プレシア「なつ…？」

当麻「うおお…！」

フレシア「くつ…」

ビュン…!

上条当麻の拳が空を切る。

一旦、距離を取るフレシア・テスタロッサ。フェイトやアルフが只の人間をこの様な所に連れてくるなど、ありえないと考えていた彼女だった。せいぜい、目の前の少年は単なる魔導師ではないかと考えていたが…

フレシア「（一体何が…防御したわけでは無く…あの右手に触れた瞬間に…消えた…？）」

あまりにも異質な力を奮う少年。

フレシア「貴方は一体何者なのかしら？」

当麻「只の小学生だよ」

フレシア「笑えない冗談ね…」

フレシアの持っている杖が鞭に姿を変化する。

上条当麻に向かって鞭を奮うフレシア・テスタロッサ。

フレシア「はあ！」

ビュン…!

当麻「くつ…！」

紙一重で攻撃を避ける少年。

フェイントとアルフの特訓の成果もあり、攻撃を喰らつ心配は無いと思われたが…

ズキッ！

当麻「痛う！…」

病み上がりで激しい動きをした為に、少年の背中に激痛が走る。

バシン！！

当麻「ぐあ…」

鞭が少年の身体に直撃して、閉じていた傷が再び開いた。

ポタポタ…

当麻の背中から滴り落ちる血液。
苦痛に顔を歪める少年。

プレシア「病み上がりで私に挑むなんてね… そんなにあの**人形**が大切かしら？」

当麻「フェイントは…人形なんかじゃ…」

プレシア「いいえ…人形よ…」

少年の言葉を容赦なく切り捨てるプレシア・テスター。テスター。

フレシア「フェイトは私の大事な娘であるアリシアの代用品よ」

当麻「え？」

フレシア「所詮、偽者は本物にはなれないのよ」

当麻「関係ない……」

フレシア「…何ですって？」

当麻「フェイトはフェイトだ…この世に一人しか居ないんだ…偽者なんかじゃない…！」

グググ…

再び立ち上がり、フレシアに立ち向かう当麻。

しかし…

バシン！！

当麻「あぐつ…」

フレシア「そんな身体で何が出来るつて言つの？それに、何故フェイトの為にそこまでするのかしら？」

馬鹿の一つ覚えみたいに立ち向かってくる少年に呆れたように話しかけるフレシア。

当麻「フェイトは…僕の大切な…友達だ…」

フレシア「友達…ねえ…なら…貴方がフェイトの代わりに罰を受け
るって言ひつかしら?」

当麻「フェイトに…手を出さないなら…」

フレシア「分かったわ…ならば今日の所は帰りなさい…それと今まで集めたジューエルシードの数は?」

当麻「五個…だ…」

フレシア「全然足りないわね…」

バシン!!

当麻「ぐ…」

鞭で当麻を叩くフレシア。

フレシア「次に報告に来る時に、この調子だつたらこの程度じゃ済まないわよ?」

そう言ってその場から立ち去るフレシア。

その場に残された上条当麻。

所々服は擦り切れ、背中からは血が流れていた。

当麻「早く戻らなきゃ…フェイトとアルフが…待ってる…」

ギュ!!

包帯をわざわざ締めて、無理やり流れる血を止める少年。

その頃、フュイトとアルフは…

フュイト「遅いね当麻…」

アルフ「うん…」

早く戻つてくると話していた少年が戻つて来なくて、若干の不安を感じる二人。

ギギイ…

扉が開く音がする。

そこから、上条当麻が出てくる。意外と遅かったけど一体何があったのか当麻に聞こいつと思っていたフェイドとアルフだったが…

当麻「ただ…いま…」

所々服が擦り切れ、今にも倒れそうな姿に動搖する一人。

フュイト「当麻！？」

アルフ「どうしたんだい！？」

当麻「何でも…ないよ…」

アルフ「何でも無いって事ないだろ…?まさか…」

当麻「大丈夫だよ……アルフ……フュイト……」

「フュイト」「でも……」

今にも泣き出しそうなフュイトの姿を見た当麻は、彼女の頭を撫でながら……

当麻「帰ろう?」

「フュイト」「うん」

アルフ「……ああ」

その頃、時の庭園内の最深部では……

フレシア「（魔法を完全に無効化する力……詳しい情報は無いけど……ジユエルシードの制御に……使えるかもしないわね）」

フレシア・テスタロッサが思い出すのは先程の少年が発揮した謎の力。

あれが一体どうこうものなのか全く見当も付かない彼女だったが……

フレシア「（アルハザードに行く事を出来れば……私は……アリシアと……）」

上条当麻とフレシア・テスタロッサとの戦いから数時間後、海鳴市でジユエルシードの探索をするフュイトとアルフと当麻。

フュイトとアルフは当麻を休ませようとしたが、少年が一人の言葉を聞く事は無かった。

フェイト「バルディッシュ…どう?」

『バルディッシュ』に話しかけるフェイト。

『Recovery complete』

フェイト「そう…頑張ったね…偉いよ」

アルフ「ジュエルシーードの反応を感じるね…アタシにも分かる」

フェイト「もつすぐジュエルシーードが発動しそうだね」

顔色の悪い上条当麻の姿を見たフェイトとアルフが声を掛ける。

フェイト「当麻…大丈夫?」

アルフ「無理しなくていいんだよ?」

当麻「大丈夫だよ…」

血圧へ帰る途中に、ユーノ・スクライアと合流する高町なのは。ユーノに『レイジングハート』を渡された少女。

なのは「レイジングハート…治ったんだね…良かつた…」

『Condition green』

なのは「また…一緒に頑張ってくれる?」

『A11 right, My master』

なのは「ありがとう…」

それから、少しの時間が経過した。
ジュエルシードを取り込んだ樹木が怪物化した。

ユーノ「封時結界！展開！」

公園がユーノ・スクライアによって作られた結界に包まれる。
遠距離から魔力弾を射出するフェイト。

怪物に向かって射出される魔力弾だったが、怪物が発生させたバリアによつて防がれた。

アルフ「ああ！生意気に…バリアまで張るのかい？」

フェイト「今までより…強いね。それに…あの子も…」

当麻「フェイト…」

フェイト「分かつてゐよ当麻」

当麻「バリアは僕に任せて…」

フェイト「無理しないでね？」

当麻「…うん」

行動を開始する三人。

高町なのはとユーノ・スクライアに襲い掛かる怪物。

なのは「ユーノ君！逃げて！』

怪物から距離を取るユーノ。

『Flier Fin』

なのは足元に展開される桃色の羽根。怪物の攻撃を避ける少女。

なのは「飛んでレイジングハート！もつと高くー！」

『All right』

上空に移動する高町なのは。

バルディッシュを構えるフェイト・テスター・ロッサ。

フェイト「アークセイバー！行くよ…バルディッシュ！」

『Arc Saber』

バルディッシュから展開される金色の魔力刃。

『レイジングハート』を怪物に向ける高町なのは。

『Shooting mode』

射撃に特化した形態に変化する『レイジングハート』

なのは「行くよ…レイジングハート！」

フェイドが放つた斬撃が怪物の根を切り裂くが、本体はバリアで防がれた。

なのは「打ち抜いて！」

『レイジングハート』の先端に収束されるエネルギー。

なのは「ディバイン…バスター！」

フェイド「貫け豪雷…！」

『Thunder Smasher』

ディバインバスターとサンダースマッシュヤーをバリアで防ぐ怪物だつたが、戦闘の最中で怪物に近付いていた上条当麻が怪物のバリアに右手で触れる。

バキン！！

いつも容易くバリアは破壊されて、怪物に一人の少女の攻撃が直撃する。

怪物の身体からジュエルシードが出現する。

『Sealing mode - Set up』

『Sealing form - Set up』

なのは「ジュエルシード…シリアル？！」

フェイド「…封印…！」

ジユエルシードの封印に成功する高町なのはとフェイト・テスタロッサ。

上条当麻の姿を確認するのは。

少しばかり顔色の悪い少年を心配する少女。

なのは「（上条君…大丈夫かな？）」

お互にに向かって会つフェイトとなのは。

フェイト「ジユエルシードには…衝撃を『えたらいけないみたいだ…』

なのは「うん。昨夜みたいな事になつたら…私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルティッシュも可哀想だもんね…」

フェイト「…貴女のジユエルシードを集めめた的だけ聞いて、私が話さないのはフェアじゃないから…」

なのは「え？」

フェイト・テスタロッサ予想外の言葉に軽く動搖する高町なのは。

フェイト「私は…お母さんの為に…ジユエルシードを集めている…これが私の目的…」

アルフ「フェイト…？」

フェイトの行動に驚きを隠せないアルフ。

「フュイト……だから」『…ジュエルシードを譲るわけにはいかない』

『Device form』

なのは「私は……もつとフュイトちゃんと話がしたい……」

『Device mode』

なのは「私が勝つたら……口の甘つたれた子じゃないって分かってもらえたから……お話をもつと出来ないかな？」

お互いにデバイスを構えて戦いを始めようとした時、彼女達の正面に魔法陣が展開された。

？？？「ストップだーー！」での戦闘は危険すぎるーー」

突然の来訪者に呆然とする一同。

？？？「時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだーー詳しい事情を聞かせてもらおつか…」

第22話 時空管理局（前書き）

少しばかり遅くなつてしまい申し訳ありません。
それでは投下をさせていただきます。

第22話 時空管理局

クロノ・ハラオウンが公園に転移する少し前…

『アースラ』

モニターには、ジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と、戦闘行動を行っている少年少女達が映し出されていた。

リンディ・ハラオウンが注目しているのは、シンシン頭の少年。

リンディ「（右手で触れただけで…バリアを破壊した？）」

デバイスの様な力を持つていない単なる少年が行使した謎の力。

リンディ「（この世界特有の力…かしらね…？）」

局員「現地では既に一人の魔導師による戦闘が開始されている模様です」

局員がリンディに告げる。

リンディ「そり…」

局員「中心となっているロストロギアのクラスはA+…動作は不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せています」

リンディ「次元干渉型の禁忌物品…回収を急がないといけないわね

…」

一拍子置いてからリンクティはクロノに話しかける。

リンクティ「クロノ・ハラオウン執務官…出られるかしら?」

クロノ「転移座標の特定は出来ています。命令があればいつでもリンクティ「それじゃ…クロノ。これより、現地での戦闘行動の停止とロストクロギアの回収、戦闘を行つている両名からの事情聴取をお願いね」

クロノ「了解です艦長」

魔法陣を展開するクロノ・ハラオウン。

リンクティ「気をつけてね」

クロノに手を振るリンクティ。

クロノ「は…は…言つて来ます…」

魔法陣が発動してその場から消えるクロノ・ハラオウン。

リンクティ「(出来る)ことなら…クロノには行つて欲しくなかつたんだけど…」

クロノが向かつた世界は決して安全な世界ではない。

リンクティ「(クロノをお願いね…真紀…)

フェイト・テスタークサと高町なのはの間に割り込むように現われ

たクロノ・ハラオウン。

ユーノ「時空管理局…」

当麻「時空管理局?」

なのは「それって一体…」

時空管理局といつ言葉に全く聞きの覚えの無い上条当麻と高町なのは。

アルフは苦虫を噛み潰した様な表情をしていた。

アルフ「まずは一人とも…武器を引くんだ」

クロノの言葉に従つたフュイトとなのは。
一旦、地面に着地する少女達。

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら…」

ドオン…!

突如、上空からクロノ・ハラオウンに向けて魔力弾が発射される。バリアを張つてその攻撃を防ぐクロノ。

アルフ「フュイトー！助太刀するよー！」から離れて…

この場から逃げ出すことを一人に促すアルフ。

クロノに背を向けてジュエルシードを回収しようとするとフュイト。その隙を見逃さなかつたクロノは、フュイトに向けて魔力弾を放つた。

アルフ「フェイトーー！」

フェイト「え？」

咄嗟に後ろを振り向くが、少女には障壁を開く間も無かった。

当麻「フェイトーー！」

しかし、上条当麻が間に割り込み右手を魔力弾に向けた。

本来なら、右手が魔力弾に触れるだけで簡単に打ち消せるのだが…

フフ…

当麻「やっぱ…」

態勢を崩してしまつ上条当麻。

フレシア・テスター・ロッサとの戦いが響いたのだらつ。

魔力弾は少年の右手に触れる事無く、少年の身体に直撃した。

クロノ「なつーー？」

フェイト「当麻ーー！」

アルフ「トマーマーー！」

なのは「上条君ーー！」

その場に倒れる上条当麻。

クロノの一撃で背中の傷が再び開いたらしく、少年の背中は徐々に

赤く染まつていった。

想定外の出来事により動搖するクロノ。

アルフ「フロイトはトウマを……！」こはアタシが……」

フロイト「分かった……」

アルフがクロノを牽制して、フロイトは当麻をこの場から逃がそうとしていたが……

ヒュン！　

ゴーノ「消えた！？」

なのは「フロイトちゃん！？」

一瞬でその場から消えたフロイト・テスター・ラッサとアルフ。状況が全く理解できないクロノ・ハラオウンとゴーノ・スクライア。

クロノ「何が起きているんだ……」

高町なのはも何が起きているのか理解出来ていなかつたが、血をして倒れている上条当麻の下に駆け寄つて、声を掛け続けた。

なのは「上条君！上条君！」

少女の呼びかけに応えない少年。

突如、現場に謎の映像が出現する。

リンディ「クロノ！ 彼はこちうらで治療するから、彼女達の誘導をお

願い！」

クロノ「了解しました！」

リンディ・ハラオウンに話し掛けられたクロノ・ハラオウンは転送専用の魔法陣をその場に展開する。

クロノ「彼をこの魔法陣に！」

当麻を魔法陣に移動させるように促したクロノ。

なのは「上条君！しつかりして！」

しかし、クロノの言葉を無視して少年に話しかけるなのは。彼女自身、血を流して倒れている人間を見慣れていないことから、軽いパニックに陥っていた。

ユーノ「なのは！当麻君を魔法陣に！」

ユーノもなのはに話し掛けるが、彼の声が彼女に届くことはなかった。

このままでは埒が明かないと考えていた二人の下に、一人の少女が近付いてきた。

真紀「何やら大変なことになつてゐみたいね……」

ユーノ「！？」

突然の人物の来訪に動搖するユーノ。

ジユエルシードの探索中に一度だけ出会った一般人。

背中から血を流して倒れている少年を見ても、全く取り乱していない少女にユーノは一種の不気味さを感じていた。

結標真紀は高町なのはの下に近付いて…

真紀「落ち着いて…今治療すれば…彼を助けられるか?」

真紀の言葉で落ち着きを取り戻したなのは。

真紀「だから…冷静になつて…ね?」

なのは「…はい」

真紀「クロノ…上条君をお願い」

クロノ「…了解」

クロノ・ハラオウンは上条当麻の手を取り、魔法陣に向けて移動しようとしていたが…

ビワイ…!

クロノ「ん?」

なのは「え?」

真紀「あいらり…」

ユーノ「え?」

リンティ「まあ…」

少年の右手に偶然、クロノのバリアジャケットが触れてしまい全て
破れてしまつた。

強制的に裸にされてしまったクロノ・ハラオウン。

クロノ「うわああああああああああ！」

なのは「さあああああーー。」

結界内に少年と少女の悲鳴が響き渡った。

封印されたジュエルシードを回収する結標真紀。

クロノは真紀から渡された上着を着て、その場に蹲つていた。

テスター・サとアルフ。

フェイト「当麻を助けなきや！！」

アルフ「駄目だよ！今出て行つても捕まるだけだ！」

「...でモーテル」

アルフ「トウマが何の為にフェイトをアイツの攻撃から庇つたと思つてるんだい！！」

フロイト「でも…」

アルフ「だから今は一回退却して、トウマを連中から助ける手段を考えなきゃ……」

フロイト「うん。『めんね』アルフ。」

アルフ「（トウマ…無事でこむくれよ…）」

アルフ「（当麻…）」

それから少し時間が経過して、時空管理局に移動した一同。上条当麻は右手のせいで、移動する事が不可能と思われたが、少年の服から落ちた手袋を発見した結標真紀により、魔法陣による転送を可能としたのであった。

早速医務室に運ばれる上条当麻。

リンディ・ハラオウンは高町なのはとユーノ・スクライアに事情を話してもうひとつしていたが…

真紀「リンディさん。上条君が田を覚ますまで待つてあげたほうがいいんじゃないかしら？」

リンディ「それもそうね。彼女達をお願いね」

真紀「了解」

ブリッジに移動するリンディとクロノ。

なのはとユーノに飲み物を渡す結標真紀。

真紀「大丈夫？」

なのは「はい…ありがとうございます…」

ユーノ「貴方は…」

真紀「この前出会った時は自己紹介していなかつたわね。結標真紀

よ

なのは「高町なのはです…」

ユーノ「ユーノ・スクライアと言います」

真紀「なのはちゃんにユーノ君ね」

なのは「あの…上条君は…大丈夫なんですか?」

真紀「ここでの医療スタッフは優秀だから大丈夫よ」

そつ言つて真紀はなのはの頭を優しく撫でた。

ユーノ「貴方は時空管理局の人なんですか?」

真紀「一応ね」

なのは「ユーノ君。時空管理局って?」

ユーノ「えへっと…」

真紀「貴方達が暮らしている世界のほかにも幾つもの世界があつて、
それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理しているのが時空
管理局って言えばいいのかしら?それで、今私達が居るのが数多く
ある次元世界を自由に移動するその為の船。通称、次元航行船よ」

なのは「?」

真紀の話している内容が殆ど理解出来ないなのは。

真紀「言葉足らずで」めんね

なのは「い…いえ…そんなことは…」

真紀「まあ…色々あつて疲れてるでしょうし…治療が終わるまで休みましょうか?」

なのは「はい…」

ブリッジに移動した後、医務室に向かったリンディ・ハラオウン。上条当麻の身体を見るリンディ。

リンディ「（酷いわね…）」

少年の身体には、無数の痣や刃物で刺した傷跡、鞭で叩かれた跡などがあった。

リンディ「（クロノの攻撃から身を挺して守っていたことから、この子は金髪の女の子と関係がある。それに…この子が右手で触った…バリアは簡単に破壊されたし…クロノのバリアジャケットも破かれただ…真紀は何か知っているのかしら?）」

医務室から出て行くリンディ・ハラオウン。

リンディ「（何にせよ…まずはあの子達から事情を聞くのが先ね…）

「

治療を終えた上条当麻の病室に移動する三人。

なのは「上条君…」

少年の手を握る少女。

心電図を確認するユーノ。

ユーノ「良かつた…容態は安定しているみたいだ…」

真紀「ごめんなさいね」

真紀に謝られてどう反応すればいいのか困っているユーノ。

当麻「う…あ…れ？高町さん？」

なのは「良かつた…」

うつすらと目に涙を浮かべているのはを見て、動搖する当麻。そんな少年を見て微笑む真紀とユーノ。

当麻「何で結標さんが？それに…」

真紀「その事については追々説明をせてもうらうわね」

端末を取り出して連絡を取る結標真紀。

真紀「うちの艦長がお話を伺いたって言つてるけど、大丈夫かしら？」

なのは「大丈夫です」

ユーノ「はい」

真紀「それじゃあ行きましょうか。上条君はここで大人しくしてね」

当麻「あの…僕もついていいですか？」

真紀「別に構わないと思つけど…大丈夫なの？」

なのは「上条君…無理しないほつが…」

ユーノ「二人の言つ通りだよ」

当麻「大丈夫だよ」

真紀「…分かつたわ。でも、具合が悪くなつたら直ぐに言つてね？」

当麻「はい。ありがとうございます」

医務室を出る少年少女達。

上条当麻に時空管理局と自分が此処に居る理由について簡単な説明を行う結標真紀。

途中でクロノ・ハラオウンに合流する一同。

上条当麻から数メートル離れて移動するクロノ。

そんな彼を見て苦笑いする一同。

クロノのバリアジャケットが破れたのは当麻が気を失っている時だった為に、何のことだか全く分からない少年だった。

クロノ「身体は痛むかい？」

当麻「い…いえ。それより…すいませんでした」

クロノ「気にしなくていい。事故とはいえ…僕にも民間人に手を出した責任がある」

当麻「ありがとうございます」

クロノ「ああ…そういうえば…いつまでもその格好といつのは窮屈だらう。バリアジャケットは解除しても平気だよ」

ここに来てバリアジャケットを解除していないことに気がつく高町なのは。

クロノに言われて普段の服装に戻した少女。

クロノ「君も元の姿に戻つてもいいんじゃないか?」

クロノの言葉が理解できずに首を傾げる当麻となのは。

ユーノ「ああ…そう言えば…そうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ユーノの姿がフレットから人間の姿に変化する。

ユーノ「はあ…なのはと当麻君にこの姿を見せるのは、久しぶりになるのかな?」

目の前の出来事を受け入れる事が出来ない一人。

高町なのはは数秒間硬直していて、上条当麻は自分の頬を抓つていた。

真紀「あらり…」

当麻「痛い……夢じゃ……ないんだ……」

なのは「ふええええええええ！」？

ユーノ「二人ともどうしたの！？」

様子のおかしい二人を心配したユーノが声を掛ける。

当麻「フェレットが…人間…人間が…フェレット…？」

なのは「ユーノ君で…はう…その…何…だ…だつて…嘘…！」？

激しく動搖する少年と少女。

クロノ「君達の間で何か見解の相違でもあつたのか？」

ユーノ「え…え…つと…僕達が最初に出会つた時つて…僕はこの姿
じや…」

なのは「違う違うー最初からフェレットだつたよ！」

当麻「高町さんの言つとおりだよ…」

ユーノ「うへん…」

当時の出来事を思い出すユーノ・スクライア。

ユーノ「あー…そそそ…そうだーごめん！」

急いでなのはに頭を下げるユーノ。

なのは「でも…ユーノ君が…あう…」

都合の悪いことでも思い出したのか真っ赤になる少女。混乱する少女を心配した少年が声を掛ける。

当麻「た…高町さん? 大丈夫?」

なのは「か…上条君…何でもないよ…」

当麻「なら…」

真紀「何があつたのかしら?」

なのは「な…何でもないです…」

真紀「そつ?」

事情を知らないメンバーは、高町なのはがここまで慌てる理由が全く分からなかつた。

クロノ「その…君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば早めに話を聞きたいんだけど…」

真紀「そつ言えばうな」

ユーノ「あ…は…はい」

当麻「すいません…」

なのは「じめんなさい……」

クロノ「では……」しかし「

クロノ・ハラオウンに案内された一同。

「ウイーンー

艦長が居ると思われる一室に入る少年少女達。

クロノ「艦長！来てもらいました！」

リンディ「ああ……お疲れ様。まあ……三人とも……ビーツバビーツバ……樂にして？」

当麻「は……はい」

なのは「失礼します」

リンディ・ハラオウンの居る部屋に入る少年少女達。
彼女が居た部屋には、間違つた日本文化を彷彿とさせる品々が溢れていた。

当麻「何でしそうじが室内に……」

なのは「いやほほ……」

リンディ「そう言えば……上条君は大丈夫なのかしら？」「

当麻「は…はい…大丈夫です」

リンディ「具合が悪くなつたら直ぐに言つてね?」

当麻「ありがとうございます」

リンディ「早速だけぢ…貴方達がロストロギアを集める目的を聞かせて貰つてもいいかしら?」

ユーノ「あ…はい」

リンディに事情を説明するユーノ。

リンディ「なるほど…そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だつたんですね」

ユーノ「それで…僕が回収しようつと…」

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど…同時に無謀でもある」

なのは「あの…ロストロギアって…何なんですか?」

ロストロギアといつ単語に聞き覚えの無い高町なのはが質問する。

リンディ「ああ…遺失世界の遺産つて言つても分からぬわね。えつと…次元世界の中には幾つもの世界があるの…それぞれに生まれ育つしていく世界」

当麻「次元世界…」

リンディ「それでね…その次元世界の中で極端に進化しそうな世界があるの」

なのは「進化しそうな世界…ですか?」

リンディ「ええ。技術や科学…進化しそうな世界を滅ぼしてしまって、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産…それらを総称して、ロストロギアと呼ぶのよ」

なのは「なるほど…」

当麻「あの…崩壊した世界に住んでいた人は?」

リンディ「残念だけど…」

当麻「…ですか」

なのは「上条君…」

クロノ「ロストロギアの使用方法は不明だが、使い方によつては、世界どころか次元世界さえ滅ぼすほどの力を持つ事もある危険な技術なんだ。だからこそ、然るべき手続きを持つて、然るべきに保管されていなければいけない品物なんだ」

リンディ「貴方達が探しているロストロギア…ジュエルシードは次元干涉型のエネルギー結晶体。幾つか集めて特定の方法で起動されば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合、次元断層さえ巻き起こす危険物…」

クロノ「君とあの黒衣の魔導師が戦っていた時に発生した振動と爆発。あれが次元震だよ」

当麻「…」

なのは「…」

クロノ「たつた一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まつた時の影響は計り知れない」

ユーノ「聞いたことがあります。旧暦462年の次元断層が起こった時の事を…」

クロノ「ああ…あれは酷いものだつた…隣接する平行世界が幾つも崩壊した…歴史に残る悲劇」

リンクディ「繰り返しちゃいけないわ…所で上条君？」

当麻「はい？」

リンクディ「金髪の子がジュエルシードを集める目的について何か知っていることは？」

当麻「え？」

アースラのモニターで一部始終を見ていたリンクディは、少年が黒衣の魔導師と何らかの関わりを持っていることを知っていた。

リンディ「彼女達が戦っていることから、金髪の少女がジュエルシードを集める目的は、高町さん達とは決定的に異なるのではなかしつ？」

当麻「それは…言えません」

クロノ「君は事の重大さが分かっているのか…？」

上条当麻の胸倉を掴むクロノ・ハラオウン。

予想外の事態に慌てる高町なのはとユーノ・スクライア。

リンディ「上条君…先程も説明した通り、ジュエルシードは非常に危険な代物なの。だから…もし彼女がジュエルシードの悪用を考えているのならば、私達は彼女を捕らえなければならないのよ？」

当麻「フェイトは…ジュエルシードの悪用なんか考えていません」

リンディ「そりは言つてもね…」

真紀「まあまあ…」上条君の言葉を信じまじょつよ

クロノ「真紀さん…？」

リンディ「真紀？」

真紀「それに上条君は病み上がりだから、あまり問い合わせないほうがいいと思いますけど」

リンディ「そう…ね」

クロノ「しかし……」

真紀「それに……何かあつたら私がなんとかするから……ね？」

クロノ「……分かりました」

結標真紀の言葉を聞いて渋々引き下がつたクロノ・ハラオウン。

リンディ「病み上がりなのに『めんなさいね』

当麻「いえ。悪いのは僕ですから……」

リンディ「お話は『んなと』いるね」

そつまつてリンディ・ハラオウンは、用意していた抹茶の中に砂糖を入れて搔き混ぜた。

当麻＆なのは「え？」

リンディ「どうかしたのかしら一人とも？」

当麻「抹茶は砂糖を入れるものじゃないんですけど……」

リンディ「そうなの？でも、美味しいわよ？」

なのは「うなんですか？」

リンディ「ええ」

真紀「まあ……それが普通の反応よね……」

当麻とののはの態度を見て苦笑する真紀。抹茶を飲み終えたリンディ・ハラオウン。

リンディ「これより、ロストロギア…ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

クロノ「君達は今回の事件を忘れて、それぞれの世界に戻つて元通りに暮らすといい」

なのは「でも…そんな…」

リンディ「上条君も金髪の子と言つておいてね？」

当麻「…はい」

クロノ「これは次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもうレベルの話じゃない」

ユーノ「でも…」

リンディ「まあ…急に言われても気持ちの整理もつかないでしきう？今夜一晩ゆっくり考えて、貴方達で話し合つてそれから決めましょう？」

クロノ「送つて行こ。元の場所でいいね？」

なのは「はい…」

クロノ・ハラオウンに連れられて部屋から出て行く三人。

部屋に残っているのはリンディーと真紀の一人だけだった。

リンディー「どうしてあの子を逃がしたの？」

真紀「まあ…気まぐれもあるけど…本音を言えばあまり時間を取られなくなかったんでね」

リンディー「何があったのかしら？」

真紀「学園都市の暗部が動き出したのよ」

リンディー「学園都市が…」

真紀「目的はおそれいりくジユエルシードと私の処分」

リンディー「彼等はロストロギアの危険性を認識していないの？」

真紀「認識はしてるでしょう。でも、それくらいで立ち止まる様なまともな人間は少ないのよ…それに…」

リンディー「それに？」

真紀「この世界の人間が『魔法』という力を手に入れた。本来、この世界に存在する筈のない力を」

リンディー「それってつまり…」

真紀「ええ…高町さんの存在が知られたら、彼女が狙われるかもしない」

リンディ「でも時空管理局の上層部が学園都市の上層部と交渉を…」

真紀「表向きは安全でショウガビ、彼女の安全が保証されるわけじゃない」

リンディ「全く…」この世界は本当に危険ね… クロノにはあまり関わって欲しくなかつたんだけど…」

真紀「そのためにも、出来るだけ早めにこの問題は解決しなければいけない」

リンディ「そうね… 真紀… 聞きたい事があるんだけど…」

真紀「何かしら…」

リンディ「上条君の謎の力についてなんだけど…」

真紀「あれつて多分… 原石じやないかしら…」

リンディ「原石？」

真紀「能力者についての説明はしたわよね？」

リンディ「ええ」

真紀「原石つて言つのは、人じやなくて天然の能力者なのよ」

リンディ「脳の開発を必要としない」といふとかしら…」

真紀「私も詳しい」とは分からんけどね… それに、上条君の

力は魔術かもしけない」

リンディ「魔術…」

真紀「一度しか見たこと無いから、なんともいえないんだけどね…」

リンディ「問題が山積みで頭が痛いわね…」

真紀「本当にね…」

その頃、クロノに公園まで送つてもらった少年少女達。

なのは「色々な事があつたね…」

当麻「うん」

ゴーノ「一人の前でずっとフロレットだつたことを忘れていたよ…
二人とも…やつぱり怒つてたりするかな?」

なのは「怒つてないよ」

当麻「そんなことないよ」

ゴーノ「ありがと」

当麻「えつと…同じ年くらい?」

ゴーノ「うん」

なのは「とりあえず帰らうか?」

当麻「そりだね」

ユーノ「このままの姿じゃ色々問題だから、フュレットになつてお
くね」

フュレットに変化したユーノは、なのはの肩に乗つた。

なのは「それじゃあ上条君…またね」

当麻「うん…あれ？」

突如、視界が歪んだ上条当麻はそのまま地面に倒れこんだ。

ユーノ「当麻君！？」

少年の額を触る少女。

なのは「凄い熱…ユーノ君…」

ユーノ「なのはの家に運ぼう…」

なのは「うん…」

第23話 それぞれの決意

『高町家』

上条当麻を自宅まで運んだ高町なのはとコーノ・スクライア。客間に少年を運んだ少女。

家族に事情を説明することになったなのは。

士郎「そうだったのか…」

恭也「公園を歩いていたなのはが、彼が倒れていたのを発見したと…」

美由紀「大丈夫なのかしら…」

桃子「今は落ち着いているわよ

なのは「良かつた…」

桃子「この前も怪我していたし、上条君も大変ね…」

なのは「うん…」

士郎「浜面君も不審者に襲われていたし… いじのといじの色々変な事が起きてるね…」

美由紀「なのは。上条君を見てたらどう?」

桃子「美由紀の言う通りね」

なのは「うそ」

客間に移動したなのは。

なのは「（上条君..どうして..）こんなになるまで無茶してたの?」

熱で倒れるまど、フォイト・テスター・ロッサのジコノルシードの搜索を手伝っていた上条当麻。

少年が寝言で何か言つてこる事に気付いたなのは耳を傾ける。

当麻「父さん..母さん..」

なのは「（うつ病では..）上条君の..お父さんとお母さん..」

上条当麻は両親を事故で失つてこる事を思い出す高町なのは。
もし、彼に両親が居たならばここまで無茶は許せなかっただろう。

当麻「う..ん?」

なのは「気が付いた?」

当麻「あれ..」(うつ病..)

なのは「私の家だよ」

当麻「また..迷惑を掛けちゃったんだ..」

なのは「そんなことないよ」

当麻「でも……」

なのは「無理しないで……」

当麻の言葉を遮るなのは。

当麻「……」

なのは「上条君……フロイトちゃんの事なんだけビ……」

当麻「ビビったの？」

なのは「フロイトちゃんはお母さんの為にジユーハルシードを集めてるわ……」

当麻「……うそ」

なのは「上条君はフロイトちゃんのお母さんがジユーハルシードを集めている約って知ってるの？」

当麻「僕もやのじでひいていた」

なのは「やつ……でも……何で……」

何故、フロイトはあれこまで悲しい表情をするのか。

何故、彼女の母親がジユーハルシードの搜索を直接行わないのか。

少女の疑問は消える」とが無かった。

当麻「フロイトは……ジユーハルシードの悪用なんか考えていない……それだけは確かだよ」

なのは「うん…」

ドアの隙間から客間に入つてくるユーノ・スクライア。

ユーノ「目が覚めたんだね」

当麻「ユーノ君もごめんね…迷惑掛けで…」

ユーノ「僕はここの人じゃないから何とも言えないけど…気にしないで…」

当麻「…ありがとう」

ユーノ「それで…時空管理局についての話なんだけど…」

なのは「私は…協力したいと思う。もう…民間人とかじゃなくて…私は自分の意思でジュエルシードを回収したいから…」

ユーノ「…分かったよ。それで…当麻君は？」

当麻「僕は…フェイントを放つておくなんて出来ない。だから…高町さん達には悪いけど…」

なのは「大丈夫だよ」

ユーノ「当麻君はそつぱつと思つていたよ」

当麻「二人とも…」

なのは「だけ…上条君は無理しちゃ黙だからね」

ユーノ「君はなのはと違つて魔法の力は持つてないからね」

当麻「うん」

桃子「なのはー！」

なのは「はーいーちょっと待つててねー！」

ユーノ「僕も時空管理局に連絡するからー田、なのはの部屋に戻るよ」

上条当麻だけになつた密間。

少年はポケットから一つの写真を取り出す。

当麻「父さん…母さん…」

『アースワ』

先程の高町なのはとフュイト・テスタークロッサの戦闘映像を眺めていたエイミー。

エイミー「凄いやー。ビックリもトリプルAクラスの魔導師だよー。」

クロノ「ああ…」

エイミー「うちの白い服の子は、クロノ君の好みっぽい可愛い子だし~」

クロノ「H... Hイミイー！ そんな事はビリでもいいんだよ！」

エイミィ「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ？ 真紀さんが良い例じゃないか」

クロノ「確かに… クロノ君の方が魔力量が多いのに、クロノ君が模擬戦でボロ負けしちゃったからね～」

クロノ「それを言つなよ…」
エイミィ「まあ… それはともかく、クロノ君を信用してるよ？ 何たってアースラの切り札なんだから」

クロノ「切り札は真紀さんだらう…」

エイミィ「それにしても…」

不満げな顔をする彼女に疑問を感じたクロノ。

クロノ「どうした？」

エイミィ「上条君の事なんだけど…」

クロノ「彼がどうかしたのか？」

エイミィ「彼… 一般人の筈なのよね？」

クロノ「そ่งだが？」

エイミィ「明らかに一般人とは異なる反応が見られるんだけど……魔導師の様な反応でもないし……」

クロノ「どういづ反応なんだ？」

エイミィ「何も計測出来ないと言えぱいいのかしら？魔法を用いたから、計測できぬ筈はないんだけど……」

クロノ「……」

上条当麻が自身のバリアジャケットに触れた際に、魔力で構成されたバリアジャケットが破かれた事を思い出すクロノ。

クロノ「一体何者なんだ？」

エイミィ「あ……」

ブリッジで話しているクロノとエイミィだったが、その最中にリンクディが入室してきた。

エイミィ「あ……艦長！」

リンクディ「ああ……一人のデータね？」

エイミィ「はい」

握っている椅子に少しばかり力を込めるリンクディ・ハラオウン。

リンディイ「（学園都市の暗部と出会わなければいいんだナビ…）」

ハイ//イ「艦長？」

リンディイ「何でもないわ。それにしても…凄い子達ね」

クロノ「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれれば次元震が起きるもの頷ける」

リンディイ「あの子達…なのはさんとゴーノ君がジュエルシードを集めている理由は分かつたけど、いつの黒い服の子は何が目的のか…かしらね？」

クロノ「随分と必死な様子だった。何か余程強い目的があるのか…やはり…彼から話を聞いた方が…」

リンディイ「彼が素直に話してくれるとは思えないわ」

ハイ//イ「そうですね…」

リンディイ「田的ね…（まだ小さな子なのに…普通に育つていればまだ母親に甘えていたい年頃でしょうに…）」

上条当麻の身体に刻まれた無数の傷を思い出すリンディイ・ハラオウン。

リンディイ「（きっと…普通では…ないのよね…）」

クロノ「上条当麻が黒衣の魔導師と関わりがあるのは確かなんだ。」

「ハイハイ、彼について調べておいてくれ

『ハイハイ「了解」

『マンション』

フュイト・テスター・サとアルフはマンションに帰宅していた。
ちなみに絹旗最愛はフュイト達が忙しいのと、ハ神はやての家に
世話になっていた。

アルフ「駄目だよ…時空管理局まで出てきたんじや…もうひどいも
ならないよ…逃げようよ…三人で…どうかこと…」

フュイト「それは…駄目だよ」

アルフ「だつて！雑魚クラスならともかくアイツラは一流の魔導師
だ！トウマだつて捕まえられたままだし、本気で捜査されたらこ
だつて…何時までバレずにいられるか…あの鬼婆…あんたの母さん
だって訳分かんない事言つし、フュイトとトウマに酷いことするし
だつて…」

フュイト「母さんの事…悪く言わないで…」

アルフ「言つよーだつてアタシ…フュイトの事が心配なんだー！フ
ュイトが悲しんでいると、アタシの胸も千切れそうに痛いんだよー！フ
ュイトが泣きそうだと、アタシも目と鼻の奥がツンとして、どうし
ょうもなくなるんだー！フュイトが泣くのも悲しむのも…アタシ…嫌
なんだよー！」

フュイト「私とアルフは、少しだけ精神リンクしてるからね…」

めんね。アルフが痛いなら……私も悲しまないし、泣かないよ……」

アルフ「アタシはフェイトに笑つて、幸せになつてもらいたいだけなんだ……何で、何で分かつてくれないんだよ……トウマの気持ちはどうあるんだよ……」

フェイト「う……」

アルフ「トウマだって、フェイトの事を心配してゐるんだよ……アイツの攻撃からフェイトを身を挺して庇つたり、どんなに酷い怪我しても他人の事を優先して……だから、フェイトが無茶したらトウマは自分を責めるじゃないか！」

他人の痛みを自分の痛みとして受け取る少年。
上条当麻と過ごしてきたフェイト・テスタロッサとアルフは少年の本質を理解していた。

フェイト「ありがとうアルフ……でもね……私……母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんの為だけじゃない……きっと……自分の為……だからもう少し……後もう少しだから……私と一緒に頑張ってくれる？……」

アルフ「約束して。絶対に無茶しないって、そしてあの人いいなりじゃなくて、フェイトはフェイトの為に、自分の為に頑張るつて……そしたら、アタシは必ずフェイトを守るから……」

フェイト「うん……」

アルフ「そのためにも、トウマは時空管理局から連れ戻さなくちゃ
！」

「フュイト」（当麻…お願ひ…）

上条当麻を時空管理局から連れ戻すために作戦を練るフュイトとアールフだった。

『高町家』

ユーノ「だから、僕もなのはそもそも協力させて頂きたい」と…」

クロノ「協力ねえ…」

ユーノ「僕はともかく…なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘、どちらにしてもそちらとしては便利に使える筈です」

リンクティ「うーん…色々考えてますね。まあ…それなりいでしょう」

クロノ「か…かあさ…艦長!…?」

リンクティ「手伝つてもらいましょう。一いつ切ちとしても切り札は温存したいもの。ね…クロノ執務官?」

クロノ「…はい」

リンクティ「条件は二つよ」

ユーノ「条件とは?」

リンクティ「両脇とも身柄を一時、時空管理局の預かりとする」と。

それから、指示を必ず守る」。よくつて？」

ユーノ「分かりました」

クロノ「上条玲麻の返答は？」

ユーノ「彼は」のまま普段の生活に戻るそうです

正直に金髪の少女に協力すると「」と話をせば、最悪、上条玲麻が捕まってしまう危険性があるため、ユーノ・スクライアは嘘をつくことに決めた。

リンクティ「やべ…」

ユーノが時空管理局に連絡を行っている頃、高町なのは母親である高町桃子の食器片付けの手伝いを行っていた。
片付けの最中に念話をするなのはとユーノ。

ユーノ「（なのは。決まったよ）」

なのは「（うふ。ありがとうユーノ君）」

なのはがユーノと念話をしている最中に裏山に出掛けた高町士郎と高町恭也、そして高町美由紀も一人の見学として彼等と一緒に出掛けた。

桃子「なのは。上条君は田を覚ましたかしら？」

なのは「うふ」

桃子「良かつたわね…何だか凄く辛そうだから」

なのは「辛そう?」

桃子「一人で全て抱え込んでいそうだから」

なのは「抱え込む…」

桃子「何かがなのはに似ているのかしらね?」

なのは「そうかな?」

桃子「何だか保護欲を搔き立てられる所も似ているかな?」

なのは「お母さん…ちょっと話があるけどいいかな?」

桃子「?」

食器片づけが終わり、ソファーに座るのはと桃子。

これまでの出来事を語るのは。

ユーノ・スクライアからの出会いから今まで起きた出来事を、そして家を空けなければいけないということ。

もちろん、魔法やユーノの正体について明かす訳にはいかなかつたので、そこは内緒にしていたが…

なのは「もしかしたら…危ないことなのかも知れないけど…大切な友達と一緒に始めたこと、最後までやり通したいの」

桃子「そのやりたい」とには上条君も関わっているのね?」

なのは「うふ…心配掛けちゃうかもしれないけど…」

桃子「それはもう…何時だつて心配よ。お母さんお母さんだから、なのはの事が凄く心配。だけどね、なのはがどうりとするかまだ迷つてゐるなり、危ない」と駄菓子屋へ向つて叫び、でも…わづ決めちやつてるんでしょ。」

なのは「うふ…」

桃子「友達と始めた事、最後までやり通すつて、なのはが出来たその女の子ともう一度話をじてみたいつて…」

なのは「うふ」

桃子「じゃあ…こつへりっしゃー。後悔しないように。ね父さんとお兄ちゃんはお母さんがちやんと説得したことある」

なのは「うふ。あつがどひめむかわさー。」

桃子「でも、出発するのを明日にしておきたくなー。上條君も頑張るんだし」

なのは「こまはは…やうだね」

密間に移動するなのは。

部屋に入る前に、高町なのはは上條当麻が何かを見てくる」といふ付く。

なのは「（あれって…眞理…なのかな？）」

客間にに入るなのは「少しばかり動搖する当麻。

慌てて写真を隠そうとする少年。

普段はあまり見られない姿に思わず顔が緩む少女。

なのは「上条君。何を見ていたの?」

当麻「えっと……これは……その……」

なのは「見せてもらつてもいいかな?」

当麻「……うん」

若干照れながら少女に写真を見る高町なのは。
渡された写真を見る高町なのは。

その写真に写っていたのは、優しげな笑顔を浮かべる男性と綺麗な
笑顔の女性、今では考えられないほど笑顔を浮かべている上条当
麻の姿だった。

なのは「これって……上条君のお父さんと……お母さん……なの?」

当麻「……うん」

頭を搔きながらなのはの問へに答へる当麻。

なのは「とても優しそうだね」

当麻「あ……ありがとうーーーー」

なのは「はい。ありがとね上条君」

当麻「うん」

なのは「あのね…さつきコーノ君から連絡があつたんだけど…時空管理局の人達が協力することを認めてくれたって」

当麻「そうなんだ」

なのは「でも…何だか私とコーノ君は一時的に時空管理局に行かな
くちゃ行けないんだ」

当麻「大丈夫?」

なのは「大丈夫だよ」

当麻「無理しないでね…」

なのは「上条君がそれを言ひやめ目だよ」

当麻「そんな」とないと思つけど…」

なのは「やうだよ」クスクス

当麻「ははは…」

なのは「明日から時空管理局に行かなきゃいけないんだ」

当麻「そつか…氣をつけ」

なのは「うん…それじゃあ上条君…おやすみ」

当麻「おやすみなさい」

それぞれの物語を進める為に眠りこなつて上条当麻と高町なのはだつた。

『時の庭園内』

空中に浮いていた数個のジュエルシードを眺めるプレシア・テスター・ロッサ。

プレシア「早く…早くなさい…フェイト…！約束の地が…アルハザードが待ってるの…私の…私達の救いの地が…」

第24話 緊急事態

翌日、高町なのはとユーノ・スクライアは時空管理局へ向かい、上条当麻はマンションに帰宅した。

『マンション』

アルフ「突入方法は危険だけど…それしか手段が無いか…」

フュイト「うん…だけど…当麻が待ってる」

アルフ「それじゃ行こうか…！」

上条当麻を時空管理局から連れ戻す計画を練ったフュイトとアルフは今すぐ行動を起こそうとしていた。

ピンポーン！

アルフ「何だ？」

フュイト「もしかして…時空管理局が…」

アルフ「幾らなんでも早過ぎると想ひたけど…とにかくアタシが出るよ」

フュイト「アルフ…気をつけてね

恐る恐るドアノブを捻ってドアの前に居る人物を確認するアルフ。
そこに居たのは…

アルフ「トウ...マ...」

当麻「遅くなつて」めん

フェイト「当麻なの？」

時空管理局に拘束されている篠の少年がこの場に居る事に動搖を隠せないフェイトとアルフ。

当麻「うん」

アルフ「どうやつて逃げ出してきたんだい！？」

当麻「話を聞かれただけで捕まつた訳じゃないから...」

フェイト「良かつた...」

アルフ「何だよそれ...」

力が抜けてフェイトとアルフはその場にへたり込んだ。

当麻「ど...どうしたの二人ともー？」

フェイト「ちよつとね...」

アルフ「トウマを助ける為にフェイトと色々な作戦を練つて、今から行動に移すつもりだったんだよ」

当麻「...めんなさい」

フェイト「全く…当麻は心配ばかり掛けて…でも無事だつたんだから良かつたよ」

当麻「ありがと」フェイト」

嬉しそうな表情を見せるフェイトとアルフに釣られて自然と笑顔になる当麻。

アルフ「トウマ…その手に持つてるのは何だい？」

当麻「ここ最近色々忙しかつたからね…今日はハンバーグを作ろつかなつて…」

アルフ「ヨッシャアアアー！」

フェイト「ア…アルフ！？」

当麻「どうしたの！？」

アルフ「これがが喜ばずにいられるかい…！ハンバーグが食べれるんだからや…！」

上条当麻が二人に料理を振舞つていた時期に、アルフは少年の作ったハンバーグが一番のお気に入りとなつていた。

当麻「それと…翠屋のケーキを貰つたんだけど…」

アルフ「それって…あの滅茶苦茶美味いやつかい！？」

当麻「そうだよ」

フェイト「少しは落ち着いてアルフ…」

テンションが非常に上がっているアルフを苦笑いしながら落ち着かせるフェイト。

当麻「それじゃあ早速作り始めるよ」

アルフ「はい！」

フエイト「あの…当麻。ちょっとといいかな?」

当麻「どうしたの？」

フロイド、今度私は料理を教えて貰いたいんだけど……」「

当麻一僕でよければ

「アート」ありがとうございます

上条当麻が作り終えたハンバーグを、凄まじい速度で食べるアルフ
とそんな彼女を微笑みながら見るフェイエト。

当麻「（フロイトは何を言つたつてジオエルシードを集める」とをやめないけど…フレシアはフロイトの事を…）」

フェイト・テスタークサは母親であるプレシア・テスタークサの為にジユエルシードを集めている。

しかし、フュイトの想いとは裏腹にプレシアは彼女の事を欠片たり

とも愛していない。

そのことについて考えていた上条当麻。

怪訝な表情をしている少年を不思議に思った少女。

フロイト「どうしたの当麻。 もしかして… 焼けてなかつたの?」

アルフ「それならアタシが食べよつかー?」

当麻「違ひつよ…」

彼女の笑顔を守る為に静かに拳を握る上条当麻だった。

『八神家』

一方その頃、絹旗最愛は八神はやでの皿せにて昼食を取っていた。

最愛「これは超美味しいですよーー!」

はやて「超美味しいなんて嬉しい」と喜びてくれるな~

年下の少女とは思えないほどの速度で料理を食べ進める最愛の姿に、豪快な食べっぷりだと感心していたはやて。

最愛「(+)馳走様でした!!」

はやて「喜んでくれたよう向よつちー!」

最愛「でも…迷惑じゃなつたですか?」

はやて「そんなことないで? 最愛ちゃんが来てから私も楽しんだる

からな

『最愛「ありがと」「わざとめす」』

はやて「それにしても…上条君とフロイドやんとアルフは今頃何を
しとるんやんな?」

『最愛「何だか色々忙しことか忙つてしましましたナビ…」』

はやて「うへん…」

『最愛「もしかして…デートですかね?』

はやて「…?」

『最愛「あのー一人は年も近いみたいでし…」』

はやて「… そりなんかな?」

『最愛「それは分かりませんけど…」』

はやて「 もしかしたら…ふふふ…」

いきなり「ス黒いオーラ」を放ち始めたハ神はやてに恐怖を覚える絹
旗最愛だった。

『アースワ』

リンク「どうわけで…本田の時を以って、本艦全クルーの任は
リストロギア…ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また、

本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり結界魔導師でもある」から……」

ユーノ「はい！ユーノ・スクライアです！」

リングティ「それから…彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

なのは「た…高町なのはです」

リンクティー以上2名が臨時局員の扱いで事態に当たってくれます

なのは&ゴーパ「よろしくお願ひします」

ケロノ・ハテオウンが自分を見ている事に気付いた高町のは

クロノの頬が赤く染まり軽く慌てる。

真紀（なみ）と並んで最も有名な「サムライ」

二十一

ケノの態度に若干不機嫌になるトトハ

リソースライセンス（著作権）

簡単な自己紹介が終了してプリッジに呼び出されたユーノとなのは。

リンクディ「じゃあここからは、ジユエルシードの位置特定はこちちらでするわ。場所が分かったら現地に向かつてもらいます」

なのは＆ゴーノ「はい！－」

エイミー「艦長。お茶です」

リンディ「ありがと」

エイミーから渡されたお茶の中に大量の砂糖とシロップを入れるリンディ。

その姿を見てドン引きする高町なのは。

リンディ「ん～美味しいわね～ そりゃあはさん。学校の方は大丈夫なのかしら？」

なのは「あ……はい。家族と友達には説明してありますので……」

リンディ「そ、う……」

真紀「なのはちゃん。ちょっとといいかな～？」

ブリッジに居た結標真紀が声を掛ける。

なのは「は……はい」

真紀「エイミーも大丈夫？」

エイミー「ええっと……」

リンディ「大丈夫よエイミー。真紀についていつてあげなさい」

エイミー「は……はい」

真紀「ありがとうございます」艦長「…………」

リンディ「行ってらっしゃい」――

真紀が考へてゐることを察したリンディが笑顔で少女達を見送つた。

二人に連れられてブリッジから出て行く高町なのは。

ユーノ「僕はついて行つた方がいいのかな?」

リンディ「野暮な真似はしちゃ駄目よ」

ユーノ「?」

リンディの言つた言葉の意味が分からず首を傾げるユーノ・スクラ
イアだった。

アースラの休憩室と思われる場所に來ていた少女達。

なのは「それで……お話つて?」

真紀「いや、なのはちゃんがどんな経緯で魔法に関わるようになつ
たのか詳しく知りたくてね~」

エイミィ「あ……それ私も気になる」

田を輝かせて少女に質問する真紀とエイミィ。

なのは「え……と……その……」

戸惑いながらもユーノと出会った経緯を語る高町なのは。

真紀一
ナミコト

「なるほどなるほど……」ナナニヤ

なのは「この前だって…同じ年位の男の子と女の子がジュエルシー
ドの暴走によつて巻き込まれた時も…全力で怪物に立ち向かつて…
ヒーローみたいで…／＼」

コーンと出会つた経緯ではなく、上条当麻についての話をする少女。

真紀「ありがとうございます高町さん」――――

「（クロノ君…上条君は強敵だよ…）」

なのは「は…は…」

真紀「……とにかくせつめつ……なのですかんせう條約が気になります」
「うう」とね?」

なのは「ええと… あの… めり… ーーー」

真紀「青春してるわねえ…」――――

子萌「…セツコツわはで、高町ちやんは、家庭の事情で向田か学校をお休みする事なのですよ~」

アリサ「…」

子萌「でも、病気や怪我や不幸な事があつてお休みするとこつわけではないとの事ですから、心配しなくても大丈夫なのですよ~」

仕上「先生へ上条は?」

子萌「それが…上条ちやんは全く連絡が無いんですけど、どうしたらいいんでしようかね~」

無断で小学校を休んだ上条当麻を心配する円詠子萌。

子萌「…とにかく、高町ちやんがお休みの間…ノートとパソコンとほんたう…」

アリサ「私が届けます!~」

子萌「アリサちやん…それじゃあよろしくなのですよ~」

アリサ「はい!~」

子萌「上条ちやんは?と…」

仕上「それなら俺がやる!~」

子萌「お願ひしますね浜面ひやん。さて!それじゃあホームルーム

を始めましょう!」

すずか「(なのなちやんと上条君...元気でいるかな...)」

小学校に来ていない一人を心配する円村すずかだった。

高町なのはとユーノ・スクライアが時空管理局に来てから数日が過ぎた。ジユエルシードの暴走によつて生み出された怪物と戦う一人。

ユーノ「捕まえた! なのは!」

なのは「うん!」

『Sealing mode . Set up .

『Stand by . Ready .』

なのは「リリカル! マジカル! ジュエルシード! シリアル8! 封印! ...」

『Sealing

封印されたジュエルシードを回収するのは。

『Received Number 8』

局員「終了です。ジュエルシードナンバー8を無事確保、おつかれさあ...なのはちゃんとユーノ君」

なのは「はい」

局員「ゲートを作るね。そこで待つて」

二人の戦闘の様子をアースラのモニターを通して見ていたリンディ・ハラオウン。

リンディ「ん…一人とも中々優秀だわ。このままで欲しくらいかも…」

その頃、エイミィはフェイト・テスターについて調べていた。

エイミィ「この黒い服の子…フェイトって言つてたっけ?」

クロノ「フェイト・テスター…かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

エイミィ「え? そうなの?」

クロノ「大分前の話だよ。ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師…」

エイミィ「その人の関係者?」

クロノ「さあね…本名とは限らない。それよりエイミィ…上条当麻については…」

エイミィ「彼について分かつた情報は、何の変哲もない民間人というだけかしら。それと…半年前に両親を事故で失っているわね

…

クロノ「そつか…しかし…」

魔法をいとも簡単に打ち破る右手。そのような力を持っている少年が只の一般人であるなどクロノは信じることが出来なかつた。

クロノ「黒衣の魔導師は見つけられたか?」

エイミィ「あ～あ～やっぱり駄目だ…見つからない。フェイトちゃんてば…よっぽど高性能のジャマー結界を使つていてるみたい…」

クロノ「上条当麻の身柄を確保して話を伺いたい所だが、彼の右手の特性上、恐らく居場所を特定することが出来ないからね…」

そう言ってクロノはモニターに映し出された狼形態のアルフの姿を見る。

クロノ「使い魔の犬…多分…コイツがサポートしているんだ」

エイミィ「おかげでもう…2個もこいつが発見したジユエルシードを奪われちゃつてる…」

クロノ「しつかし探して捕捉してくれ。頼りにしてるんだから」

エイミィ「はいはい…」

アースラの廊下を移動しているのはとユーノ。

なのは「フヒトイトちやん達現われないね…」

ゴーノ「うさ…」うさとま別にジユエルシードを集めてこつている
みたいだけど…」「…

なのは「うさ…」

その頃、何処かの湖らじしき場所にフュイト・テスタークロッサ達は居た。

アルフ「フュイト…トウマ…駄目だ…空振りみたいだ…」

フュイト「うー…当麻？」

顔色の優れない少年を心配した少女が声を掛ける。

当麻「何でもないよ

アルフ「トウマ…」

アルフが思い出すのは数日前の出来事。

上条当麻がフレシア・テスタークロッサに用があるとアルフに話して、
フェイトに無断で向かった時の事。

何の用事があるのか全く分からぬアルフだったが、ボロボロにな
つて出て来た少年の姿を見たアルフは、再びフレシアが少年を傷付
けたことを理解する。

フレシアに少年を傷付けた理由について問い合わせたアルフは、少年
が少女の代わりにお仕置きを受けているという事実を知ってしまう。

アルフ「トウマ…うそそんなことを…」

当麻「フュイトには内緒にしておいてね…」フュイトがこのことを知

つたらきっと自分を責めるから…」

アルフ「でもアンタはどうするんだい！？」

当麻「大丈夫だよ…慣れてるから…」

アルフ「慣れてるって…！」

当麻「僕は…大丈夫だから…」

アルフ「（こ）のままじゃ…いけない…トウマもフュイトも…あの人
の道具じゃないんだ…。」ギリ

フュイト「当麻…あまり無理しないでね？」

当麻「うん…ありがとうフュイト」

アルフ「…やつぱ…向ひに見つかなこよひに…隠れて探すのは
中々難しいよ」

フュイト「うん…でも…もう少し頑張る？？」

『アースラ』

高町なのはとユーノ・スクライアがアースラに移つてから10日が
経つた。

なのは達が手に入れたジュエルシードはシリアル8とシリアル1-2
の計2個。

フェイド達が手に入れたのがシリアル2とシリアル5の計2個。
ブリッジで話していたクロノとリンク。

クロノ「あと6個か…」

リンディ「残り6個…見当たらないわね~」

クロノ「搜索範囲を地上以外まで広げています。海が近いので、もしかするとその中かも…例の黒い服の子と合わせてエイミィが搜索してくれています」

リンディ「そり…」

高町なのは用意されていた部屋で話しているなはとゴーノ。

なのは「今日も空振りだったね~」

ゴーノ「うん…もしかしたら結構長く掛かるかもね…なのは…『めんね…寂しくない?』

なのは「別に…ちつとも寂しくないよ。ゴーノ君と一緒に、一人ぼっちでも結構平気」

ゴーノ「…」

なのは「小さい頃はよく一人だったから、私がまだ小さい頃にね、お父さんが仕事で大怪我しちゃって、暫くベッドから動けなかつたことがあるの…」

ゴーノ「そうだったんだ…」

なのは「喫茶店も始めたばかりで今ほど人気が無かったから、お母

さんとお兄ちやんはこいつずっと忙しくて、お姉ちやんはずっとお父さんの看病で、だから結構慣れてるの…」

ユーノ「そつか…」

なのは「そつと言えば私…ユーノ君の家族の事とかあまり知らないね」

ユーノ「ああ…僕は元々一人だったから」

なのは「そつか…」

ユーノ「両親は居なかつたんだけど、部族の皆に育ててもらつたから、だからスクライアの一族皆が僕に家族なんだ」

なのは「そつか…ユーノ君…色々片付けたらもつと沢山…色々な話しそうね?」

ユーノ「うん。色々片付いたらね…」

なのは「フヒトイちやんや上条君と一緒に歸れね」

ユーノ「そつか…」

なのは（色々片付いたら…ジュエルシードの問題が片付いたら…きっと私達は…）

ビー…ビー…！

アースラ内に突如、響き渡る警笛音。

局員「エマージェンシー！捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感じ！」

海上のモニターを見ていたエイミー。

エイミー「な…なんてことしてるのあの子達…？」

海上で大規模な魔法陣を展開するフェイトと彼女をサポートするアルフと当麻。

フェイト「アルカス…クルタス…エイギアス…煌めきたる天神よ、今導きの元、降り来たれ。バルエル…ザルエル…ブラウゼル」

魔法陣から大量の雷が放出されていた。

アルフ（ジュエルシードは多分…海の中にあるから、海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させる。

そして位置を特定する。アタシもサポートしてるけど…そのプランは間違つてないけど…でも…フェイト…）

当麻「フェイト…」

フェイト「撃つは雷、響くは豪雷。アルカス…クルタス…エイギアス…！」

フェイトの頭上に巨大な眼が出現する。
そして、彼女の周囲に大量の眼が現われる。

フェイト「はあああ…！」

彼女の周囲の眼から大量の雷が海に降り注ぐ。海に打ち込まれた魔力流に反応したジューエルシードがその場に出現した。

フェイト「はあ…はあ…」

アルフの手助けがあつたとはいえ相当消耗しているフェイト。

フェイト「見つけた…残り6個…！」

アルフ（こんだけの魔力を打ち込んで…更に全てを封印して…）この…アタシがサポートしても…フェイトの魔力でも絶対に限界を超える…）

フェイト「アルフ！空間結界を…当麻はサポートをお願い…」

アルフ「ああ！任せといて…」

当麻「分かった！」

アルフは上条当麻とフェイト・テスタークロッサの姿を見る。

アルフ（だから…誰が来ようが…何が起きようが…アタシが絶対…フェイトとトウマを守つてやる…）

フェイト「行くよ…バルティックシユ…頑張ろつ…！」

第25話 造られた生命（前書き）

何とか年末に投下することが出来ました。
来年もよろしくお願いします。

第25話 造られた生命

『アースラ』

ブリッジのモニターで海上の様子を眺めていたアースラのメンバー達。

モニターにはフュイト・テスターと彼女の使い魔であるアルフ、民間人である筈の上条当麻の姿があつた。

「…」「どうして上条君が…」

クロノ「元の生活に戻ると言つたのは嘘だつたんだろう?…」

真紀「上条君については後回しでいいでしょ?それより今は…」

6個のジュエルカードを封印しようとしているフュイトに注目するスタッフ達。

リンディ「何とも呆れた無茶をする子だわ」

クロノ「無謀ですね……間違いなく自滅します。それに、あれは個人の出せる魔力の限界を超えてくる」

真紀「いくらなんでも一気に6個は危険でしょうに…」

ブリッジに到着した高町なのはとユーノ・スクライア。

なのは「フュイトちやんに上条君…」

モニターの映像を見た少女は動搖していた。

なのは「あの！ 私急いで現場に！！」

クロノ「その必要はないよ。放つておけばあの子は自滅する」

なのは「え…？」

クロノ「仮に彼女達が自滅しなかつた所で、力を失った所を叩けばいい」

なのは「でも！」

クロノ「今の内に捕獲の準備を！」

局員「了解！」

海上ではフェイト達が暴走したジュエルシードの魔力流に襲われていた。

フェイト「く…」

アルフ「フェイトー！」

魔力流に襲い掛かられて体力を消耗するフェイト。

当麻「アルフ！僕をフェイトの近くにー！」

アルフ「分かつたー！」

アルフに襲い掛かる魔力流を右手で打ち消しながら、上条当麻は少女の隣まで移動することに成功した。

フェイトに襲い掛かる魔力流を右手で破壊する当麻。

当麻「フェイト…大丈夫？」

フェイト「なんとか…ありがとう当麻…」

アルフ「でも…」のままじや…」

一時的に危機を脱した少年少女達だったが、危機的状況であることに変わりは無い。

更に体力を消耗していた彼女達は徐々に動きが鈍くなっていた。その様子をモニターから見ていたアースラのスタッフ達。

リンディ「私達は常に最善の選択をしなければいけないの。残酷に見えるかもしだいけど、これが現実…」

真紀「それが組織なのよ

なのは「でも…」

ユーノ「（行つて！）」

念話でユーノに話しかけられるなのは。

ユーノ「（なのはー行つて！僕がゲートを開くから、行つてあの子達を！）」

なのは「（でもユーノ君ー私はあの子と…フェイトちゃんと話をし

たいけどユーノ君とは……」

ユーノ「（確かに関係ないかも知れない……だけど、僕はなのはが困つてゐなら力になりたい。なのは達が僕してくれたみたいに……）」

ゲートが勝手に起動して同様を隠せないスタッフ達。

クロノ「君は！」

ゲートに向けて駆け出した高町なのは。
クロノがなのはを追い駆けるが、ユーノが両手を広げて少年の前に立ち塞がつた。

二人の勝手な行いに怒りを露にするクロノ・ハラオウン。

転送用の魔法陣まで移動した彼女は……

なのは「じめんなさい……高町なのは……指示を無視して勝手な行動をとります……！」

ユーノ「あの子の結界内へ……転送！」

フェイト達が居ると思わしき世界に転移した少女は上空に居た。

なのは「行くよ……レイジングハート！」

待機状態の『レイジングハート』を取り出す少女。

なのは「風は空に……星は天に……輝く光はこの腕に……不屈の心はこの胸に……！レイジングハート！セットアップ！」

雲の下まで降りた彼女は、フェイト達を発見した。その場に高町なのはが現われた事に気付いた一同。

当麻「（高町さん…）」

なのは「（上条君…）」

少女の姿を確認したアルフは、当麻を背中に乗せたままなのはに襲い掛かった。

アルフ「フェイトの……邪魔をするなあああ！…！」

当麻「待つてアルフ！…！」

アルフ「当麻！…？」

上条当麻に動きを止められて軽く動搖するアルフ。

アルフ「どうして止めるんだい！…ここからはフェイトの邪魔を…」

アルフと当麻の前に魔法陣が展開されて、そこからユーノ・スクライアが現れた。

ユーノ「違う！僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

当麻「ユーノ君…？」

アルフ「戯言を…」

当麻「駄目だ…」

ユーノに襲い掛かろうとしたアルフを必死に止める少年。彼等の様子を見ていたリンティ達。

クロノ「馬鹿な…何やつてんだ君達は…？」

なのは「（‘めんなさい…命令無視はちゃんと謝ります！けど…放つておけないの…）」

ユーノ「まずはジュエルシードを停止せないと…まずこことこなる…だから今は封印のサポートを…」

魔力で編んだ鎖で魔力流を縛るユーノ。
彼の必死な姿を見たアルフと当麻。

当麻「アルフ！ユーノ君のサポートを…」

アルフ「…分かったよ」

ユーノのサポートを行うアルフ。

ユーノ「…ありがと…」

アルフ「別にお礼を言われるもんじゃないさ…」

当麻「ユーノ君…頑張ろつ」

ユーノ「…うん…」

フェイト・テスターの元へ移動する高町なのは。

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「…」

なのは「手伝つて、ジュエルシードを止めよつ！」

フェイト「え？」

自身の魔力をフェイトに『えたなのは。

そんな彼女にどう反応すればいいのか分からずに戸惑つフェイト。

『Power charge』

魔力を受け取つた『バルティッシュ』が再び強い輝きを放つ。

『Supplying complete』

なのは「一人できつちり半分こ…」

アルフはユーノと協力して魔力流の動きを抑えていた。

上条当麻は空を飛ぶことが出来ない上、彼が乗つているアルフは魔力流に近付くことが出来ない。

しかし、彼はアルフの背中から魔力流に向かつて飛び降りた。

アルフ「トウマ…？」

ユーノ「危険すぎる…！」

当麻「おおおおおおお…！」

バキン…！

魔力流に右手が触れて跡形も無く消滅した。
落下していた少年をアルフが上手に捕まえた。

アルフ「全く…無茶してくれちゃつて…」

ユーノ「本当だよ…」

当麻「う…」めんなさい」

なのは「上条君とユーノ君とアルフさんが止めてくれてる…だから
今の内に…一人でせ」ので一気に封印…」

未だに同様を隠せないフェイトは上条当麻の方向を向いた。

フェイト「（当麻…）」

当麻「（大丈夫だよ）」

言葉は交わさずとも眼で意思の疎通を行つた二人。
ジュエルシードの方向を向いたフェイト。

『Shooting mode.』

『レイジングハート』を変形させて、魔力流を避けながら突き進む
高町なのは。

なのは（一人ぼっちで寂しい時も…一番して欲しかったことは…大丈夫？って聞いてもらひことでも…優しくしてもらひことでもなくて…）

『Sealing form・Set up・

フェイト「バルディッシュ…頑張りつ…！」

なのは「デイバインバスター…フルパワー…いけるね？」

『All right, my master・

二人の少女の足元に魔法陣が展開される。

なのは「せ～の…！」

フェイト「サンダー…」

なのは「ディバイン…」

フェイト「レイジ…！」

なのは「バスター…！」

桃色と金色の閃光がジュエルシーードに直撃する。

その後に、凄まじい衝撃波が辺り一面に広がつて行つた。

局員「ジュエルシーード！6個全ての封印を確認しました！」

クロノ「な…なんて出鱈目な…」

リンディ「でも凄いわ…」

クロノ「そう言えば真紀さんは何処へ？」

リンディ「え？」

この場に結構真紀が居ないことに気付いたリンディ・ハラオウンだった。

封印された6個のジュエルシードが空中に漂っていた。

その場にいる一同はそれを呆然と眺めていた。

なのは「（同じ気持ちを分け合えること…寂しい気持ちも悲しい気持ちも半分こに出来ること。そうだ…やつと分かつた。私…この子と分け合いたいんだ…）」

なのは「友達になりたいんだ…」

フロイト「え…？」

二人の少女のやり取りを眺めていたアルフとコーノと当麻。

当麻「（友達…か…）」

その頃、アースラ内では警告音が鳴り響いていた。

エイミィ「次元干渉！？別次元から本艦及び戦闘空域に向けて魔力攻撃来ます！あ…あと6秒！」

リンディ「な…？」

紫色の閃光がアースラに直撃する。

「ああまあまあ…。」

海上でも紫色の閃光が猛威を奮っていた。

フライト「由さん！？」

その攻撃がプレシア・テスタークサからの攻撃だと知っている少女は困惑していた。

襲つた。

当麻「ぐあああああーー！」

フェイト「当麻ー！」

なのは「上条君ー！」

氣絶してそのまま海上に落ちていく上条当麻。

アルフも少年よりダメージは受けていなか、今の攻撃で反応が遅れてしまった。

アルフ「まずい！！」

「ノーノーのまほじゅーー！」

少年を助けようと急ぐ少女達だったが、思いの外体力の消耗が激しく、追いつくことは出来なかつた。

そのまま海の中に落ちるかと思われたが…

真紀「おっと…」

ガシ！

海に落ちる直前の少年を結標真紀が助けた。

少年が助かつたことに安堵する少女達だが、助けたの人間が時空管理局の魔導師の格好をしている為、警戒しているフェイトとアルフだった。

訓練用のデバイスを片手にフェイト達に近付く真紀。

一定の距離に近付いた真紀の顔を見て驚きを隠せない一人の少女。以前、買い物をしている最中に手伝ってくれた人間が、時空管理局の人間だったのだから。

動搖する二人を無視して真紀はアルフの正面に立った。

真紀「はい」

気絶した上条当麻をアルフの背中に乗せた。

フェイト「え？」

アルフ「どうこうつづりだい？」

真紀「別に他意はないわよ」

アルフの元に近付いたフェイト。

フェイト「当麻は？」

アルフ「それほど酷い怪我してないけど……」

フェイト「私が当麻を連れて帰る。アルフは悪いけど……」

アルフ「分かってるよ。右手には氣をつけてね」

フェイト「うん」

少年の右手に触れないようにその場から移動するフェイト。
しかし……

クロノ「待て……」

フェイトの前にクロノ・ハラオウンが現われた。
ジュエルシードの封印で体力を消耗している上に、少年を抱えたままの少女に戦う術は無かった。

フェイト「く……」

アルフ「邪魔あ……するなあ！」

クロノ「ぐあ……」

アルフの一撃で海に落とされるクロノ。

ジュエルシードを回収してその場から離れようとしているアルフだったが……

アルフ「3個足りない！？」

真紀「『めんなさい』ね」

半分のジュエルシードを回収した真紀に歯噛みするアルフ。

フェイト「アルフ…今は…」

アルフ「分かつてると…フェイト」

魔力弾を海に向けて放つアルフ。

海水が打ち上げられて視界を遮られる高町なのは達。打ち上げられた海水が収まった頃、その場にフェイト達の姿は無かつた。

なのは「フェイトちゃん…上条君…」

『アースラ』

リンディ「逃走するわ！捕捉を！」

局員「駄目です…各部に異常が発生しました！」

局員「機能回復まで後25秒！追いきれません！」

リンディ「機能回復まで対魔力防御！次弾に備えて…」

局員「はい！」

リンディ「それから…なのはさんとゴーノ君、クロノと真紀を回収します」

『時の庭園内』

海上での出合いから数時間後、上条当麻はプレシア・テスタロッサにお仕置きを受けていた。

当麻「ぐ…」

プレシア「（じりして…）いまですかしら？」

フェイト・テスターは守る為に、拷問に近いお仕置きを受け続けている少年。

明らかに『普通』ではない。

お人好しの限度を超えている。

上条当麻の異常性を目の当たりにしたプレシア・テスターは、その事について疑問を感じていた。

当麻「はあ…はあ…」

プレシア「どうして…貴方はここまでするのかしら？あんな人形の為に…」

当麻「フェイトは…人形じゃ…」

プレシア「物の例えではなく、フェイト・テスターは『人形』なのよ」

当麻「それは…じりじり…？」

プレシア「フェイト・テスターは私の娘であるアリシア・テスターのクローンなのよ」

当麻「な…」

フレシア「フェイトといつ名前は『プロジェクトF・A・T・E』の名残なのよ。貴方がこれまで一緒に暮らしてきたフェイトは、『人間』ですらないってことなのよ?」

当麻「…」

フレシア「そんな『人形』の為に貴方はこんな仕打ちを受けてるのよ?」

当麻「それがどうした…」

フレシア「何ですって?」

当麻「フェイトはフェイトだ。アリシアは一人しかいないし、フェイトも一人しかいない」

フレシア「黙りなさい…」

当麻「アンタがやつてることは…アリシアに対してもフェイトに対しても…只の侮辱でしかない」

フレシア「黙れ!!!」

バシイ!!

当麻「ぐ…」

フレシア「何も知らない子供の分際で…分かったような口を…」

何度も鞭で叩かれる上条当麻。

フレシア「はあ…はあ…」

当麻「失った人は…もつ…帰つてこないんだ…」

少年の脳裏に蘇るのは優しかった父親と母親。
事故で亡くしてもう一度と会うことの出来ない人達。
だからこそ、少年はフェイドをアリシアの偽者として扱っている
フレシアが許せなかつた。

当麻「フェイドは…人形じゃなくて…人間だ…だから…」

フレシア「もういい加減に…」

再び少年を鞭で叩こうとするフレシアだつたが…

フレシア「口ホ…」

突如、その場で咳き込むフレシアに疑問を覚える当麻。

当麻「それって…」

抑えていた手に血が付着していた事に気付いた少年。

フレシア「く…」

その場から足早に立ち去るフレシア・テスタークサ。

少年は薄れ行く意識の中でその後ろ姿を眺めていた。
自室に移動したプレシア・テスター・ロッサ。

プレシア「もう…あまり時間がないわね…早く…アルハザードに…」

第26話 アルフの想い（前書き）

少しばかり遅くなつてしまい申し訳ございません。
それでは、第26話始めさせていただきます。

第26話 アルフの想い

海上に残されていた高町なのは達。

リンディ「4人とも戻ってきて…」

クロノ「了解…」

リンディ「それで…なのはさんとユーノ君と真紀には私直々のお叱りタイムです」

真紀「私も…？」

リンディ「当たり前です！勝手に抜け出していくながら…・・・」

真紀「はい…」

『アースラ』

アースラに戻ってきた高町なのはとユーノ・スクライアに結標真紀とクロノ・ハラオウン。

リンディ「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動が貴方達だけではなく、周囲の人達をも危険に巻き込んだかもしれないということ。それは分かりますね？」

なのは&ユーノ「はい…」

真紀「すいませんでした」

リンディ「本来なら厳罰に処すところですが…結果として幾つか得る所がありました。よって、今回の事については不問とします。ただし…二度目はありませんよ?いいですね?」

なのは「はい…」

ユーノ「すみませんでした…」

真紀「以後気を付けます!」

リンディ「さて…問題はこれからね。クロノ、事件の大元について何か心当たりがあるのかしら?」

クロノ「はい。ハイミィ…モニターに

エイミィ「はいはーい

モニターに映し出されたのは一人の女性。

リンディ「あー…」

真紀「誰かしら?」

クロノ「僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師…プレシア・テスター・ロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありますから、違法研究と事故によつて放逐された人物です。登録データと先程の攻撃の魔力反応も一致しています。そして…あの少女…フェ

イトは恐い……」

なのは「(「)の人が…フロイトちゃんのお母さんなの?」」

ユーノ「(多分やうだと思つたけど…)」

なのは「(フロイトちゃんはお母さんの為にジュエルシードを集め
てゐつて書つたけど…)」

ユーノ「(何の為にあのナビジュエルシードを集めさせでるんだ
…)」

なのは「(分からないけど…)」

何やら先程から深く考え込んでいる一人に声を掛ける真紀。

真紀「どうしたの?一人とも?」

ユーノ「な…何でもないで」

真紀「同じ苗字だけ?…」

なのは「フロイトちゃんが…あの時…お母さんって…」

海上でも出来事を思い出す高町なのは。

リンディ「親子…ね…」

真紀「そうみたいですね」

なのは「そ……その……驚いていたとかじゃなくて……何だか怖がつて、るみたいでした……」

真紀「怖がつてゐ……ね」

リンディ「ハイハイ…プレシア女史について、もう少し詳しいデータ出せる?放逐後の足取りや家族構成、その他何でも…」

ハイハイ「はいはい。直ぐに探しします」

リンディ「なのはなはとユーノ君は少し休んでて頂戴」「なのは「は」

ユーノ「失礼しました」

会議室から出て行く高町なのはとユーノ・スクライア。

クロノ「どうして無断で行動したんですか?」

真紀に詰め寄るクロノ。

真紀「何て言えばいいのかしら?強いて言えば…何となくかしら?…」

クロノ「何となくで無断で行動しないで下さによ…」

真紀「「めぐ」めぐ。次からは勝手に行動しない様に気を付けるからね~」

ガツクリと頑垂れるクロノに簡単な謝罪を行つ真紀。

リンクティイ「（真紀…何かあったのかしら？）」

真紀「（出来るだけあの子達の近くに居たほうがいいでしょ？）」

リンクティイ「（不足の事態に備えるためにって事かしら？）」

真紀「（この一件に暗部が絡んでいなかつたら楽だつたんだけどね
…）」

以前、海鳴市で暗部の人間に襲われた事を思い出していた少女。

リンクティイ「（そこまで警戒する相手なの？）」

真紀「（正直な話。空を飛べるこっちが有利なのは確かなんだけど、
相手は殺しに慣れてる連中よ。まだ小学生の子供達には荷が重いで
しちゃう？）」

リンクティイ「（そつもそつね）」

真紀「（それに、学園都市の科学技術の進化の速度は異常よ。サン
プルがあつたとはいえ、フェンリルみたいなデバイスを造つたんだ
から…能力者の存在もあるし）」

リンクティイ「（急がないと危険ね…）」

真紀「（まあそこは…ハイハイ元期待しまじょーが）」

リンクティイ「（そつね）」

エイミィがフレシア・テスター・サムについて調べ始めて数時間後、再び会議室に集合した一同。

エイミィ「フレシア・テスター・サムの歴史によると、26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉『ヒュードラ』使用の際、違法な材料を使用した実験を行い失敗。結果的に中規模次元震を起こしたのが元で、中央を追われて地方へと異動になりました。随分揉めたみたいですね。失敗は結果に過ぎず実験材料にも違法性は無かつたと。辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていました。暫く後行方不明になつて…それつきりですね」

リンディ「家族と行方不明になるまでの行動は?」

エイミィ「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃつてます。今は本局に問い合わせて調べてもらつていますので…」

リンディ「時間はどれくらい?」

エイミィ「一西田中にほ…」

リンディ「ん~…フレシア女史もフェイトちゃんも…あれだけの魔力を放出した直後では、そろそろ動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…貴方達は一休みしておいた方がいいわね」

なのは「あ…でも…」

リンディ「特になのはさんは、あまり学校を長く休みっぱなしでも良くないでしょう?一時帰宅を許可します。」家族と学校に少し顔

を見せておいたほうがいいわ

なのは「はー…」

『時の庭園内』

上条麻のお仕置きが終わって、アルフが少年の下に駆け寄る。

アルフ「トウマ…トウマ…」

氣絶した少年に駆け寄るアルフ。

アルフ「トウマ…トウマ…」

意識の無い少年を抱き寄せた彼女、はブレシア・テスタロッサが居ると想われる扉を睨みつけていた。

ブレシア「たつた9個…これでも次元震は起こせるけど…アルハザードには届かない…！」

ドガマン…！

扉が粉碎されて後ろを見るブレシア、そこにはアルフの姿があった。

アルフ「はあ…！」

ブレシアに攻撃を加えるアルフ。

ガギイ…！

彼女の攻撃は障壁に阻まれていたが、何度も攻撃を行つたことにより障壁が破壊された。

そのままプレシアの胸倉を掴むアルフ。

アルフ「アンタは母親で！あの子はアンタの娘だろ？が！あんなに頑張ってる子に！あんなに一生懸命な子に！…関係ないはずのトウマまで巻き込んで！何であんな酷い事が出来るんだよお！…」

プレシア「…」

全く動じていないプレシアはアルフの腹部に向けて魔力弾を放つた。その一撃を喰らった彼女は遠くに吹き飛ばされていた。

プレシア「あの子は使い魔の作り方が下手ね…余分な感情が多すぎるわ…」

アルフ「フヒイトは…アンタの娘は…アンタに笑つて欲しくて…優しいアンタに戻つて欲しくて…あんなに…！」

アルフの田の前に移動してデバイスを取り出したプレシア。

プレシア「邪魔よ…消えなさい…！」

強烈な一撃を放とつとしているプレシアに対しても魔法陣を発生させるアルフ。

ドゴォン…！

時の庭園から弾き飛ばされたアルフ。

アルフ（ビニでもここ…転移しなわや…）「めでフリード…トウマ…少しだけ待つて…」

フレシア「余計な時間を取られたわね」

上条当麻が氣絶している部屋まで移動したフレシア。

フレシア「（あの使い魔はともかく…この子が反逆したら厄介ね…）

「

魔法の力ならば、ビの様な存在であらうとも破壊することが可能な謎の右手。

ジュエルシードの制御には使えそうもないが、もしアルフの様に牙を剥ぐのならば、ジュエルシードが破壊される危険性さえ有り得る。

フレシア「（対策が必要かもしれないわね…）」

魔法陣を開いて少年をマンションに送るフレシア・テスター・サ

だつた。

『高町家』

高町家にお邪魔していたリンディ・ハラオウン。

彼女は現在、高町桃子とお話をしている最中だった。

リンディ「…と、そんな感じの10日間だったんですよ~」

桃子「あら~そつなんですか~」

なのは「（コンティちゃん…見事な）まかしどうか真っ赤な嘘と言

つか……」

ユーノ「（遠いね……）」

リンディイ「（本当の事は言えないんだですから……）」家族に心配をお掛けしない為の気遣こと言つて下れこ）」

リンディイ「でも、なのせんせんは優秀なお子さんですか～もつ本当に家の子にも見習わせたいへりこですわ」

桃子「あら～またまたそんな～」

リンディイ「息子のクロッカセビツも愛想があつませんで～」

美由紀「なのは… 今日明日へりこはお家に遊びられるんでしょ？」

なのは「うん」

恭也「仕上もアリサもすずかちゃんも心配していたぞ。もう連絡はしましたか？」

なのは「うそ。 わたしメールを出しことたよ」

皿井に向けて帰宅中のアリサ。

アリサ「それじゃあ送信つと」

執事「アリサお嬢様。何か良いお知らせでも～」

車を運転している執事がアリサに質問する。

アリサ「別に～普通のメールよ…あれ？」

窓の外を向いて何かを発見したアリサ。

アリサ「ちよっと止めて…」

車を止めて外に出るアリサ。

アリサ「やっぱ…大型犬…」

その場にいたのは血を流して倒れているアルフだった。

執事「怪我をしていますな…かなり酷いようですね…」

アリサ「でも…まだ生きている…早く」の子を…」

執事「心得ておつまわ」

アルフ「（フロイト…トウマ…）」

第27話 物語を始める為に

『マンション』

フェイト「アルフ…何処に行つたんだろ?」

当麻「それは分からぬけど…早く探しの方が…」

フェイト「そうだね。私はお母さんに話を聞いてみるよ」

当麻「僕は街中を探していくよ」

フェイト「気を付けてね当麻」

当麻「うん」

部屋から出て行つたフェイト・テスター。ロッサ。自身も行動を開始しようとした上条当麻だったが…

当麻「痛てて…流石に少しきつこかな…」

フレシアのお仕置きが想像以上に響いており、苦痛に顔を歪ませる少年。

当麻「だけど…アルフを探さなきゃ…」

痛む身体で街中に出掛ける少年。

アルフの好物であるドッグフードを片手に行動していた少年。

ハ神はやての家に世話になつてゐるのかと考えたが、生憎アルフ

は居なかつた。

当麻「一曰帰ルハ…」

一曰マンショソに戻ることに決めた上条当麻。
帰宅した彼を待っていたのは、浮かない顔のフェイト・テスター
サだつた。

当麻「どうしたのフェイト?..」

フェイト「お母さんにアルフを知らないって聞いたら、アルフは逃
げだしたって言つてたんだ…」

当麻「そんな」とは…

フェイト「私もアルフが逃げ出したなんて思つてないよ…でも…そ
れなら…どうして帰つて来てくれないの?..」

当麻「…」

アルフが誰よりも主人であるフェイトの事を想つてゐるのは、少年
も知つてゐることだつた。
なのに何故、アルフが帰つてこないのか考へる少年。
もしかして、フレシアが彼女に何かしたのではないかと疑う少年だ
つたが、考へてもキリがないのでその事については保留にした。

当麻「とにかく…今日はこれくらいにして…明日も探そう?..」

フェイト「うん…」

『バーニングス邸』

アリサ・バーニングスが傷を負つているアルフを、自宅に連れて帰つて数時間が経過した。

その間に治療も終えたらしく、身体には包帯が巻いてあつた。

アルフ「（う…）」

アリサ「あー目が覚めた？」

アルフ「（あれ？このチビッ子…ビックで…）」

アリサ「アンタ…頑丈に出来てるのね。あんなに怪我してたのに命に別状は無いってさ。怪我が治るまでは家で面倒見てあげるからさ…」

そう言ひてドッグフードを入れた皿をアルフに差し出すアリサ。その際に頭に撫でた少女。

アリサ「安心していこよ」

アルフ「（あ…あの子の…友達なんだ…）」
（う…）

アリサ「ほひ。柔らかいドッグフードなんだけど…食べられる？」

差し出されたドッグフードを食べ進めるアルフ。

アリサ「そんなに食欲があるなら心配ないね。食べたらゆっくり休んで、早く良くなりな…ね？」

『私立聖祥大附属小学校』

翌日、久々に小学校に来た高町なのはは友達であるアリサ・バーングスと月村すずか、浜面仕上に再開した。

すずか「なのはちゃん！良かつた…元氣で…」

仕上「何があつたか良く分わからんねえけど…まあ久しぶりだな」

アリサ「体調は壊してない？」

なのは「大丈夫だよ。ありがとう皆」

仕上「別にお礼を言われるじゃねえだろ」

なのは「いやはは…あれ？上条君は？」

アリサ「それが…なのはが学校を休んだ日以降、学校に来てないのよ…」

仕上「それも無断で休んでるんだぜ？」

すずか「上条君…大丈夫かな？」

なのは「そう…なんだ…」

上条当麻が小学校を無断で欠席する理由に心当たりがある高町なのは。

アリサ「元気だといいけど……」

仕上「あいつは一人で何でも抱え込みそつだからな～」「

すずか「うん……」

なのは「あの……少し話があるんだけど……」

再び小学校を休まなければいけないことを、三人に伝える少女。

アリサ「そつか……また行かないといけないんだ……」

なのは「うん……」

すずか「大変だね……」

仕上「面倒な用事なのか?」

なのは「うん。でも……大丈夫!」

アリサ「放課後は?少しくらいなら一緒に遊べる?」

なのは「うん!大丈夫!」

アリサ「じゃあ……家に来る?新しいゲームもあるし……」

なのは「本当?」

仕上「新しいゲーム!?」

アリサ「やつよ」

すずか「楽しそうだね浜面君」

仕上「そりゃそうだろー新作ゲームだぜーー？」

アリサ「浜面如きに攻略できるかしら？」

仕上「この俺を舐めんじゃねえよ」

なのは「いやはは…」

アリサ「あ…そつ言えばね。タベ怪我してる犬を拾ったの」

仕上「ユーノといい怪我している動物が多いな…」

すずか「犬？」

なのは「どういっ子なの？」

アリサ「うん。凄い大型で、毛並みがオレンジ色で、オデコにね、赤い宝石が付いてるの」

仕上「どんな犬だよ…」

なのは「（それって…）」

その特徴の当てはまる犬？に少女は心当たりがあつた。

放課後、バーニングス邸に来た少年少女達。

アリサが保護したのはなのはが考えていた通りの存在だった。

仕上「犬か」「イツ?」

アリサ「どうからどうみても犬じゃない」

なのは「(やつぱり…アルフさん….)」

アルフ「(あんたか….)」

なのは「(その怪我…どうしたんですか?それに…フエイトちゃんと上条君は….)」

アルフ「…」

アリサ「あらあら…元気無くなっちゃった…どうした?大丈夫?」

すずか「傷が痛むのかも…そつとしといてあげようか…」

アリサ「うん…」

仕上「額に宝石を埋め込んだ犬種…うーん…」

突然、すずかに抱かれていたユーノがアルフの目の前に移動した。

アリサ「ユーノ!危ないぞ?」

仕上「喰われてもしらねえぞ…」

なのは「大丈夫だよ。ユーノ君は…」

「——（なのは。彼女から僕が話を聞こしておくれ……なのははアコサちゃん達と……）」

なのは「（うん）」

アリサ「それじゃあ、お茶にしない？ 美味しいお茶菓子があるの……」
なのは「（うん）」

すずか「楽しみ〜！」

仕上「腹減った〜！」

ゴーノ「（一体どうしたの？ 君達の間で一体何が？）」

アルフ「（アンタがここに居るって事は、管理局の連中も見てるんだろうね……）」

ゴーノ「（うん）」

クロノ「時空管理局……クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ……正直に話してくれれば、悪いことはしない。君の事も、君の主であるフロイト・テスター・サや上條当麻の事も」

アルフ「（話すよ……全部……だけど約束して……フロイトヒトウマを助けるつて……あの子達は何も悪くないんだよ……）」

クロノ「約束ある。フロイト……記録を」

「（うん）」

アルフ「（フェイドの母親…プレシア・テスタークサが…全ての始まりなんだ。）」

フェイ・テスタークサの事情についてアルフから話を伺うクロノ・ハラオウン。

クロノ「それで…上条当麻と君達はどういう関係なんだ？」

アルフ「（トウマは部屋が隣同士だけって関係や…）」

クロノ「何？」

アルフ「（言葉通りの意味だ。トウマは正真正銘の魔法に関わりを持たない一般人さ）」

クロノ「そんな彼がビビりして君達を行動と共にしている？」

アルフ「（ある日）、トウマにアタシ達が魔法を使つ所を叩きされ、簡単な事情を話したら協力するって言い出して、何の関係も無かつたのに…）」

クロノ「たつたそれだけの理由で…」

アルフ「（何度も危険な目に遭つて、怪我もしてゐるのに、それでも諦めなくて…フェイドに対するプレシアのお仕置きも肩代わりして…）」

クロノ「…」

アルフ「（フレシアのお仕置きで、ジユノルシードの捜索中にいた傷が開いて血を流して…）のまじやトウマが本当に死ぬかもしれないんだ…」

クロノ「…分かつた」

その頃、新作のゲームで遊んでいた一同。
高町なのはだけは廊下に移動していた。

ユーノ「（なのは…聞いたかい？）」

なのは「（うん…全部聞いた…）」

ユーノ「（えいじそりまで…）」

なのは「（上条君がそんな事になつてるなんて…）」

クロノ「君の話と現場の状況…そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに…子の話に嘘や矛盾は無いみたいだ…」

なのは「（どうなるのかな…）」

クロノ「フレシア・テスタークサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも、逮捕の理由にはお釣りが来るからね。だから、僕達は艦長の命令次第で、任務をフレシアの逮捕に変更することになる。…君はどうする？高町なのは…」

なのは「（私は…私は…フレイトちゃんと上条君を助けたい…！…アルフさんの想いとそれから私の意思、フレイトちゃんと上条君の悲しい顔は私もなんだか悲しいの…だから助けたいの…悲しいことか

ら。それに、友達になりたいって『伝えたけど、その返事をまだ聞いてないしね』

クロノ「分かった。」（ちからとしても君の魔力を使わせてもらひるのは有り難い。フュイト・テスタークロッサと上条当麻についてはなのはに任せる。それでいいか？）

アルフ「（うん。なのは…だつたね？頼めた義理じゃないけど…だけど…お願い…フュイトヒトウマを助けて…あの子達…本当に苦しくなるんだよ…）」

なのは「（うん。大丈夫。任せで…）」

アリサ達が居る部屋に戻る高町なのは。

アリサ「遅いよなのは…」

すずか「ほひ。新しいダンジョンに入るの待つてたんだよ？」

仕上「早くやるひせー！」

なのは「こやせなは…じめんじめん」

ゲームを再開する少年少女達。

念話でなのはに話しかけるクロノ。

なのは「予定通り。アースラへの帰還は明日の朝。それまでの間に君がフェイトと遭遇した場合は…」

なのは「（うん…大丈夫…）」

ゲームを終えて、ジュースを飲んでいた一同。

アリサ「なかなか燃えたわ～」

仕上「楽しかつたな～」

すずか「やっぱりのはちゃんが居たほうが楽しいよ～」

なのは「ありがとう…」

仕上「上條も早く学校に来て欲しいもんだけ」

アリサ「全くよー」んなに人を心配させて…」

すずか「お…落ち着いて一人とも…」

怒り心頭の二人を宥めるなのはとすずか。

仕上「そういや、今度はいつ戻つてこれるんだ？」

なのは「多分…もう直ぐ全部終わるから…そしたらもう大丈夫だから…」

アリサ「なのは…何か少し吹っ切れた？」

なのは「え?あ…え?と…どうだらう?」

アリサ「心配してた。てか…アタシが怒つてたのはさ…なのはが隠し事をしてることでも、考え方しているわけでもなくって…なのは

が不安そだつたり、迷つたりしてたこと…それで時々…もうあたし達の所に帰つてこないんじやないかって思つよつうな田をする」と

「…」

なのは「…」

オロオロあすかとジコースを飲んでこる仕上。

なのは「行かなによ…ビリにも…友達だもん…ビリにも行かなによ…」

アリサ「あすか…」

なのは「うん…」

仕上「…つーかそれは上條の奴に言つてやつた方が良いんじやねえのか?」

すずか「そうだね」

アリサ「放つておくと何処かに行ひちゃこやつよね」

なのは「うん…」

アリサ達と別れて自転車に向かつ高町なのは。

なのは「(うん…何処にも行かない。私はちやんと…!)」と帰つてくる。只少しだけ…いつもと違つ時を過いすところと…それは…これから先…自分らしく真つ直ぐいる為、後悔しないよつとする為の小さな旅…」

高町家の道場に居た少女。

士郎「良い顔になつたな」

なのは「あ…」

突然現われた高町士郎に軽く動搖する少女。

士郎「迷いは消えたのか?」

なのは「お父さん…なのが迷つてた」と…知つてたの?」

士郎「そりやあやつだ。お父さんはお父さんだからな。明日は朝早くからまた出掛けるんだろ?」

なのは「うん…」心配をお掛けします

士郎「まあ…なのはは強い子だからな。父さんはそれほど心配しないよ。頑張つて来い…しつかりな!」

なのは「うん…」

翌朝に、ユーノ・スクライアと共に家を出た高町なのは。いつの間にか彼女達に併走していたアルフ。思わず頬が緩むなのは。

公園に辿り着いた一同。

なのは「ユノなら…いいね…出てきて…フロイトちゃんここ上条君…」

高町なのはの声に応えるように、彼女達の近くに姿を現したフェイント・テスター・ロッサと上条当麻。

当麻「アルフ…良かつた…無事だつたんだ」

フェイント「アルフ…良かつた…」

アルフが無事で居た事に安堵する一人。

アルフ「トウマ…身体は大丈夫なのかい?」

当麻「大丈夫だよ。全然平氣!」

ユーノ「君は…」

なのは「上条君…」

アルフ「…フェイントウマ…もう止めよう…あんな女の言つ事…
もう聞いちや駄目だよ…フェイントウマ…このままじゃ不幸にな
るばっかりじゃないか!だから2人とも…」

フェイント「だけど…それでも私は…あの人の娘だから…」

当麻「フェイント…」

悲しげな表情をする上条当麻。

実の母親から残酷な仕打ちを受け続けても、ジュエルシードを集め
続ける少女に胸を痛める少年。
バリアジャケットに着替える高町なのは。

なのは「ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃもつとない。きっかけは…きっとジュエルシード。だから…賭けよう?お互いが持つてるジュエルシードを…全部のジュエルシードを…」

『Put out』

『Put out』

少女達が今まで集めたジュエルシードが彼女達の周囲に出現する。

なのは「それからだよ。全部…それから…」

「フ…イト」…

デバイスを構える高町なのはとフェイト・テスタロッサ。

なのは「私達の全ではまだ始まつてもいい…だから…本当の自分を始める為に…始めよつ…最初で最後の本気の勝負…」

第28話 最初で最後の本気の戦い

海鳴市の公園にて、高町なのはと対峙しているフェイト・テスター
ツサは過去の出来事を思い出していた。

彼女が思い出していたのは、遠い過去の話。
とある草原に居た少女と母親らしき人物。

少女の名前はフェイト・テスター。

花冠を作っている女性の名前はプレシア・テスター。

フェイト「（母さん…私の母さん…いつも優しかった…私の母さん
…私の名前を優しく呼んでくれた母さん…）」

花冠を作っているプレシア・テスター。

現在では想像も出来ない程の、優しい笑顔を見せていた彼女。

プレシア「ね！…とても綺麗でしょ？アリシア」

完成した花冠をフェイトに見せるプレシア。

フェイト（アリシア？違うよ母さん…私はフェイトだよ？）

自分の名前はフェイト・テスターであり、決して『アリシア』
といつ名前ではない。

プレシア「あ…いらっしゃい…アリシア…」

アリシアと呼ばれことに違和感を感じていた少女だったが、プレ
シアに呼ばれて彼女の所へ向かった。

近付いて来たフェイトに花冠を被せるフレシア。

フレシア「ほらー可愛いわアリシア！」

花冠を被せられて照れるフェイトを抱きしめるフレシア。

フェイト「（まあ…いいのかな…）」

何故、自分が『フェイト』ではなく『アリシア』と呼ばれるのか、その事について疑問を感じていた少女だったが、現状に満足してた彼女はその事に関して疑問を感じることを止めたのだった。

『公園』

再び目を開けて、高町なのはと睨みあつフェイト・テスタークッサ。

フェイト「（私は…優しい母さんが大好きだから…それに…ずっと手伝ってくれた当麻の為にも…負けられない…）」

フレシア・テスタークッサに元の優しい母親に戻つて貰うために、戦い続けていた少女。

そんな少女を身を挺して守り続けていた少年。空中でデバイスを構える一人の少女。

そんな一人を見守る上条当麻とアルフとユーノ・スクライア。

当麻「…ゲホ…」

よろめく当麻を抱き止めるアルフ。

アルフ「もう…いいんだよ…これ以上…無茶しちゃ…」

当麻「アルフ…」

ユーノ「君達の事情については彼女から聞いている」

当麻「…フェイトには…」

ユーノ「大丈夫…彼女には言わないよ…でも…君は…」

様子のおかしい上条当麻を心配するユーノ・スクライア。

当麻「僕は…大丈夫だから…」

真紀「本当に大丈夫なの？」

突然聞こえてきた声に後ろを振り向く三人。

当麻「真紀…さん」

ユーノ「どうしてここに？」

真紀「まあ…見学つて所かしら…」

アルフ「フェイトには…」

真紀を睨みつけるアルフ。

真紀「大丈夫よ。彼女に手出しする気なんてないわ」

そう言って結標真紀は空を飛んでいるフェイト・テスター・ロッサを見

た。

真紀「（彼女は…自分が『道具』として扱われている事に気付いているのかしら？…つと云はない。フエンリル…広域サーチをお願い）」

『A11 ringt.』

『アースラ』

アースラのモニターで公園の様子を見ていたクロノ・ハラオウンとエイミィ。

エイミィ「戦闘開始みたいだね～」

クロノ「ああ…」

エイミィ「上条君…顔色悪いみたいだけど…」

クロノ「馬鹿なことを…」

フェイト達の事情をアルフから聞いた際に、上条当麻についても聞いた二人。

エイミィは少年を心配して、クロノは心底呆れていた。

エイミィ「真紀さん…本当に良かつたのかな？」

クロノ「艦長の命令だから従うしかないだろう。それにあの人なら…予想外の事態にも対応できるだろう」

「でもクロノ君… 真紀さんは訓練用のデバイスしか持っていないんじゃないの？」

クロノ「あ…」

厳密に言えば、結標真紀は専用のデバイスを所持しているのだが、その事を知っているのはアースラの艦長であるリンクティ・ハラオウンのみである。

その為、アースラ内のメンバーは彼女が訓練用のデバイスしか持ち合わせていないと話されていた。

「…」

クロノ「ま…まあ…何も起きないことを祈るしかないだろ?」

高町なのはとフュイト・テスターが映し出されたモニターに注目する一人。

「…」

クロノ「しつかし…ちょっと珍しいよね。クロノ君がこうこうギ

ヤンブルを許可するなんて…」

クロノ「まあ…なのはが勝つに越したことは無いけど…あの二人の勝負自体は、どちらに転んでもあまり関係ないからね」

「…」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれてる内に、あの子達の帰還先追跡の準備をしておく…ってね…」

クロノ「それより、頼りにしてるんだからね。逃がさないでよ

「…」

ガツツポーズをするエイミィに少しだけ呆れるクロノ。

エイミィ「でも……あの」こと、なのはちゃんと伝えていいの?」

少しだけ雰囲気の暗くなつたエイミィがクロノに尋ねる。

エイミィ「フレシア・テスタロッサの家族と…あの事故のこと…」

クロノ「…勝つてくれるに越したことはないんだ。今は…なのはを迷わせたくないんだ」

エイミィ「でも…あの時の真紀さんは…」

フレシア・テスタロッサについて調査していたエイミィが掴んだ情報を、リンクとクロノと真紀に語つた際に、真紀が見せた表情はあまりにも冷たかった。

普段の飄々とした態度からは想像も出来ない程の雰囲気を醸し出していた彼女。

クロノ「ああ…」

エイミィ「凄く怖かった…」

クロノ「ああ…あんな姿を見るのは初めてだ…」

エイミィ「良く考えたら…真紀さんについて何も知らないよ…」

クロノ「僕も同じだ…ただ…艦長がこの世界出身の協力者って言つていただけだ…」

エイミィ「まあ…真紀さんは真紀さんだよ」

クロノ「そうだな…」

『公園』

戦いを開始した高町なのはとフェイト・テスタロッサ。

『Photon Lancer』

『Divine Shooter』

フェイト「ファイア！」

なのは「シユートー！」

二人のデバイスから放たれる桃色の魔力弾と金色の魔力弾。

魔力弾同士が衝突する事は無く、そのままお互いに向かっていく。

金色の魔力弾を避けて進んでいく高町なのはと、桃色の魔力弾を障壁を張つて防ぎきるフェイト・テスタロッサ。

その隙を見逃さなかつた少女は、再び魔力弾を発射した。

なのは「シユートー！」

少しばかり同様したフェイトだったが、咄嗟にバルディッシュュを変形させた。

『Scythe Form』

一発の魔力弾を避けて、他の魔力弾を切り裂きつつ、なのはに迫り行くフェイト。

フェイトの攻撃に対してバリアを張った少女。

『Round Shield』

強烈な一撃だつたが、攻撃を防ぐことに成功した高町なのは。フェイトの一撃を受け止めている少女は、先程フェイトが見逃した魔力弾を誘導していた。

真紀「上手いわね…」

当麻「フェイト…！」

フェイト「く…」

背後に迫り来る魔力弾に気付いたフェイトはギリギリで障壁を張つて、攻撃を防いだ。

急いで、高町なのはの方向を振り向いたが、その場には誰も居なかつた。

フェイト「え？」

『Flash move』

突如、その場に無機質な音声が響き渡る。

慌てて上空を見上げるフェイト・テスタロッサ。

そこにいたのは『レイジングハート』を構えて特攻してくる高町なのはだつた。

なのは「せえええい！！」

ガギイン！！

『レイジングハート』と『バルティッシュ』が激突した。
彼女達をデバイスの衝突によつて発生した閃光が包む。

当麻「二人とも…」

『Scythe slash』

閃光の中でなのは目掛けて攻撃を加えるフェイト。
間一髪で攻撃を避けた少女だったが、胸のリボンが切り裂かれてしまつた。

一旦、その場から離脱しようとしていたが、彼女の背後には金色の魔力弾が待ち構えていた。

なのは「く…」

『Fire』

迫り来る魔力弾の軌道をバリアで無理やり変更した高町なのは。

ドオン！！

軌道を逸らされた魔力弾は、そのまま海の中に吸い込まれていった。

なのは「ハアハア……」

フェイト「ハアハア……」

ハイレベルな戦いを繰り広げて、予想以上に体力を消耗していた二人の少女。

フェイト「（初めて会つた時は魔力が強いだけの素人だったのに…もう違う。速くて…強い！ 迷つてたら…やられる…）」

初めて会つたときと比べて異常なまでの成長をしている少女を脅威と認識したフェイト。

『バルディッシュ』を構えるフェイト・テスタークサ。

そして、彼女の足元には巨大な魔法陣が現われた。

同時に、高町なのはの周囲に、魔法陣が現われては消えるといった現象が起きていた。

予測の出来ない行動に同様を見せる少女。

『Phalanx Shift』

フェイトの周囲に出現した大量の魔力弾。

警戒するなのはだったが、突然、左手が金色の輪に拘束された。その次に右手が拘束されて身動きが取れなくなってしまった。

アルフ「ライトニングバインド…？ まずい！ フェイトは本気だ！」

真紀「（私のバインドとは違うのかしら？）」

フェイトのバインドには、対象を攻撃する様な能力は付いていないが、それでも対象の動きを封じるには充分すぎる力を持っていた。

ユーノ「なのは…今サポートを…」

当麻「駄目だ……」

なのはに加勢しようとしたユーノを当麻が止める。

ユーノ「どうして…？」のままじやなのはが…

当麻「あの一人の戦いを邪魔をしちゃいけないんだ…！高町さんもそれを望んでない…！」

当麻「あの一人の戦いを邪魔をしちゃいけないんだ…！高町さんも打ちだから…！私とフェイトちゃんの勝負だから…！」

アルフ「でも…フェイトのそれは本当にまずいんだよ…！」

フェイト・テスター・サガ高町なのはに放とうとしている技は、以前上条当麻の特訓で一度だけ使用されたことがある。
無数の魔力弾に圧倒されて、成す術も無く敗北した技。
更に今回は特訓ではなく全力の勝負な為、フェイトの本気の一撃である。

しかし、高町なのはは…

なのは「平氣…！」

フェイト「アルカス…クルタス…エイギアス…疾風なりし天神よ…
今導きの元に撃ちかかれ。バリエル…ザリエル…ブラウゼル」

詠唱を進めるフェイト。

彼女の周囲にある魔力弾が大きさを増して行く。

フェイト「フォトンランサー…ファランクスシフト」

二人の戦いを見守る一同。

フェイト「撃ち碎け、ファイア！！」

バインドによつて身動きの取れない高町なのはに向かつて放たれた雷を帶びた大量の魔力弾。

ビビビビビ…！

少女に直撃する大量の魔力弾。

当麻「高町さん…！」

ユーノ「なのは！」

アルフ「フヒイト！」

真紀「（どうなるのかしらね…）」

残つた魔力弾を一つに収束させて警戒するフヒイト・テスター。煙が晴れた空には…

なのは「いややは…撃ち終わると、バインドっていうのも解けちゃうんだね」

ピンピンしている高町なのはの姿があつた。

ユーノ「す…凄い…」

アルフ「嘘だる…」

当麻「良かつた…」

真紀「攻撃が当たる直前に障壁を発動させた…か…」

フェイト「あの攻撃を凌ぐなんて…」

あれ程の攻撃を凌ぎ切つた少女に同様を隠せないフェイト。
『レイジングハート』をフェイトに向けるのは。

なのは「今度はこっちの…」

『D i v i n e…』

なのは「番だよ…」

『B u s t e r!』

フェイトに向かつて放たれた桃色の閃光。

咄嗟に金色の魔力弾を放つが、桃色の閃光にいとも簡単に破壊される。

障壁を張つて、閃光を受け止めるフェイト。

フェイト「（直撃…？　でも大丈夫…あの子だって耐えたんだから…）」

徐々に押されてバリアジャケットも破れしていくが、何とか攻撃を防いだフェイト。

しかし、高町なのはの攻撃は終わつていなかつた。

なのは「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」

少女の正面に巨大な魔法陣が出現する。

『Starlight Breaker.』

彼女達の周囲に充満していた魔力が魔法陣に集中していく。

真紀「あれは…」

攻撃の阻止を行おうとしたフェイトだったが…

フェイト「なつ…！？ バインド！？」

両手両足をバインドに拘束されて、身動きを取る事が出来なくなってしまう。

なのは「これが私の全力全開！スター・ライト・ブレイカー…！」

今までとは比較出来ない程の桃色の閃光がフェイト・テスタロッサを包んだ。

当麻「フェイト！！」

真紀「大丈夫かしら？」

フェイトを包んだ閃光は、そのまま海に直撃して、大量の海水が上空に打ち上げられた。

『アースラ』

アースラのモニターで一人の少女の戦いを見学していたクロノとエイミィ。

クロノ「な…なんつー馬鹿魔力！」

エイミィ「うわ…フェイトちゃん…生きてるかな！？」

『公園』

なのは「はあ…はあ…はあ…」

相当体力を消耗している高町なのはと意識を失つて海に向けて落下していたフェイト・テスターッサ。

アルフ「フェイト…！」

なのは「フェイトちやん…！」

当麻「フェイト…！」

そのまま海に落ちると思われたが…

真紀「よいしょっヒ…」

ガシー！

上条当麻の時と同じ様にフェイトをキャッチした結標真紀。
そのまま公園に運んだ真紀。

フュイト「う…」

当麻「フュイトー」

アルフ「フュイトー」

フュイト「当麻…アルフ…」

真紀「立てる?」

フュイト「はい…」

なのは「フュイトちゃん…」めんね…大丈夫?」

フュイト「うん…」

なのは「私の…勝ちだよね?」

フュイト「うう…みたいだね…」

当麻「フュイト…」

フュイト「当麻…」めんなさい…」

当麻「良かつた…フュイトが無事で…」ギュ

フュイト「ととと…当麻ー?ーーー」

上条当麻に抱きしめられて動搖するフュイト。

なのば「…」**アアア**

黒いオーラを噴出するのは。

苦笑いするアルフと真紀に震えているユーノがその場に居た。

Put out.

『バルディッシュ』の周囲に、フェイトが集めた全てのジュエルシードが出現した。

クロノ「よしーなのはージユエルシードを確保してーそれから彼女を…」

エイミー「いや…来た！」

クロノ「え？」

少年少女達が居る場所の天候が急変した。そして、上空から紫色の雷が降り注いだ。

当麻「うわああああ！」

フェイト「当麻！！」

アルフ「トウマ...」

なのは「上条君……」

ユーノ「当麻君！！」

真紀「突然ね…」Jの反応は…？」

上条当麻の足元に転移専用の魔法陣が出現して、少年の姿はその場から消えた。

フロイト「当麻あああ…」

アルフ「アイツ…」

なのは「上条君が…」

ユーノ「何が起きているんだ…」

真紀「（コンティヤさん…笨ずいわ…）」

リンクティ・ハラオウエン専用の秘匿回線で念話通信を行つ結標真紀。

リンクティ「（上条君にひこては…）」

真紀「（やつちじやない…見覚えのある反応があるわ…しかも…この反応は…）」

リンクティ「（こんな時に…？）」

真紀「（彼女達を早くアースラに転移させて…）」

リンクティ「（分かったわ…）」

リンクティ「クロノ…彼女達を早くアースラに…！」

クロノ「了解！！」

突然の事態に動搖している少女達を、半ば強引にアースラに転移させることに成功したクロノ・ハラオウン。

クロノ「何故真紀さんが居ないんだ！」

リンディ「彼女には別の任務で動いてもらいます！」

クロノ「…分かりました！」

公園に一人残った結標真紀。

真紀「何とか…全員転移させられた…か…さて…」

彼女の周囲に現われた30体もの駆動鎧。

真紀「学園都市も本腰を入れたって事かしら…」

駆動鎧の1体が一つの機械を取り出した。

キイイイイン!!

その機械から謎の音が出ていた。

それは以前、彼女を苦しめた機械と同様の物だった。
しかし…

真紀「同じ手を何度も喰らうほど馬鹿じゃないわよ。耳栓も意外と役に立つものね」

ヒュン！！

一瞬で背後にある木の上に移動した真紀。自分が戦う相手の数を確認する少女。

真紀「結構骨が折れそうね～」

駆動鎧の1体が凄まじい速度で、真紀が乗っている木の根元に移動して、木を右手で殴りつけた。

ドガーン！！ミシミシミシ…バキ！！ズズウン！！

右手の一撃で容易く粉碎された樹木。

真紀「容赦ないわね～」

地面に着地した彼女を取り囲んでいる駆動鎧達。

真紀「一気に殲滅させてもらひつわよ

小型の機械を取り出す結標真紀。

真紀「フェンリル…セットアップ！」

『Set up.』

赤い光が少女を包んだ。

そして、光が収まった場所にはバリアジャケットに着替えていた結標真紀の姿があった。

その姿は、魔法少女を彷彿とさせる姿ではなく、ビートなく機械的な印象を与えていた。

真紀「目には目を…歯には歯を…駆動鎧には駆動鎧つてね…」

『Armored mode.』

先程とは異なり、漆黒が少女を包む。

そして、駆動鎧達の目の前に現われたのは、漆黒の駆動鎧だった。

真紀「フェンリル…ブレードトンファーで行くわよ」

『All right.』

漆黒の駆動鎧の右腕に埋め込まれた赤い宝石が輝いた。

そして、光が収まつた後、真紀の腕にはブレードトンファーが握られていた。

そのトンファーには赤い色の魔力刃が迸つていた。

真紀「それじゃあ…行きますか！」

ズバア…！

圧倒的な速度で駆動鎧を切り裂いていく真紀。

並みの人間では歯が立たない駆動鎧を蹂躪する少女。

元々高い性能を誇る駆動鎧に、魔力という力が加わり、駆動鎧を圧倒する力を発揮していた。

その姿はまさに『怪物』という言葉が相応しかつた。

ガシャン…－－－－－

銃を構えた駆動鎧が真紀に向けて大量の弾丸を放つ。

学園都市製の重火器であるために、並みの兵器よりも高い殺傷力を持っていた。

真紀「だけど無駄ね」

ヒュン！！

一瞬で駆動鎧の背後に移動した少女。

次々と駆動鎧を破壊していき、残りは僅か3体のみだった。

真紀「はい終了」

ズバア！！

駆動鎧との戦いを始めてから、1分弱で殲滅した結標真紀。

『Empty』

真紀「あらら…エネルギー切れか…まあ…あの子達が戦つてたから魔力は余ってるでしょうね…」

『Absorb mode.』

駆動鎧から、バリアジャケットの姿に戻った真紀。

『Absorb』

一人の魔導師の戦いによって、この場所に残った魔力を吸収した『

フエンリル

シユーリー

魔力が充分に供給されて、輝きを取り戻した『フェンリル』

真紀「うん……これで回復したわ……さて……私もとっとと向かいますか

アースラ

エイ!!「ビンゴー!尻尾掴んだー!」

クロノ「よし！不用意な物質転送は命取りだ！座標を…」

エイミー もう割り出してる! 送ってるよー。」

「武装局員！ 転送ポートから出動！ 任務はプレシア・テスラロッサの身柄確保です！」

時の庭園内

吐血しているプレシア・テスター。サ。

プレシア「ゴホッ……次元魔法は……もう……体が持たないわ……それに……今まで……この場所も捕まれた……」

球状のモーターに映し出された海上の様子を一目見た。

フレシア「フヒイー…あの子じやむひ…駄目だわ…」

傍らの氣絶している上条当麻を見たプレシア。

プレシア「そろそろ... 潮時かもね...」

第29話 残酷な真実

『アースラ』

アースラに移動した少年少女達。

アルフ「トウマを早く助けないと……」

クロノ「フレシア・テスタークサが居る場所には、武装局員達を向かわせている。心配いらない」

フェイト「当麻……」

なのは「上条君……大丈夫かな……」

ユーノ「大勢が局員の人達が向かつたから大丈夫だとは思つけど……」

アルフ「そうは言つても……」

クロノ「とにかく今はブリッジに行くよ……」

少なからず動搖していた高町なのは達をブリッジまで案内するクロノ・ハラオウン。

フェイト・テスタークサは両手に手錠をされていた。

『時の庭園内』

庭園内の廊下と思われる場所に転移した武装局員達。彼等の前には、巨大な扉が見られた。

局員「第二小隊の転送完了しました！」

局員「第一小隊侵入開始！」

ブリッジに到着した一同。

リンディ「おつかれさま」

なのは「あの…上条君は…」

リンディ「もう大丈夫です。彼は私達が助け出しますから」

アルフ「…」

リンディ「それから…フェイトさん…始めまして」

フェイト「…」

リンディ・ハラオウンの呼びかけに応えないフェイト・テスタロッサ。

リンディ「（母親が逮捕されるシーンを見るのは忍びないわね…それにしても…真紀はまだ戻つてこないのかしら…）」

公園に残った結標真紀の安否を心配するリンディ。

リンディ「（なのはさん…彼女を何処か別の部屋に…）」

なのは「（は…はい）」

念話で通信を行うコンディに応えるなのは。

なのは「フェイ特ちゃん… 良かつたら私の部屋に…」

突然、モニターに映し出された映像を見たフェイ特。

局員「総員、玉座の間に侵入！目標を発見！」

ブリッジにモニターに映し出されていた映像には、プレシア・テスマロッサと鎖に繋がれて、身体から血を流している上条当麻の姿があつた。

フェイ特「当麻！！

アルフ「トウママーー

なのは「酷い…」

ユーノ「何て事を…」

リンディ「魔導師でもない子供に…」ギリ

ショックキングな映像を見せられて動搖を隠せないメンバー。

局員「プレシア・テスマロッサ！時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑で貴方を逮捕します。

武装を解除してこちらへ…それと…上条当麻の開放を…」

プレシア・テスマロッサを取り囲んだ武装管理局員達。

時の庭園内の搜索を始めた局員達。
そこで彼等は隠し扉を発見した。

局員「……これは……」

隠し扉の中についた物を見て驚きを隠せない局員達。
その映像はアースラのモニターにも映し出されていた。

なのは「え！？」

驚愕する高町なのは。

何故なら、隠し扉の中には、液体で満たされたガラスケースの中に
『フェイト・テスター・テスター』の姿があつたからだ。

フェイト「あ……ああ……」

ドオン！！

局員「うわああ……！」

ガラスケースに近付いた局員を紫色の雷が襲った。

フレシア「私のアリシアに……近寄らないで……！」

局員「撃てえ……！」

デバイスを構えた局員達がフレシアに向かって一斉に魔力弾を発射した。

しかし、放たれた魔力弾をいとも容易く防いだフレシア。

プレシア「うるせこわ…」

リンディ「危ない!! 防いで!!」

危機を察知したリンディだが、時既に遅く、時の庭園内に居た武装局員達を紫の雷が襲つた。

ズガアン!!

局員「うわあああーー!」

崩れ落ちる局員達。

フレシア「ふふふ…ふふふふふ…ふふ…」

リンディ「いけないー局員達の送還をーー!」

エイミィ「りょ…了解ですーー!」

フエイト「アリ…シア…?」

エイミィ「座標固定ー0120 503ー」

局員「固定ー転送オペレーションスタンバイ!」

アリシアの入ったガラスケースを愛おしそうに触るフレシア。

フレシア「もう駄目ね…時間が無いわ。たつた9個のロストロギアではアルハザードに辿り着けるかどうかは…分からないけど…でも…もういいわ。終わりにする…この子を亡くしてからの…暗鬱な時

間も……この子の身代わりの人形を娘扱いするのも……

なのは「…」

フェイト「…」

モニターの方向を向いて語りかけるプレシア・テスタロッサ。

プレシア「聞いていて？ 貴方のことよフェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに… そつくりなのは見た目だけ… 役立たずでちつとも使えない… 私のお人形…」

エイミィ「最初の事故の時にね… プレシアは実の娘… アリシア・テスタロッサを亡くしているの。彼女が最後まで行っていた研究は… 使い魔とは異なる… 使い魔を超える人造生命の精製…」

なのは「え？」

エイミィ「そして、死者蘇生の秘術…『フェイト』って名前は… 当時… 彼女の研究に付けられた開発コードなの…」

プレシア「良く調べたわね。そつよ… その通り… それにしても…」

鎖に繋がれた状態の上条当麻を見るプレシア・テスタロッサ。

プレシア「この子にはフェイトが『人形』であることも教えてあげたのに… それでもフェイトを庇うなんて… 本当に愚かね…」

フェイト「当… 麻…」

フレシア「貴方は知らなかつたわよね?この子が貴方の身代わりに
お仕置きを受けていた事を……」

フュイト「え……」

フレシア「本当に滑稽すぎて笑えるわ」

アルフ「黙れ!……」

なのは「上条君……目を覚まして……」

フレシア「無駄よ」

クロノ「一般人をここまで傷付けるなんて……」ギリ

フレシア「あら……一つ勘違いしてるみたいだけど……私はそれほどこの子を……傷付けていないわよ?」

クロノ「戯言を」

リンディ「……」

フレシア「私がこの子に始めて出会つた時から、この子は傷だらけだったわよ?」

クロノ「何を言つて……」

フレシア「大方……その『右手』が原因と言つた所かしりつ?」
リンディ「『右手』……ですつて?」

フレシア「本来なら魔法が存在する筈の無い世界で、魔法を完全に否定する力を持つた少年。あまりにも不気味でしょう？」

クロノ「だからといって…」

フレシア「貴方達は」の子の右手の力を、AMGの延長とも考えているのかしら？」

リンクディ「どうこう」とかしら？」

フレシア「うひうひ」とよ

予備のデバイスを取り出したフレシアは、それを上条当麻の右手に触れさせた。

バキン！！

クロノ「なー？」

リンクディ「嘘！？」

ガラスが割れる様な音が響き渡った瞬間、フレシアの持っていたデバイスは粉々に砕け散った。

リンクディ「まさか…上条君を連れて行つた理由は…」

フレシア「そり…」の子に邪魔されたら何が起きるか分からぬのか…」

ユーノ「そんな理由で…」

プレシア「こんなテタラメな力を持つていてる子が、普通の人間と同じ様な人生を過ごせたと思つ?」

リンディイ「まさか…」

プレシア「疫病神の様な扱いでも受けっていたんじゃないから?」

なのは「上条…君…」

フェイト「そんな…」

プレシア「彼についてはこんな所かしら? それにしても…」

プレシアはモニター越しにフェイトの姿を見る。

プレシア「だけど駄目ね…』『フェイト』は『アリシア』になれなかつたわ。所詮作り物の生命は作り物。失った者の代わりにはならないわ…アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我假も言つたけど、私の言つことをとても良く聞いてくれた。」

なのは「やめて…」

プレシア「アリシアはいつでも私に優しかった…」

ガラスケース越しのアリシアの顔を撫でるプレシア。

プレシア「フェイト…やっぱり貴方はアリシアの偽者よ。せつかくあげたアリシアの記憶も貴方じやだめだつた…」

なのは「やめて…やめてよー！」

フレシア「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけの
お人形…だから貴方はもう要らないわ…何処へなりとも消えなさい
！…」

なのは「お願い…もうやめて…！」

高町なのはの悲痛な叫びを全く聞き入れないフレシア・テスタロッサ。

フレシア「良い事を教えてあげるわフェイト…貴方を作り出して
からずつとね…私は貴方のことが大嫌いだったのよ…」

そのまま意識を失つてしまつたフェイト・テスタロッサ。

なのは「フェイトちゃん…！」

ユーノ「フェイト…」

崩れ落ちる彼女を抱き止めるなのは。

局員「局員の回収、終了しました」

リンディ「…」

エイミィ「た、大変大変…ちょっと見てください…」

局員「庭園内に魔力反応多数…！」

クロノ「何だ！？何が起こってる！？」

局員「庭園敷地内に魔力反応！！…いずれもAクラス…総数60…80…まだ増えています…！」

リンディ「フレシア・テスタロッサ…一体何をするつもり…？」

フレシア「私達の旅を…邪魔されたくないのよ…私達は旅立つの…」

フレシア・テスタロッサの目の前に、フェイト・テスタロッサが集めた9個のジュエルシードが出現した。

フレシア「忘れられた都…アルハザードへ…」

クロノ「まさか…？」

フレシア「この力で旅立つて…取り戻すのよ…全てを…」

9個のジュエルシードが輝きを放ち始める。

局員「次元震です！中規模以上…！」

リンディ「振動防御…！」テイストーションシールドを…！」

局員「ジュエルシード9個発動！次元震、更に強くなります…！」

リンディ「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を…！」

『団員「りょ……了解です！」

ハイハイ「アル…ハザード…」

クロノ「馬鹿なことを…！」

ハイハイ「クロノ君…？」

クロノ「僕が止めてくる…！ゲート開いて…！」

ブリッジから出て行つたクロノ・ハラオウンは、アースラの廊下を全力疾走していた。

クロノ「（忘れられた都…アルハザード…もはや失われた禁断の秘術が眠る土地…そこで何をしようって言つんだ？自分が無くした過去を取り戻せるとでも思つてているのか？）」

フレシア「ははは…ははは…はははは…！」

狂つたように笑うフレシア・テスタロッサ。

廊下を走りながらデバイスを取り出したクロノ。

クロノ「どんな魔法を使つたって…過去を取り戻す事なんか…出来るもんか…！」

リンディ「く…」

真紀「何やら凄い事になつてるみたいだけど…」

リンディ「真紀…大丈夫だつた？」

真紀「大丈夫じゃないとこにいないでしょ？状況は？」

リンディ「良くないわね…」

真紀「そつ…」

なのは「…」

決意を秘めた眼でモニターを見つめる高町なのはだった。

フレシア「私とアリシアは…アルハザードで全ての過去を取り戻す
！…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3166y/>

とある魔法少女と不幸な転校生

2012年1月10日12時55分発行